

忠良公	自享祿六年
勝久公	至天文四年
貴久公	

前 舊記雜錄 卷四十四

2113 「國史」卷十 大中公

享祿元年戊子、是年八月改元享祿、自七月以前猶是大永八年、享祿或作享祿非也、續本朝通鑑、享祿取周易程傳、居天位享天祿語、文 伊東氏屯日向小鷹原、志布志領主新納忠勝屯冷水、夏五月朔日、伊東氏擊忠勝、忠勝禦之、敗其前軍、會北郷忠相將八百餘騎軍城ヶ尾、忠勝・伊東各求援於忠相、忠相欲助忠勝、家臣大久保刑部左衛門・有田加賀曰、新納氏不顧同宗之義、動輒侵我財部院、今克伊東軍、則乘勢擊我必矣、不如與伊東氏并兵擊之、以挫其銳、則我邑其免乎、忠相從之、破走忠勝、追至梅北城下而還、據島津支流系圖北郷氏譜、小鷹原・冷水・城ヶ尾並在都城郷 六月二十日、大翁公

2114 「西藩野史」

與北郷忠相感狀曰、嘉乃軍功、賞以財部院、汝宜領之、據島津支流系圖、北郷忠相固已有財部院矣、而大翁公感狀云云、蓋若云改賜之、然 秋八月二十日改元、據和 九月十日、大翁公賜菱刈大和守重副青木・長尾、重副、忠氏之孫也、據大翁公舊譜、菱刈孫太郎系圖、菱刈忠氏見第十二卷文明十七年、大口郷有青木村・長羽村、屬目丸村、長羽讀曰奈加遠、疑是長尾

享祿元年戊子 大永八年八月二十日享祿ト改元、
 忠兼公勝久と改稱す、
 天文元年壬辰 享祿五年七月二十九日天文と改元
 十一月、北原民部少輔兼孝伊東大和守尹祐と日州に戦ふ、兼孝救を豊後守忠朝に求む、忠朝北郷讚岐守忠相・樺山美濃守廣久に議して、軍を發し下河内に戦ふ、二十日、伊東か軍潰乱る、忠朝等か軍大に進んで、八代長門守 伊東 を殺す、伊東か軍死する者三百八十餘人、尹祐野々美谷を新納近江守忠勝に與へて退く、
 二年癸巳
 三月、豊後守忠朝伊東尹祐と日州三侯に戦ふ、尹祐敗走す、落合刑部丞 伊東カ臣、時に高城ニ有リ、叛して密に北郷忠相に通す、忠相・忠朝高城を襲ふ、落合内應して城忽に陥る、忠朝

入て是を守る、於是梶山・勝岡・山之口 共伊 東か領、悉く城を捨て遁る、

三月 二十 日、日新公南郷を復す、初公南郷を 忠兼公に

賜て、後桑波田孫六 初南郷 をして是を守らしむ、孫六叛し

實久に黨す、日新公是を討せん事を謀る、然共孫六能

守て間を得ず、盲僧了公に命而、敵の動作を聞きしむ、孫

六衆を卒し出で城外に狩す、了公 日新公に告す、一説、

士門松新弥左衛門 古船記、天文三年癸巳三月十日の事 公竊に軍を發し南郷を襲ふ、留守桑波

田河内守、同式部少輔迎へ戦ふて死す、城陥る、公城

に入り兵を遣して孫六を追ふ、於是南郷を改て永吉と號

し、傳に曰、此時日新公の軍、悉く孫六の眞似して城に至る、城兵孫六が煽れるとして門を開く、突進て城陥ると云、按に、南郷天文

十六年より十九年に至て右馬頭忠將領す、慶長九年申、了公か功を賞務大輔豊久、嗣子中務大輔忠榮に賜ひ、今に傳領す。

し宅地を加世田 按に、此時未忠良公の領、田布施・伊作・高橋に非ず、阿多を誤る歟。

に賜て盲僧の長とす、傳に云、盲僧ハ比叡山の末流にして、天台を宗とす、山中志野尾の妙音寺に登て官に

任す、後廢壞して盲僧官に任せず、忠久公國に入るの時、盲僧實山檢校、頼朝公の命に因て從來て、伊作中嶋に居す、世々相繼て十三代淵脇壽長院に至る、南郷に功有と云、按に、了公後に壽長院と云歟、家村家の記

院に於て、了公伊作に居す、初家村重實と云、六代の孫今の家村彦左衛門是也、或記云、伊作田尻村了公寺に、了公を葬り石塔あり、今與國寺と云、十五世長倉常徳院、元和五年八月、家久公伊作より鹿兒嶋に召て

宅地及び崔明王の本尊を賜ひ、且地神堂を造立して賜ふ、夫より相傳て今の淨業に至る、又上古に、盲僧淨破薩州に來り頼廷に居し、末流今に存す、又盲僧信清、妙香天を守護し、義山と同じく來り高尾、勝久野に居す、末流信清、妙香天を守護し、義山と同じく來り高尾、勝久

公比志嶋、河田 按に、飛驒守義秀なるへし、皆房村を領す、駿河守

義朝か父也、比志嶋・河田、其先源為義の三男志田

三郎先生義憲に出つ、義憲の二男村上三郎左衛門尉頼重と云、信州に住す、故有て薩州に配せらる、滿家郡可長平か女を娶て男子を生ず、上總法橋榮尊と云、頼重赦を得て信州に帰り、榮尊外祖長平の讓を得て滿家院を領す、數子あり、長を比志嶋太郎佐範と云、比志嶋氏の祖也、二を西侯弥三郎と云、西侯氏の祖也、三を河田右衛門佐盛佐と云、河田氏の祖也、四を城前田榮秀、五を邊牟木榮慶と云、孫有、盛佐か、曾孫掃部助義立、一寺を河田に造立して大川寺と号す、△傳云、西侯弥三郎郡山の内西侯を領す、後に伊十院氏に奪る、是より伊十院氏に屬す、又浦生家に從ふ、弘治年間浦生没落の時、入を遣し、日新公に告て曰、來に移居す、其後鹿兒嶋に移る、 日新公に告て曰、先に貴久公を養て子とするの時、寶器許多 綱切の太刀、額朝公の旗等也 出つ、を譲れり、今既に父子の交を絶つ、何そ重器を留めて己か有とするや、日新公曰、器物に至てハ父子の誓約に預るへからず、一たひ人に與へて返さんことを求るハ礼にあらず、二使復命す、勝久公猶求て止す、

日新公怒て曰、既に佞奸に誤られ、前約を變し信を失ふのミにあらず、又寶を貪て義を忘る、君猶強て求めは我巳事を得ず、兵車を以平原廣野に會して後是を返さん、古船記、天文三年九月ともあり、 後平田右馬助勝八月十四日、蘭田五藤兵衛潛に告て曰、實久永吉を襲んとす、日新公即 貴久公をして永吉城に入て是に備へしむ、實久是を知らず、鹿兒嶋の軍を卒し永吉城尾頭を襲ふ、日新公五十餘兵を卒ひ、急に進て其後を撃つ、貴久公の軍城中より突出して其前を撃つ、實久前後顧る事能はず、七百三十人 數十餘人を撃れ、漸く遁れて鹿兒嶋に歸る、先是日置城主山田式部少輔有親も又實久に黨す、日新公の武威日

三郎先生義憲に出つ、義憲の二男村上三郎左衛門尉頼重と云、信州に住す、故有て薩州に配せらる、滿家郡可長平か女を娶て男子を生ず、上總法橋榮尊と云、頼重赦を得て信州に帰り、榮尊外祖長平の讓を得て滿家院を領す、數子あり、長を比志嶋太郎佐範と云、比志嶋氏の祖也、二を西侯弥三郎と云、西侯氏の祖也、三を河田右衛門佐盛佐と云、河田氏の祖也、四を城前田榮秀、五を邊牟木榮慶と云、孫有、盛佐か、曾孫掃部助義立、一寺を河田に造立して大川寺と号す、△傳云、西侯弥三郎郡山の内西侯を領す、後に伊十院氏に奪る、是より伊十院氏に屬す、又浦生家に從ふ、弘治年間浦生没落の時、入を遣し、日新公に告て曰、來に移居す、其後鹿兒嶋に移る、

「天文三年十二月十三日取之」
くに盛なるを見て大に恐怖し、日置を獻して降る。公

是を免し山田に移らしむ、然とも彼か降れるハ其情にあ

らず、故に後の患を慮り、人をして有親を佛坂ノ地、伊作

誅せしむ、八月二十四、〇按に、日置ハ山田氏世領の地也、先に日

波田氏か初南郷に主として、日新公の爲に猶南郷

を守るか如きか、大永六年十一月の分計と考へし、

三年甲午

閏正月、嶋津豊後守忠朝、日州妖肥福嶋主 豊州家三代、日州三侯院高城

伊東大和守尹祐領、按に、貞久公の時、肝付八郎兼重高城に居して三侯

持久爰に移り、寛正六年に至り十三年居す、明應四年或云文明、伊東尹祐

日州山之口・梶山・勝岡・野々美谷を掠取る、豊後守忠朝忠昌公に告て

曰、高城を伊東に与ふ、三十九年を経て天文二年、北郷忠相、忠朝と共に

高城を攻む、落合内應して城陥り、忠相入て是を守る時へ、尹祐復高

城を復す、忠朝是より勢を得て、續て志布志、初榊井頼仲領す、

志布志を取、氏久公是を追て爰に居して、新納越後守實久に賜ふ、七

世傳領して近江守忠勝に至る、天文八年七月二十六日、忠勝没落して忠

朝是を領す、廿一年を経て、末吉、後に三百五十町、梅北、後梅北八十

永祿五年、肝付省鈞掠取ル、ヲ貴久公に獻す、町ヲ北郷持

久に、安樂・松山、傳云、是より後天文八年三月二十九日、大崎貴久

與フ、同四月廿一日、安樂・設樂降る、七月廿

五日、忠朝の土平田新左衛門松山城を取る、忠朝の孫忠親に至て、平山

越後守忠智是を守る、永祿二年四月十四日、忠智志布志に趣く、肝付省

約半途に是を殺て松山城を陥る、忠智か子、を并領し、勢ひ遠近に

振ふ、忠朝天文九年三月三日、七十五歳

にして卒す、其子忠廣封を襲ふ、

十月五日、川上大和守昌久、川上家十代、初、末弘伯耆守、子孫川

貞治五年創立、開山無外圓照和尚と云

右衛門と云、寺傳云、和尚ハ皇子たるか故に、皇字

を以て寺号とす、曹洞宗福昌寺、に殺す、初、勝久公末弘及び

の末寺なり、山を永谷山と号す、

小倉武藏、子孫小倉四郎右衛門也、碓山・竹内等の佞臣を親み、忠良

公を遠さけ、政事人望に背く、故に昌久等の舊臣十六人

上書して諫れとも聽す、末弘等却て昌久を讒す、昌久等

社稷の傾覆せん事を悲み、欺て伯耆守等を谷山皇徳寺に

殺す、勝久公恐怖して根占に走る、群臣等諫れとも猶

豫して還らず、

四年乙未

勝久公謀をめぐらし、川上昌久を殺し給ふ、昌久ノ墓吉野

於是先に諫る處の十餘人、罪の及はん事を恐れ、各城に

籠て害を避く、勝久公の勢、益孤也、實久時の至れる

を悦ひ、軍を卒ひ鹿兒嶋に入、村市を焚く事七日、火光

焰々として晝夜を弁へす、勝久公大に驚き隅州帖佐に

走る、實久鹿兒嶋に在て暴逆度なし、勝久公又遁れて

般若寺に至り、北原・祁答院の二氏に寄る、又去て庄内

都城に至り北郷家に寓し、八九年を経て豊後國に遁る、

按に、母公大友氏なる、日十五沖

濱に薨す、享年七十壹、大翁妙蓮と諡す、後、綱貴公神主

按に、勝久公四男二女あり、第一ハ女也、十三歳ニして卒ス、母ハ實久

の姉なり、二ハ益房丸、後に修理太夫忠良と稱す、天文四年七月五日、鹿

兒嶋北城に生れて、九十四日ニして公帖佐に走る、母ハ祇禊式部太輔重

就女也、故に益房丸ヲ懷て称媛に遁れ、七歳にして伊東修理太夫祇禊に

據ル、後國に帰り、元和四年十一月二十二日、八十四歳にして卒す、高山昌林寺に葬る、三ハ又六郎久孝と云、男子あり、豊後乱に他郡へ走ル、四ハ女子、大友家ノ一ノ臺となる、江戸に卒す、五ハ又四郎と云、豊後乱に他郡に走ル、六ハ宗俊ト云、兄又四郎の為に殺さる、忠良の子、長ヲ又四郎良久と云、永祿五年生る、十七歳にして義久公の命に由て僧となる、曾於郡念佛寺十世ノ住持タリ、忠良の二男も亦僧となる、正圓と云、天正十九年、太守公の命に由て還俗し、藤野久左衛門秀久と稱す、後に除髪して恕世と云、我邦君の重器八幡ノ太刀、般若ノ劍、宗近ノ太刀、血吸ノ劍傳へて恕世にあり、悉く太守公に献す、世ミの重器となる、恕世六世の孫藤野休右衛門是なり、忠良ノ三男を虎房丸と云、後龜山又兵衛忠辰と稱す、季子タリと雖、兄二人僧となるか故に、父忠良の後となる、六世の孫龜山長太夫是也、今や年俵百二十五俵ヲ賜フ

2115

又當時此方殺生禁断之間、にへ之事欠申候、大望こそ

候へ、諸事可申承候時者、相互ニ可申通候、追而恐々、

誠仲陽之御慶賀重疊雖申舊候、尚以不可有盡限候、多幸候、抑如此之御祝言承候、御満足之至候、以御同前候、其堺御左右承候、大慶候、此方茂無相違候、從以前之以筋目承候、是又御同前候、何様筋目之時者、可申承候、

万吉、恐々謹言、

「享祿元年カ」

二月廿一日

日新御判

謹上

攝津守殿

御返報

(上書) 謹上

攝津守殿

御返報

相模入道

日新

(本文書ハ二〇八二号文書ト同一ナルベシ)

2116

「勝久公御譜中」

一享祿元年戊子、改忠兼爲勝久也、

「貴久公御譜同文也」

2117

「勝久公御譜中」

「正文在菱刈李助」

加官之事、承候早、然者宜被任大和守者也、仍狀如件、

大永八年三月廿九日

勝久(花押)

2118

「日新公御譜中」

去年、忠兼再入鹿兒島居守護位、而後享祿元年戊子、改忠兼稱勝久也、

2119

「貴久公御譜中」

喜入攝津祖父嶋津三郎四郎法名義連代ニ、拙者祖父ハ又十郎と申候、其比勝久と、伯圍様御敵之刻、伯圍様ハ伊作へ被成御座候、何も諸士勝久方ニて候、然處ニ三郎四郎・又十郎御談合申、伯圍様へ可申入候、左候而ひしと御味方ニ可相究通申候而、又十郎伊作へ罷出可申入旨相企候、(谷山・川邊方何も敵ニ候故、通道難成候付、喜

入之尾たぶと申所より、山之まゝ堂之尾ニ出、山之寺より金峯山之腰ニ出、伊作へ六度參上申候、其内ニ谷山・川邊之道待ニ被見合、數ヶ所手をおひ候へとも、彼方へ罷出ひしと御談合相究候、然時 伯圍様上意被成候者、又十郎心差之通御失念被成間數候、本之すかたニ可被成召由候而、其首尾として御長刀拜領申、于今我等覺悟申候、巨細有之候へとも、先大方如此候、右ニ申候喜入家より、 伯圍様へ忠節之段々無其隱儀候条、定而細々相知申候はん、口能不及申上候、右者、此度以御廻文、諸所へ被仰渡候、御先祖より古キ覺共候ハ、可申上由候間、御手前迄申事候、不入儀候ハ、則返可被下候、已上、

辰ノ

十月廿一日

伊集院与左衛門

有馬平内左衛門殿

〔張紙左ノ通〕

〔實久公之時、御奉公被申候次第、細ニ有之故、年代相違候得共、記

于此者也〕

2120

〔北郷讚岐守忠相譜中〕

享祿元年戊子五月朔日、新納近江守忠勝日州中之郷内將數千兵陣于冷水、伊東氏將數千兵陣于小鷹原、伊東寄來

2121

〔庄内平治記〕

于冷水與新納相戰、伊東之先陣敗亡矣、忠相將八百兵陣于城ヶ尾、時伊東亡後援、新納亦乞後援、忠相曰、新納氏爲一族、將爲後援、汝等謂何、家臣大久保刑部左衛門・有田加賀白、新納得勝利、然雖加勢于新納、豈功名乎、且聞、新納氏忘一家好、而動窺從高祖資忠所領知之財部、新納氏得大捷、益其勢彌侵財部乎、先戮力於伊東、擊新納壓其威、長持吾財部城、堅日州之鎮衛、而報 太守公之厚恩可乎云云、忠相唯諾橫擊于新納陣、伊東又同時突戰、新納陣大破、追北到梅北城戸口、得首七百三十級、此日、北郷民部少輔久剛・同息三郎四郎戰死于城ヶ尾、北郷攝津介闕死于梅北横尾、家臣池袋肥後討死于黒坂、

一其比新納近江守忠勝者、伊東氏と不和にして、互に雌雄ヲ争ふ事あり、新納ハ梅北城ニ據て士卒を指揮し、伊東ハ小鷹原に陳して、享祿元年五月朔日、兩陣の兵發出して冷水ニ於て挑戰ふ、時ニ伊東打負て、北郷讚岐守忠相ニ勢を乞ふ折ふし、忠相ハ城ヶ尾ニ陳ヲ取、兩家の勝劣を見られる、新納も又忠相に援兵ヲかるに依て、忠相士卒ニ向ていわく、伊東・新納の兩雄勢

を乞こと他ならず、伊東ハ古來の讎敵也、新納ハ一家の好ミ有り、親キヲ以てせハ、新納ニ力ヲ乞ふべし、勝劣ヲ量ニ於ては伊東軍ニ打負たり、所詮、親きに隨て新納ニ力を合べし、汝等如何思ふと有りしに、家臣大窪刑部左衛門尉・有田加賀申けるは、臣今軍の勝負を見るに、新納ハ頗る勝利を得、伊東ハ殆と敗亡せり、案するに、弱をすて強きに合せられんハ、豈是將士の功ならん乎、其上新納忠勝ハ一家の好ミヲかへりみず、動もすれハ、御高祖資忠公より相續て、譜代不變の御領地を侵す事いくたびや、今又新納ニ力ヲ添ハ、勝事を一戦ニゑて弥雅威を働へし、不如伊東ニ勢を合、忠勝か陳を横撃して多年の讎を報し給へと、餘義もなく申けれハ、忠相此儀ニ應諾し、都合八百餘騎の兵卒、新納か陳ニ打向て眞蕪ニ突て掛る、伊東も是ニ力を得て、同時に鯨波を擧て透間なく喚て掛レハ、新納ノ勢打負て、梅北ヲさして逃たりける、味方の勢勝ニ乗り、奔る敵ニ追すかふと、かしこに追詰、爰に切ふせ、已に梅北の城戸ニ至て、忠勝か宗徒の一族、兵卒以下に至まで七百三拾人を打れける、忠相の一族ニも北郷民部少輔久剛・嫡子三郎四郎城ケ尾ニそ討死し、北郷攝

2122

「殉國名數中」

津介忠次ハ横尾ニ打れ、池袋肥後守ハ黒坂にて討死す、其外士卒ニ至るまで討るゝもの多かりけり、初メ新納忠勝か方より小鷹原の迫ニ兵ヲ伏せ、伊東か勢を偽引出し、伏兵を俄ニ起して、伊東か勢多うたるゝと也、後の軍ハ城ケ尾・冷水・黒坂・横尾の原等、新納か兵散乱すと也、其邊の切合か窪なといへる處是有り、小鷹原東方鷺巢村の内ニ首塚有り、新納兵の首級葬處と云々、亦太刀洗迫と稱する地有り、此時遺蹤、僅古老の説ニ残り而已、

享祿元年戊子

五月初日、新納讚岐守忠城始四郎九郎、式部太輔と云、松山て、伊東義祐兵と庄内冷水に戦て死之、時き河陣援を北郷忠相に乞ふ、忠相伊東を援けて北郷民部少輔久剛・其子三郎四郎・北郷攝津介忠次・池袋肥後守宗重等死之、故新納四郎九郎忠嶺、忠城に新納も死傷するもの多し、尾張守忠友・新納左京亮忠祐是久の孫なり、庄内平治記に在りと、考新納上野介忠尊或ハ左兵衛尉に作る、非欤、同左兵衛尉忠安忠尊の子、二郎五郎ともあり、

2123

「北郷忠相譜中」

財部者、元從 貞久公所讓與資忠也、大永八年六月二十日、太守勝久公賞忠相軍忠潤色、而又賜感牘、有正文左寫之、

2124 大隅國財部院之事、依軍忠宛行所也、早任先例、可有領

知之狀如件、

大永八年六月廿日

勝久(花押)

北郷左衛門尉殿
(忠相)

2125 「豊州家忠朝譜中」

「案文在都城衆野邊惣右衛門」

貴國鉾楯之儀、于今無靜謐之由、其聞候之条、無御心元被存候間、被進狀候、每事匠作と御一味之由候、尤可然候、早々無事御調儀、可爲肝要之由候、仍太刀一腰金覆輪無、織色五端被進之候、猶委細傳芳院可有演說候之条、省略候、恐々謹言、

「大永八年」

七月廿三日

杉

三河守興重

謹上 嶋津豊後守殿
(忠朝)

2126 「同上」

先度雖染筆候、依通路不轍候、不相届候、抑當國念劇之儀無心許候、每事匠作有御一味、靜謐之調儀可然候、仍太刀一振、織色五端進之候、猶杉三河守可申候、恐々謹言、

「大永八年」

七月廿三日

義興
(大内)

嶋津豊後守殿
(忠朝)

2127 「正文在新納楚弓」

近年匠作与不和之由、其聞候、如何候哉、縦雖子細候、以前々筋目、早々御和睦之儀可然候、猶杉三河守可申候、恐々謹言、

「朱力半」

「享祿元年」七月廿三日

義興(花押)

嶋津近江守殿
(新納忠勝)

「上包」
大内殿よりの書狀

享祿元年

「此書、近江守忠勝譜中ニ在リ」

2128 小宰相殿頼娃殿へ用段にて越候、申子細候間、從其茂諸

事可然様ニ御催促頼存候、就彼儀、用一行候、恐々謹言、

〔慶享祿元年〕

九月六日

〔喜入忠誓〕
攝津守殿

勝久〔花押〕

2129

〔勝久公御譜中〕

〔正文在菱刈左助〕

薩摩國牛屎院之内青木・長尾兩名之事、依忠節宛行所也、早任先例、可有領知之狀如件、

大永八年九月十日

勝久〔花押〕

菱刈大和守殿

〔上包〕
菱刈大和守殿

勝久

2130

〔豊州家忠朝譜中〕

〔案文在都城來野邊惣右衛門〕

如蒙仰候、爲御專對御往還之次、奉遂拜顔候之条、祝着之至候、其已來者、依遠遠閣筆候、令失素意候之處、預尊翰候、誠畏入存候、殊兩種拜領賞翫仕候、於向後甚深可被懸御意事所庶幾候、兼又先年御光儀之時、前皇様御紹書并濟々致頂戴候、勅答令達之候之處、慮外之次第不及是非候、於當御代者、先加斟酌候、依御助言、可得其心候、仍雖些子之儀候、椀一束令進獻候、此旨宜預

御披露候、誠惶敬白、

〔大永八〕
壬九月九日

天界寺

尊答衣鉢侍者禪師

2131

〔豊州家忠朝譜中〕

〔正文在志布志野神村帶刀〕

日州安國寺事、爲 副使可有渡唐之由申遣候、領納候之樣、御意見可爲祝着候、尚陶安房守・杉三河守可申候、

恐々謹言、

十月六日

〔大内〕
義隆〔花押〕

〔忠朝〕
嶋津豊後守殿

2132

〔全上〕

御札之趣令披見候早、抑就當方之鉾楯、御屋形様御書、同以傳芳院被加御懇儀候、誠畏入令存候、何様勝久如本意、可屬無爲候哉、當時之儀御使者委曲申入候之条、不置筆端候、御太刀一腰令進覽之、旁可然様御執申所仰候、恐々謹言、

〔大永八〕

十月

豊後守忠朝

謹上 杉三河守殿

2133 「公上」

就當國念劇之儀、被添御心蒙仰候之条、誠畏入奉存候、殊先度被添芳翰候之處、至路次滯留之由、御懇切之儀候、爰元之趣、定修理太夫可令申候之哉、仍御太刀一振・織色濟々忝致拜領候、從是御太刀一腰、聊表御祝礼候、以此旨、宜預御披露候、恐惶謹言、

「大永八年」
十月

豐後守忠朝

謹上 京兆様

貴報人々御中

2134 「豊州家忠朝辭中」

「案文在都城衆野邊惣右衛門」

其後連々雖申入度覺悟候、當家之念劇、更以依不相止執亂、無音之至非疎略候、已前佐伯御成敗之事、其遠遠之故、已後風聞候条、兎角不令申候キ、于今無是非存候、當時伊東祐裔其方御助言之儀も候欵、鹿兒嶋爲一味、對新納鉾楯最中候、忠朝事者、所詮、無爲之本意候之間、其懇望仕候、不坏雖申事候、自然之儀奉憑候外無他候、

例之爲飛脚、此節乘令進候、委曲申合候間、不能詳候、恐々謹言、

「大永八年」
極月

忠朝

本庄新左衛門尉殿
御宿所

2135 「國史 卷十六 大中公」

二年己丑春正月二十二日、祇答院伊勢守重武陷帖佐本城及新城、明日陷山田城、肝付越前守三郎五郎改兼演取加

治木、據大翁公舊譜、舊譜止書祇答院重武、伊勢守據斑目藤左衛門家藏祇答院氏系圖、山田城遺城、在始羅郡山田地頭館東十七町餘、係上、重武、重度之孫也、據祇答院氏系圖、祇答院、冬十一

月、北郷忠相與本田氏戰于春山原、獲首五十二級、據島津支

流系圖、曾於郡鄉有春山原、是歲島津忠朝與新納忠勝・禰寢孫次郎清年後改稱式肝付兼演・本田董親・樺山幸久・島津忠幸忠幸

部少輔初名、運久不詳其年、治部太輔・阿多飛驒守等會於鹿兒島、謀靖故仍書初名、國亂、造朝見 大翁公、既而不得復見、皆愠稍稍引去、

大翁公聞之、大驚自追忠朝、乘舟至下大隅、不及、據島津支

流系圖、樺山女佐自記、女佐自記此事無年、然言女佐在十七歲時事、按女佐生於永正十年癸酉、至於是歲己丑則適十七年矣、故書之於此、又自記云、島津實久遣治部太輔・阿多飛驒守會鹿兒島、島津支流系圖、久第四子伊勢守秀久、秀久子治部少輔忠將、天文元年忠將死於中郷

之戰、忠將者實久之從祖父、子孫爲吉利氏、此云治部太輔疑是忠將、阿多飛驒守忠清五世孫曰飛驒守忠雄、此云阿多飛驒守、豈此人歟、忠清見

第十卷永享四年注、清年、忠清之孫也、據小松氏系圖、彌齋忠清見第十二卷文明十六年。

三年庚寅、初 圓室公時、使島津出羽守忠明守大口城、

以備求麻相良氏、相良氏攻大口城、忠明擊破之、賜忠明

大口三百五十町、以賞軍功、相良氏與菱刈相模守重州合

兵、攻大口城、秋七月二十七日、忠明戰死、重州取大口、

相良氏遣兵戍之、忠明、忠福之子、重州、重副之子也、

據島津支流系圖、菱刈孫太郎系圖、島津忠福見第十二卷文明八年注、大口城即牛山城、亦見文明八年注、是歲本田氏攻

曾於郡、那答院氏助之、地頭北郷久利不能禦、以城授本

田氏而去、北郷忠相救曾於郡、不及、乃圍西城、清水人

來救、忠相引去、據島津支流系圖、曾於郡城西、有西城遺墟。

2136 「勝久公御譜中」

享祿二年己丑正月廿二日、那答院重武入帖佐本城・新城

於手裡、翌日、山田城亦陷以領知、於茲乎、蒲生氏離其

黨徒、乘其變、肝付越前守攻返加治木也、

2137 「年代記有之」

一享祿二年己丑正月廿二日、那答院重武帖佐之本城・新

城入手裏、翌日、山田城攻陷以爲領知、雖然、蒲生某

返改、故那答院格護之加治木、肝付越前守攻落畢、

2138 「伊地知季安考」

一按日新公譜、前此大永七年丁亥五月六日、到于加治木

誅伊地知父子、到于帖佐鬻島津世加、兩城共以入警衛

之兵、百事無所闕、而後解纜於帖佐松原云々、又伊地

知民部少輔重辰譜云、爲帖佐新城地頭守之、所謂警衛

之將也、因載原文、備于考耳、

2139 「見伊地知季右衛門重政自記」

一第四嫡子重辰、法名永林久長居士者、「實、誤ナルヘシ」太守高久公之御

當代、永正の頃、大隅之内帖佐新城之地頭賜之、彼城

へ重辰父子在番之砌、從澁谷家催多勢被攻新城、其時

重辰嫡子小次郎ニ語て云、大軍寄來之間、雖防戰終責

落さるへし、然へ重辰者新城之主頭として可遂戰死、

其故者、父子一所ニ雖遂戰死、全以忠功之無全、守護

御無勢之間、小次郎者衆中の子共を卒し、敵陣を切通、

吉田の城ニ楯籠可抽忠節、曾以各不可爲未練、若於不

遁者、無是非籠城、討死父子可爲同前旨申含也、依之

任父命、小次郎者人數五六人一味し、大勢の中に懸入、

向敵を散く切捨、吉田の城ニ楯籠也、安のことく

新城者父重辰討死矣、此時系圖悉相捨也、

2140 「右馬頭忠將譜中」

一享祿二年己丑正月廿二日、忠良攻山田城、忠將爲從軍、此時十歲、初陣也、

2141 「殉國名載中」

享祿二年己丑

伊地知新四郎 吉田にて戦死と有り、年月なし、此に誤考、下同し、 長谷場九郎重純、
町田相左衛門忠英、

正月廿二日、伊地知民部少輔重辰 澁谷伊勢守重武、那谷院の兵を帥ひ来て帖佐新城を攻む時、其成將にて奮戦死之、季通か祖なり、 村田肥前守經堯 帖佐に戦死と有り、年月なし、此日、重武帖佐本城も陥すと有り、蓋時の成將歿、誤考、

村田氏系圖を按るに、村田肥前守經安の子、越前守經貴、享祿二年己丑正月廿二日、加治木落城の時、七十歳にて戦死と記せり、追考すへし、

二十三日、本田爲親 俗名詳ならず、那谷院より帖佐を押領する山田城も陥すとあれば、時、山田城に討死と有り、此日、重武帖佐の成將歿、此に置て誤考、 眞玉民部左衛門重博 帖佐山田に戦死、年月詳かならず、亦重武此日ニ陥せは、時の成將歿、後考を俟

九月三日、島津次郎四郎明久 出羽守忠明の子なり、菱刈氏と羽月大島村に戦ひ死之、年十六歳、忠明は、宮原十郎兵衛尉 明久の臣にて、大口の成將たり、亦同じく戦死、

此年二月、岡元八郎 百次ニ於て戦死とあり、
同年、入来院淡路守重長 入来院氏家臣にて、同じく戦死と、公室ニ敵する歿、

2142 「大島氏系圖」

出羽守忠明之子、次郎四郎忠次 異本ニ次郎四郎明久トアリ、又戦死ノ時十六歳トアリ、考ス、

菱刈入道天岩爲繼敵、屢犯大口、享祿二年己丑九月三日、於牛屎院大島、爲菱刈之兵被斬獲、家臣有宮原十郎兵衛尉者、斬獲討忠次之當敵、而取返忠次之首、持大口來、再進戰場遂戰死、今一人共往戰死也、其後崇二人之靈、號西原八幡前神三者也、

2143 「勝久公御譜中」

「正文在奈良原清左衛門」

今度子息弥六左衛門討死之事、忠節之至感悦候、殊於其場之動無比類之由候、名譽不可過之候、愁歎之中、定而被開喜悅之盾候哉、忠勤之辻、何様對實久可申之外無他候、恐々謹言、

二月一日 勝久(花押)

「上包」 奈良原帶刀允殿 勝久
奈良原帶刀允殿

2144 「勝久公御譜中」

「正文在奈良原清左衛門」

御慶重疊、猶以不可有盡期候、萬幸々々、隨而御子息様、於加治木御奉公御申候、無比類御高名之由、風聞候、尤就此等之儀、早々可申入候處、于今遲滯候、失本意と存候、御心底推察申計候、心事、恐々謹言、

二月十五日

宗吉(花押)

奈良原殿
御宿所

2145 「案文在楚弓」

就三州動乱之儀、和融御裁許之尊翰并預御使僧候、恐悦無極候、爰元之躰、傳芳院巨細御存知之前、不能書候、

恐惶謹言、

享祿二年款

二月十六日

近江守忠勝

進上

大内殿

貴報人々御中

嶋津

進上 大内殿

貴報人々御中

近江守忠勝

「此書、忠勝譜中ニ在リ」

2146 「入來家臣岩出氏藏」

於篠原口合戰ニ、二階堂大和守爲矢射付御忠、末座被緩候、子々孫々不可有相違者也、

大永九年己丑三月廿四日

東郷左馬助重隨(花押)

岩出因幡守輔共(花押)

牧田吉右衛門尉殿

2147 「重富船津村森永門仲太郎藏」

以參和□相談□然□度々忠朝江以使□被申合、鹿兒嶋此方方之間、□相定候、爰ニ肝付□子細今少不調候て、出顔延引之様ニ候、重而被進□間、可事成候也、さ様□急度出頭可被申候、於其時者、五日も十日も前ニ、其方へ御音信可被申候、將又當時吉松爲番、伊東衆被籠候由風聞候、乍御覺悟、此節一段可入御用心候らん、尚期後信候、恐々謹言、

伊東衆被籠候由風聞候、乍御覺悟、此節一段可入御用心候らん、尚期後信候、恐々謹言、

候らん、尚期後信候、恐々謹言、

卯月廿四日

限江伊勢守
匡久(花押)

本田參河守殿

御宿所

尚々此方之事、葛蒲之比者、加世田へ可存立覺悟に社候へ、

先日伊地知より來候市來野之栗毛之事、此間以秘藏雖立置候、今度藝州凡物語之趣者、從其御望間敷被思通候之間、只今引せ進之候、爲父馬被差置候者、可爲祝着候、將亦、此程堺目細く敵相働候、雖然於申木野、敵十人計討取て社候へ、事々期來信候之条、閑筆候、恐々謹言、

〔享祿二年〕

五月二日

貴久(花押)

攝津介殿

〔当十六歲御時〕
貴久

昨日卅朝、市來衆至申木野現形候、五ヶ所御同前候間、御満足察存候、於爰其堺之御立柄者、如何候哉、委細預示度候、此等之趣、進入使僧候間、閑筆候、万期來喜之時候、恐々謹言、

〔享祿二年〕

六月一日

日新

(曾入忠誓)
攝津守殿

御宿所

〔享祿二年空山日記〕

一六月一日淨法寺瓜〔茄子〕なすひ預候、ほそをち候、清三郎瓜なすひくれ候、左四郎左衛門多〔左目備〕へ禮ニ遣候、雨少ふり候、せの公料又乘藏かこ嶋平田とのへ進候、宮内卿殿〔藏主〕御下候事、源ゑもん百疋弥七ニ渡し候、茶あふり候、〔空巴〕くう〔永〕ゑん〔箱〕ゑいしゆく一斤候由申候、今年麥之日記、

七郎左衛門上候、いさくより使僧越候、意趣へ市來衆申木のへ被出候由にて候、

〔候、一去三日曉、吉松伊東衆以引〔〕西城被詰候、遠江殿父子三人こくちはまられ候、然者野上屋敷切入候處ニ合戦候、遠州三ヶ所深手之由候、太郎左衛門殿敵刀にて四ヶ所切付候、又六郎殿ハすり手ニ候、城衆各之勤者、いまた尔々不聞得候、和〔〕又五郎殿ハ打死候、敵ハ十四五人も矢所ニ射殺候へ共、敵よりも拵にて不退候、此方よりも頸不取候、午剋程ニ敵引退候、さ候程ニ城衆軍候、内々清水・姫木衆被續、涯分被動候、中にも紀伊殿被動候て、大手負ニ被成候、手之衆ニ小嶋・伊勢辛勞申て候なる、今度城衆油断にて衆無越度候、誠々、

〔玄佐日記〕

2153

一豊後守忠朝、勝久御屋形餘ニ御難儀之躰を歎被思召、鹿兒嶋江在御參上、一家國之衆江者被成催促、三ヶ國和平以御懇望、出頭之人衆、新納近江守忠勝・祢寢孫次郎・肝付三郎・本田紀伊守、其數ニ助太郎十七歳ニ〔享禄二年也〕而出頭、其折節、一瓢様・又六郎殿、實久よりハ治部太輔・阿多飛彈守、各々鹿兒嶋へ出仕候、屋形江雖出仕候、屋形様折々も無御對面、たゞ私之寄合計ニ而、一人二人ツ、在所江歸、其比佐多殿・攝州其外南方之衆ハ、元々より之御奉公ニ而出仕有り、中比ハ三ヶ國珍敷晴之參會之様躰共と諸人も思わるれ共、豊州儀物さひしけに被成御歸帆、其時勝久様御驚候か、下大隅迄雖御渡海候、無甲斐、忠朝御甥右衛門太夫鹿兒嶋へ御禮ニ而、是も御歸帆とそ申傳ける、

其後無音非本意候、仍祢〔祢寢〕・肝〔肝付兼統〕彌懇ニ被申候、就其候て、色々校量候、然者何様にて、此度可開運可目出度候間、大寺美作介被進候、不殘御底被仰出候者可然候、將又庄内弓箭、益重難義候、雖然、今之組中被相當事者、去廿日頼敷有之候、豊懇ニ被仰候、様々聞置候らん、先々可然候、返々八月に成候ハ、世間一途可有候也、其内何様

2154

にも指寄度候、如何被思召候哉、是非御急候て專一候、恐々謹言、
〔享禄二年カ〕 六月八日
〔堀本城主〕 本田因幡守殿
 御宿所

又か子御立候、又遅御遣候て、舟にもものせず候、否せ御合力にてこそ候へ、但、かこへ御音信可有候ハん、又各庄内へ番之事、已四郎殿にて被仰候義、所々より無沙汰候とて、ことのほかの御述懐に候、爲御心得申候、

貴殿さま此境就御越、御音書則懸御目候、御悦喜之由申せとて候、仍早々可有御渡海候之處ニ、祢寢殿・肝付殿御待候之間、延引候、來十六舟津まで兩家可被立にて候、相州へ飛脚御まいらせ候、去十一歸來候、又六郎殿可有御出頭候、順逆殿様御法第と御頼にて候、世中先々可然こそ候へ、此節境目く一段用心可入事ニ候、恐々謹言、
〔享禄二年カ〕 六月十三日
〔關江伊勢守〕 匡久〔花押〕

限江
 匡久
〔上書〕 山田安藝守殿
 御返報

「空山日記享祿二年己丑六月」

十一日、かこ嶋へ舟より参候、暮候て罷着候、

十二日、豊州へ参候、やかて朝めしたべ候、其より

御内へ参候、

十三日、吉田へ屋形様御續候とて、河上まで御發足

候、御供仕候、豊州中途迄御供候、

十四日、豊州へめし参合候、一日さけにて候、雨ふり

候、

十五日、御内へ参候、

十六日、兩寺へ参候、其より豊かりやにて双六にて候、

十七日、珠全にて双にて候、新納殿着候て、其よ仕

候、四打時分罷歸候、

十八日、深野殿にてめしにて候、大徳寺ふろにて候、

拙者宿にて双六、旁夕めしにて候、祢寝・肝付着之

由候、中間新六歸し候、十九日、新納殿へ禮申候、

十九日、屋形へ一日祗候候て、備中とのにて夕めした

へ候、

廿日、豊州にて双にて候、其より栂山殿へ・紀しとの

へ禮申候、新納殿被懸御意候、本紀いと・又五郎

との被懸御意候、

廿一日、豊州へ旁よりあひにて候、給黎より替衆來候、

廿二日、刑部与三中間共歸し候、日置殿江薪五十束、

阿多飛瀨殿三十束遣候、其晚氣、御屋形へ御寄合

にて候、夜半程歸候、御屋へ新鷹御上候、

廿三日、福昌寺へ新・豊・栂・本紀・池越・珠全・相

松・我等ときにて候、其より豊へ夜入まで、双にて

候、其朝肝付方禮ニ被來候、同越後方被來候、實久

より使者給候、

廿四日、肝付殿、同越後殿へ禮ニ行候、其より大徳寺

へふろにて候、其より豊へ参候て双にて候、田源給

遣候、

廿五日、丸弥七多もんきいれへ遣候、祢寝殿被懸御意

候、夜ニ入候て伯着守殿御使候、

廿六日、隼人介・弥八吉田番へ立候、かこ伊勢守殿よ

り使僧預候、三所より岩見守越し候、栂山殿江夕め

し寄合申候、

廿七日、興國寺へ旁へときにて候、腹中けにて不参候、

廿八日、談議所へ御ときにて候、一日なくさるにて候、
八日、勝久公ヨリ平等王院快輪法印ニ、東侯ノ大平ヲ如前々、其外厚地等
忠久御寄進ノ如ク番附セラル候、此ニ云談議所ハ平等王院ナラン
其より豊州へ双にて候、

廿九日、豊州へ双にて候、

七月一日、新・肝・祢・豊御禮申候、旁被懸御意候、了

忠より書狀預候、そめ物出来候、

二日、雨ふり候、

三日、末弘殿・筑前守殿・豊同道にて、指宿儀承候、

其より祢寢入道殿寄合にて候、三もし所よりひこ太

郎遣候、新納四郎三郎とのよりそめ物被遣候、

四日、深野殿よりひん被遣候、ひこ太郎歸し候、又四

郎とのより与三き衛門被遣候、其よ八打候て、祢寢

方より使者候、

五日、祢寢・肝付此間へ前後のあらそひ候て出仕なく

候、依其祢寢入道、去二日ニ參上候て、四日よ兩家

出仕候、

五日朝、祢寢方勞めしにて候、拙者氣分ニより候て罷

ましき由申候、原兵朝めしより合候、指又四郎殿よ

り使僧越候、為左より書狀被遣候、新納殿より使者

預候、かのし預候、為より以上三人使僧候、肝付

殿太刀おりかミもたせ被來候、

六日、長田三もし所より使ニ越候、ふたりよりさつし

やう遣候、肝付方返報式部もたせ遣候、

ニ御下り候、

七日、新・肝被懸御意候、其よ豊へ參候、旁候へハ使

者以禮申候、

八日、丸曉より氣分煩候てゐ候、新より明日御寄合之

由使者候、氣分よりて不參候、

九日、肝付方より、明日十日めしのよし候、氣分煩候

間、參ましき由申候、

十日、吉田より隼人介歸候、左馬殿より肝付中間傳書

狀預候、同豊へミせ申候、豊よりひねり相添進候、

左よりたご荒卷五被遣候、

十一日、屋さまへ御寄合にて候、御座敷しゆい一御屋、

二新、三攝、四祢寢、五二郎五郎との、六ニ池袋

越後守、きやくい一豊、二祢寢入道、三柘山殿、四

肝付、五ニ珠全、六ニ本田紀伊守、御めし過候て、

ふりうのう五はん、のう過候て、御ていしん御座敷

同前、中城より御酒預候、

十二日、肝付方へ寄合ニ候へ共、氣分けにて不參候、

備中との・平田方屋兵双にて候、半ニ肝より使者以

よはれ候へ共、不罷出候、給黎より替衆來候、泉福

より酒樽一、堀之内・ひはら・まきのそのより樽二、

九郎兵へ所より樽二遣候、藥師堂よりひきちや被遣

候、

十三日、替衆歸候、野崎つるを二めくれ候、左目嶋入

道との、ほしいかみ袋五もたせ候て預候、弥七郎ニ

遣候、

十四日、天氣よく候、水まつり候、

十五日、旁々へ禮申候、祢寢・肝付被懸御意候、其朝

給黎より乗誠使ニ越候、左馬との昨日十四日ニもと

ゆいはらい候よし申候、

十六日、屋さまへめされ候て、河田方申事承候へとの

儀候、其より豊州へ池袋殿同道候て罷出、如此之時

宜申候、こしき嶋とのより小河式部との使ニ被遣候、

其夕方一瓢より本房使僧ニ被遣候、山十うち夜ニ入

候て被來候、田嶋入道とまり候、刑部來候、

十七日、ぬの二、きいれへ遣候、晚氣旁々双六にて候、

珠全へれんか之由候、其よきいれより指宿事へ實之

由注進候て、夜半程暇申候、

十八日、かこ嶋罷立候、當所へ未ニ參着候、やかてゑ

・指宿へ使僧遣候、

十九日、ゑより陽馬方使ニ越候、指宿より二郎ゑもん

との、とくゑい使ニ越候、

廿日、指宿平城へ座主淨法寺使ニ遣候、興國寺・池袋

殿泉福へ御出候、越前進候、やかてぬくミのことく

入御候、其便ニ平田殿より刑部御屋之由書狀預候、

廿一日、野くひかさいわせ候て、おさきかき同前候、

ゑへ田源遣候、又ぬくみ坊主東道様御使ニ被來候、

廿二日、ひこ太郎かこ嶋へかミしもたせ遣候、

廿三日、指宿よりけうち使僧被來候、ゑへ書狀遣候、

ゑよりも書狀來候、ひこ太郎歸候、

廿四日、藤さへもん方越候、東堂様より使僧給候、ち

らミ方御使ニ越候、十郎三郎殿指宿へ通候、肝付三

郎殿より前田刑部少輔使ニ越候、長野刑部少輔鹿へ

進上申候、左京かれいくれ候、

廿五日、白濱たれたて候、同そこの普請させ候、中俣

ゑもんとの越候、

廿六日、隼人介ゑへ指宿之時宜ニ越候、乗誠指宿へ遣

候、東堂様御歸之由候、

廿七日、又四郎殿・中侯殿越候、【転退去らせ乎】天たいさらせ候、

廿八日、上堀之内より八昨日之酒樽一くれ候、【山王園】さんな

ふその、しほ屋より火入とて、しほ二くれ候、かも

んまきりのかき居候、【狐雲】こうん江罷候、かこ嶋上下そ

め候て來候、

廿九日、左まとのより書狀被遣候、【中馬ヶ】中満との越候、【和泉】治

部とのより使者被遣候、

晦日、ふろすのこかゝせ候、かこ嶋へ田代源左衛門尉、【朔也】

八昨日之御物もたせ進上候、中間新六御太刀一腰、【雜子】

御かたひら二たん、おく江くれない五十からけ、【紅】

尚々ハ、又此狀夜前認候、【六月十八日也】今朝巳刻、【兼就也】肝付三郎殿渡

海候、今日者悪日候間、【十九日也】定明日可被相懸御目候哉、

次ニ桃山殿未渡海候覽と存候、隨而庄内之時義、御

左右可然候、祢寝殿ハ例之延にて候哉、未舟着候、

去十六日、從肝付殿被進使僧、同十七御出頭、可目出度

之由候条、同十七巳刻程、被解纜候、從時分思之外吹

晴候て、安々^{（アツ）}与御出船候、一里程紀伊守殿被挽出、御

迎御出候、

一遠干かたにて候間、御座舟從渚遙被留候、然處、地下

之海士共餘多御舟ニ添手、汀ニ引のほせ候、一見物貴

賤多く、合手おかみ候キ、且者そゝろおもはゆく、一

御舟着候へハ、從豊州以大村方、舟本ニ御礼候、一御

宿ニ御出候へハ、以二郎四郎殿豊州へ御礼御申候、一

此前にて候者、老中まで御着之御礼雖可被仰候、そ忽

之狀被思召候間、斟酌ニ候、此等之趣、以大寺方豊州

へ被仰候、無其御返事、同從御屋形様大寺治部少輔方

にて、遮而着之御礼被仰候、其御礼以二郎四郎殿御申

候、老中へ恒吉佐渡方にて被仰候、一御宿ニ最前伊地

知殿・梶原殿被參候、其後池袋殿・平田殿被參候、其

後實久御内之方阿田飛彈殿被參候、

一殿様御宿ニ遮而豊州御出候、其後以紀伊守殿御屋形様

ニ早々殿様御對面可有之由、被仰出候、其御覺悟候へ

と内義候之条、如佳例御酒御上候、【忠朝也】豊州戌刻程ニ御

屋形へ御指出候て、早々御參候へと被仰候条、やかて

殿中へ御參御目御懸候、目出度候、一殿中被明御隙御

退出候刻、眞幸使僧・本田紀伊守殿・同又五郎殿以同船

參着候、音信御門外にて被聞召、豊州以談合此等之趣

被窺候處、【阿久】緯深候間無對面候、【十八日也】明日者悪日候、來十九

可有御覽之由、被仰出候間、殿様各ニ先以御見參候、
 一此間者、連日風雨以之外ニ候つる處、御出船之砌より
 天氣能候て、爰元仕合如意満足ニ候、偏ニ天道ニ御相
 叶候也と頼敷存計候、何事も〳〵被任御心候、却おそ
 ろしく存候、此方之時儀ハ可然候、至爰庄内三ヶ所印
 一ヶ所も越度候てハ、何之曲も有間敷候、御油断有ま
 しく候、
 一周防殿・壹岐殿以別紙雖可申候、此方取乱、又者便舟
 急候間、不能巨細候、此等之由可預御心得候、又此狀
 を兩所へ可有御遣候哉、しふしへハ申上候、爲御心得
 候、萬期後音候、恐々謹言、
 「享祿二年」
 六月十七日
 「限江伊勢守」
 匡久在判

「享祿二年空山日記」
 (本文書ハ一七九一号文書ノ後半ト同文ニツキ省略ス)

尚々申候、御名乗之事、御校量可然候、但不可過御
 思安候、
 「忠勝」
 殿様此境就御滞留、御音信御申之趣、致披露候、御祝
 着之由被仰候、

一御屋形様 殿様へ被召御酌候、然者則 殿様御腰物御
 進上候、則 御屋形様御腰物 殿様江御取せ候、其外
 色々御懇之儀ニ候、
 「忠勝元祖」
 一時久御奉公如前代御申候へと、以面御頼候、如此候条、
 殿様威勢不申候、
 一相州御出頭相定候、
 一祢・肝座敷之上下依被争候、出頭延引、豊殿色々以御
 辛勞、
 「忠兼公」
 「御屋形様江被懸御目候、目出度候、
 「日新公」
 一實久・相州御間、御和融之義、是又御料理最中候、
 一責様御名乗 御屋形様御名乗ニ候、如何御分別候哉と
 殿様御意候、爲御心得候、毎事期後音候、恐々謹言、
 「当享祿二年己丑」
 「忠勝家老限江伊勢守匡久」
 七月十日
 匡久(花押)

「庄内平治記」
 一享祿二年十一月廿八日、忠相と本田氏と春山原にて合
 戦し、本田か士卒五十余人ヲ打取ぬ、忠相と日來快か
 らす云々、

山田安藝守殿
 「忠忠」
 御返報
 限江
 匡久

2160

〔北郷忠相譜中〕

享祿二年己丑十一月二十八日、忠相出軍、與本田氏合戰于春山原、得首五十二級、

2161

〔樺山氏七代信久譜中〕

〔正文在樺山源三郎久清〕

契諾

一如御證文、世間如何様雖爲轉變、無相違可申承之夏、一自然御隙入、同可奉頼番々時者、猶以相互不可有余義之事、

一如此申合候之間、和讒凶害之時者、互可申披之事、

右條々偽申候者、

〔牛玉〕

日本國中大小神祇、殊ニハ伊勢天照大神宮 八滿三所

大菩薩 霧嶋六所大權現 天滿天神 諏訪上下大明神

御野可蒙候也、

享祿二年己丑十二月廿六日

伴久兼(花押)

〔信久〕
桃山殿

北原

〔上包〕
桃山入道殿

御返報

久兼

2162

又馬之事、預御尋候、當時指馬共所持候、御意之様ニ和泉近者候へ共、更不任所存候、去月末ニも罷越候程、涯分見申候へ共、彼方にも一向候へず候、さてハ長嶋より駒御渡候ける、御浦山敷候、万残多候、何様重而、

追而御慶重疊、抑當春立柄等預御尋候、御懇之至候、無相替義候、其方御同前之由、尤肝要之義候、 御屋形様

・新納殿無盡期就被召合候、御氣遣之様承候、尤之義候、至拙者共も如何ニ可成行候哉と存計候、志布志御方弥被仰談候之由承候、誠可然候、將又初千代殿へ可被仰談之通承候、誠目出度可然存候、万端猶期後信候、恐々謹言、

〔享祿三年之〕
二月七日

〔妻刈大和守〕

重副(花押)

肝付殿

御返報

2163

〔北郷忠相譜中〕

同三年庚寅、本田氏攻曾於郡城、祁答院氏爲本田合力出張曾於郡、城兵雖防戰、依難凌大敵、遂渡城於本田氏、地頭北郷次郎右衛門久利移都城、其後忠相帥師至曾於郡圍西城、攻上塀涯、本田住城清水城兵來加防禦最堅、忠

相察此城不可急拔退兵、此時北郷左京亮忠貞・井上半左衛門於城口戰死、

2164 「庄内平治記」

一去ヌル大永六年ニ、忠相曾於郡ヲ陥れ領地せられしよりこのかた、本田か鬱懷胸ニみち、享祿三年庚寅、曾於郡の城ヲ攻て再ひ我有ニなさんとす、祢答院なにかしも本田に力ヲ合んため曾於郡ニ出張す、城兵防戦とハいへとも、多勢ニ無勢、叶すして城をハ本田ニ付屬して、地頭北郷二郎右衛門尉久利都城ニ歸りける、其後忠相兵ヲ卒し、又曾於郡に發向し、西ノ城ヲ押開、已ニ屏涯ニ攻登りしに、本田か住城清水より敵軍多勢救來て、防禦尤堅固也、忠相此城の輒ク攻落かたきヲ覺り、速ニ退陳せらる、此日、北郷左京亮忠貞・井の上半左衛門尉城戸口ニて戰死せり、茲歲忠親男子生、二郎忠豊と号ス、後左金吾時久と改ム、

2165 「殉國名數中」

享祿三年庚寅

二月廿五日、山口將監重昌百次善應寺の戰に死す、

五月三日、北郷左京亮忠貞四世知久二男、信久三代の孫なり、宗子忠相に屬きて曾於郡城を攻め、本田氏と、北郷氏の臣なり、井之上半左衛門

七月廿七日、島津出羽守忠明出羽守有久の孫なり、圓室公の時、忠明をして大口城を守らしむ、菱川重州、相良氏と謀て大口城を攻む、忠明防禦の術を失ひ、此日自殺す、一族戰死するもの多し、後忠明の靈を西原八幡と崇む、十一月十一日、小野田小五郎實致北郷氏臣なり、曾於郡に戰死す、

2166 「正文在新納氏」

「忠勝御判有へく候」

日州内藏之條山々須楚之門、有馬七郎左衛門尉仁充行處、於子孫々不可有相違者也、仍證狀如件、

享祿三年三月

2167 「川上氏藏書」

薩摩國市來院之内河上名十二町并牛江三町之事、爲忠節

賞所宛行也、早任先例、可有知行之狀如件、

享祿三年卯月六日(享) 勝久(花押)

河上上野介殿

2168 「大島氏系圖」

出羽守有久「久豊四男」

二代
出羽守忠福

室者 太守忠國主第十二女也、法名笑岳、

三代
出羽守忠明

薩摩州牛屎院大口者、爲他邦之封疆、承 太守之命
移于此地、警衛之際、相良某發軍來於球麻、構對陣
於大口、迫于我者甚急也、是以請援兵於鷹、雖然諸
方凶徒蜂起最中、不得發救兵云々、 忠明運籌策陷敵
陣、然而相良某遁退去也、 太守感其忠功、賜大口
三百五十町、而居住于當院、爰有菱刈某法師天岩者、
與相良某俱謀而攻於大口城、失防禦之計策、享祿三
年庚寅七月廿七日自殺、而城亦陷矣、法號祥山瑞公
居士、號大瑞院、其後崇敬而號西原八幡、其社在大
口矣、天岩入大口於手裏、相良亦入守兵、領知者數
年也、經數多春秋之後、 太守貴久公深含其憤欲攻
大口、先祈誓願於西原八幡、而後有 太守之勝利、
蓋神靈咸其誠心也、忽以如斯、因茲每年十月十三日、
使一院之人齊明盛服以承祭祀、且有鐫流馬也、

忠經

又次郎 播摩守

大口落城之時、依不在遁戰死、候南方四箇所、賜

少地所領知也、雖然無幾程病死者也、法號慧林常

知、

又次郎忠清

攻岩釵城之時戰死、年十八、

竹崎播摩守忠家——十右衛門忠商寬永十六年生

2169

「大島氏系圖」

出羽守忠明之子

次郎四郎忠次

女子

本田刑部太輔室

女子

享祿三年七月廿七日、被攻陷大口城、父忠明自殺之

時僅二歲也、爲當敵菱刈氏被生捕、遁其死漸成人、

而後嫁高城某產男子、卽忠泰也、

2170

『感應寺文書』

普門寺住持職事、任先例、可被執務之狀如件、

享祿三年十月十七日

左大臣義時判

2172 (本文書ハ二四三号文書ト同文ニツキ省略ス)

2172 「國史」卷十 大翁公 大中公
梅岳君

四年辛卯春三月八日、大翁公以寄進狀付快瑜法印云、

以滿家院東侯大平木場爲平等王院領如故、據大翁公舊譜 秋八

月二十三日、公及梅岳君與穎娃左馬亮盟、據梅岳君舊譜 按穎娃

左京系圖、山城守兼心之子兼

洪初稱左馬亮、後稱山城守。

天文元年壬辰、是年七月改元天文、自六月以前猶是享祿五年。 秋七月二十九日改元、

據和 事始、伊東氏與北原氏鬩、北原某乞援師於島津忠朝、初

圓室公時、忠朝以三俣院高城、與伊東尹祐、出於一時固

圍之計、據島津支流系圖、至是以爲、宜因此際取高城、乃

島津内膳家譜、 與北鄉忠相等謀、冬十一月二十五日、屯三俣院、伊東修

理大夫義祐將一萬餘騎救高城、二十七日、忠朝・忠相・

北原某合兵攻高城、城中出兵接戰、忠朝・忠相等大破之、

追北至石山越、斬城主八代長門守以下數百人、據島津支流

譜、島津内膳家譜、壹岐弥四郎家藏文書、以是爲天文二年事、伊東義

祐、島津見上卷大永三年、八代氏出自伊東氏、石山越在諸縣

郡高城、 初 大翁公賜梅岳君南鄉、城主桑波田孫六降、

石山村、

據梅岳君舊譜、黃套軍記、大翁公賜梅岳君南鄉見上卷大永六年、南鄉城

遺城、在永吉領主島津主殿別館東北一町許、保永吉村、諸縣郡高城人桑

波田孫四郎系圖、伊集院院司八郎清景之弟桑波田阿闍梨源智領伊集院桑

波田、因以為氏、孫六名榮景、源智九世孫也、清景見第六卷觀應二年注、

2173 追而御吉兆重疊候、如仰連々可申入候處ニ、通路存様ニ

無之間、無音罷過候、口惜候、年内其方へ進狀候處ニ、

鹿兒島之人々江合留候て口惜候、雖然御返し間、目出度

候、從此方へ弥以無音信可爲候、すこしも心に余儀有間

敷候、御同意可畏入候、并諸所方無何事候由、目出度候、

如何様永春中ニ可申承候条、不能一二候、恐々謹言、

「享祿三四年比力」 隱岐守重朗(花押)

謹上 肝付殿 御返答

2174 「尚久一流系圖」

尚久

字鎌安丸 又五郎 左兵衛尉

享祿四年辛卯誕生、母指宿安藝守忠貞男上木筑後守貞

時女、法号文實桂万庵 父嶋津相模守忠良法師日新齋也、

主、龍徳院殿

(勝久)

(花押)

薩摩國鹿兒島郡於樂山、被崇給春日大明神、奉寄進之地、

2175

2175

2175

2175

2175

平等王院快瑜法印可有執務之狀如件、

(享) 享祿四年貳月十九日 勝久

進上 平等王院 侍司

2176 「正文在坊津一乘院」「此二通勝久公御譜中ニ在リ」

(勝久) (花押)

滿家院東侯大平木場之事、如前々平等王院江令寄附者也、
早任先例、可有沙汰之狀如件、

(享) 享祿四年三月八日 勝久

進上 平等王院快瑜法印 侍司

[上包] 快瑜法印

2177 「正文在坊津一乘院」

(勝久) (花押)

滿家院東侯大平木場之事、如前々急平等王院江令寄附早、
然者就快瑜法印成歸寺、於永々後代不可有聊尔相違、其
外厚地四至方至之堺、曩祖忠久如寄進能々被合首尾、悉
以平等王院快瑜法印可有執務者也、仍爲後日之狀如件、

(享) 享祿四年三月八日 勝久

進上 平等王院快瑜法印 侍司

[上包] 快瑜法印

2178 享祿四年辛卯

四月五日、入來院上總介 水引ニ於て戰死とあり、公室の敵歟

六月四日、東郷左馬助重貞 百次にて戰死とあり、亦公室の敵方歟

此年、寺尾左兵衛重次 枯木か尾にて戰死とあり、此軍も敵方ならん

2179 「日新公御譜中」

[正文在願娃右京]

[牛王] 條數

一對我等父子、被偽間敷之儀承候、以此方御同前たるへ

きの事、

一御宿意之在所、以番御知行可然存候之事、

一雜說和讒之時者、不糺實否達啓之事、

右此條々偽申候者、

梵天帝釋四大天王玄罕地神、惣日本國中大小神祇、殊

當國鎮守開門正一位 金峯山藏王權現 八幡大菩薩

諏訪上下大明神 兵法守護摩利支天軍神等可罷蒙御罰

者也、起請旨如件、

大和守(伊集院)

忠朗(花押)

享祿四年辛卯八月廿三日

藤原貴久(花押)

日新(花押)

顯娃左馬允殿

御報

2180

「貴久公御譜中」

昨日者勝利之由、目出度こそ候へ、先日談合候一ヶ條之義、つめくそくへ入間敷候歟、乍去かき橋ゆたん有間敷候、恐く、かしこ、

〔朱力字〕

「天文元年秋」三月廿四日

貴久(花押)

遠江守殿

貴久

2181

「樺山氏七代美濃守信久譜中」

世間漸漸人心不和而宛如浮雲矣、天文元年壬辰閏三月晦日、窺得田獵之有間隙、日新齋・貴久主發士卒於伊作、襲取於南郷城、而後改南郷、名永吉、欲數外往伊作祝慶賀、而無敵路之可通融、是以使一价敵領之忍山野、依執

事伊集院大和守達其悅、是又無異心之所致也、

2182 天文元年壬辰

十月、吉利治部少輔忠將

東郷重清と薩州中郷松嶋に戦ひ死す、年三十三、以下同じ、忠將は、

薩州家國久の三男秀久族を別て邑を鹿籠・吉利等に食む、秀久の子忠將なり、日新公の妹嫁と云、吉利刑部少輔

久起 忠將の弟、大野次郎三郎忠友 亦薩州家國久の二男忠綱の孫なり、同時戦死、

同時戦死、

2183

「吉利氏系圖」

元祖秀久之子

忠將

三郎九郎 治部少輔

明應九年庚申誕生、

天文元年於中郷戦死、〔此年十月、東郷重清と中郷松嶋に戦ひ死すとあり、考拠ニ供す〕年三十三、法名寂公號安叟、

久起

六郎 刑部少輔

天文元年於中郷與兄忠將俱遂戦死畢、

女子

新納尾張守室

2184

「北郷忠相譜中」

〔庄内平治記〕

一伊東修理太夫義祐ハ、三侯院高城其外梶山・山之口・

野々三谷・小山・松尾・下ノ城・勝岡を押領ス、是ヲ伊東カ八ノ外城と名付、共ニ城主を居置て其威尤揚々

たり、先高城ニハ八代長門守、梶山ニ稻津・落合、勝

岡ニ海江田、野々三谷ニハ須木・米良、下ノ城ニハ福永丹波守、小山ノ城ニ宮崎・宮永、山之口ニ海老原・

長倉、松尾の城ニ村山・川崎、凡一萬三千余騎とぞ聞へける、時に北郷讚岐守忠相并島津豊後守忠朝、北原

三侯院高城及山之口・梶山・勝岡・野之三谷・下城・小山・松尾八ヶ外城者、伊東氏之所領也、伊東義祐率一萬餘騎陣于高城、島津豊後守忠朝・北原之某・讚岐守忠相共合心、潛運籌策、將攻高城、雖爲密事、漏聞伊東、件八ヶ處兵守高城嚴肅、時天文元年壬辰十一月二十七日、

襲於高城、敵兵發出於城中防戰、三將兵亦競進、電奔電激縱橫衝戰、敵軍敗崩、追亡逐北迄石山越、斬城主八代

長門守北原之兵討長州、而後長州之首於志和池森焉及稻津・落合梶山城主、海江田岡

主、須木・米良野之三谷城主、長倉・海老原山之口城主、福永下城城主、宮崎

・宮長小山城主、村山・川崎、松尾城主、其外得首三百八十餘級、

氏と意ヲ合せ高城ヲ攻んとす、此事密談たりとハいヘ共、惡事千里を行習ひ、洩て伊東カ陳ニ聞ふ、義祐聞て驚き、件の八ヶ處の城ノニ軍兵の手賦し、高城ヲ要害とし、武備を設けて待居たり、天文元年壬辰十一月、忠相・忠朝・北原氏數萬の兵を引卒して高城の大手木崎口ニ押寄せ、只一操ニと攻たりける、待設たる伊東カ勢命を塵芥よりも輕し、不動寺馬場ニ相支、分ノノ敵ニ相當り挑ミ戰たりけれ共、伊東ケ兵打負て、義祐カ宗徒の臣從原兵部・稻津修理・落合加賀・福永丹波嫡子維實・須木・米良・河崎・長倉・宮崎某父子六騎、宮永六郎父子枕ヲならへて打死す、八代長州三百余騎を左右ニ双て、命ヲ限りに戰ひけれ共、皆盡く打死し、或ハ疲れ落うせて僅の勢ニなりけれハ、力及す落行處を石山越ニ追詰て、手痛く攻寄たりけれハ、所從眷屬皆打せ、其身も忽打死せり、三軍の手ニ討取首三百八十餘級也、其外切捨たる者數ふるニ暇なし、此日八代長州を北原カ手ニ打取て、首を志和地ニ葬れり、長州塚とハ是なるべし、

『入来院氏一家文書』

(端裏ウハ書) 山口木工左衛門尉

平佐より

平佐城より

本村松林寺 御同宿中

重副

薩摩郡平佐之城退治事

入來院又五郎平重朝公

天文元年壬辰十二月五日申刻ニ切乗候、然者彼城南ニ被召

移候間、清色之城樋口井手之本堀町一所、本村諏訪大明

神ニ奉寄進候、永々武運長久、當城安穩、可令守護給御

祈念之事、奉頼候、恐惶謹言、

天文元年十二月吉日

平重副(花押)

權少僧都融久(花押)

山口木工左衛門尉

本村松林寺

御同宿中

2187

「國史」卷十 大翁公 大中公
六 梅岳君

二年癸巳春二月十日、復以南郷反、據梅岳君舊譜、黃套軍記三月二十

八日、島津忠朝等復與伊東軍戰於三俣大捷、據島津内、藤家譜梅

岳君欲伐南郷、使謀覘之、二十九日、聞桑波田孫六出獵、

即遣兵衆佯爲獵者、白晝公行入城、殺桑波田河内守・桑

波田式部少輔等、遂取其地、更名永吉、據梅岳君舊譜、黃套軍記家村造右衛門

系圖、此時有警者、曰大光院重實、梅岳君

遣重實爲間諜、是日重實以孫六出獵來告、秋八月、園田五藤兵衛

自鹿兒島來陰告、以老公將爲難、梅岳君先使公及又

四郎忠將守永吉城、大翁公將攻永吉、遣鹿兒島・吉田

・日置等七邑之兵屯野頸、梅岳君自伊作將精兵五十餘騎

馳往、據草田壘橫擊之、大破其軍、據梅岳君舊譜、樺山玄佐自

自田布施、今從舊譜、永吉城南有故壘、今稱勇ヶ城、相傳

以爲野頸遺墟云、草田故壘在島津主殿別館西南二十餘町、忠將、梅

岳君之次子也、據島津系圖冬十二月、山田式部少輔有親以日

置降梅岳君、據梅岳君舊譜、山田新助系圖、黃套軍記、系圖云、山

年始以邑降、然據大永六年大翁公賜梅岳君日置、有親不服、是

則似是有親不敢拒命、據是年有親以日置降、則似是大永以後叛而復降、

自大永六年至於是年、其梅岳君使有親領山田村、屬日置郷、如故、

而鎌田某・阿多某譜有親焉曰、猶懷異志、乃召有親而殺

之、既而知其無罪也、召其子藏人有德於市來、而優恤之、

同、有親、有家七世孫也、據山田新助系圖、山田有親、家見第六卷文和三年注、伊東氏使

落合刑部少輔兼佳居高城、兼佳陰與北郷忠相爲內應、忠

相因之、據島津支流系圖

三年甲午春閏正月六日、引兵攻高城、兼佳開門納之、高

城陷、明日、梶山・勝岡・山之口皆棄城走、忠相遂取四

邑、據島津支流系圖、東光坊家藏伊東家略記、天文三年閏正月六日、三俣高城住人落合刑部兼佳與北郷忠相、島津忠朝交通、納其兵、於是

是忠朝取高城、七日、加治山山城主繞城而去、忠相取其地、島津内藤家譜云、忠朝取高城、皆與此徵異、梶山城遺墟見第八卷明德四年注、勝岡城

遺墟在勝岡郷地頭館東北半町餘、秋九月十六日、伊周・村右報
遺墟池村、山之口郷多古城墟。

琉球三司官書曰、往年備中蓮島住人三宅和泉守國秀、欲
取琉球船至坊津、本藩以與貴國同盟之故、遣兵擊之、遂

殺國秀、近聞國秀餘黨將復寇貴國、故命緣海郡邑、譏關
津戒邏卒、以爲之備、此輩借使得命於幕府、不得假道於

敵邑、其無如貴國何、茲特告示、餘囑聖現寺、不宣、據
中公舊譜、伊周村右當是二人、其人不詳、而書尾云天文
三九十六者即三年九月十六日、蓋當時檢依其黨不具書也。

不君、黜退舊勲、擢用新進、末弘伯耆守・小倉武藏守等
尤被親幸、相與飲博、不恤政事、上下解體、國家將亡、

川上大和守昌久與朝臣十六人共因島津實久以諫、弗納、
冬十月二十五日、昌久等殺末弘伯耆守於谷山皇德寺、

大翁公長逼、乃奔禰寢、據大翁公・大中公、梅岳君舊譜、黃套軍
記、大翁公夫人、禰寢式部大輔重就之女
今奔禰寢依外家也、重就、清年之父也、清年見上享祿二年、皇昌久、
御寺在谷山郷、寺有一古墓、無銘誌、相傳以爲末弘伯耆守墓、

頼久九世孫也、據島津支流系圖、大夫判
官頼久見第六卷貞治二年、

2188

〔御譜中〕

義久

又三郎 三郎左衛門尉 正五位下 修理大夫 從四

位下 三位法印龍伯

天文二年癸巳二月九日誕生、母入來院彈正忠重聰女也、

2189

〔日新公御譜中〕

一天文二年癸巳二月十日、知覽・川邊之士卒及桑波田孫
六等變約、而屬勝久、故含怒思加治伐之際、三月廿九
日、桑波田有田獵之娛、窺得登山之隙、日新爲武略、

士卒悉似虞人之裝束、白晝緩步襲南郷城、而屠殺桑波
田河内守・同姓氏部少輔已下、而入手裏、改南郷名永

吉也、

2190

〔貴久記〕

一天文二年癸巳二月十日、從知覽川邊へ有現形、桑波田
孫六變先約鹿兒島ニ成、可有時節と相待候處、〔三年也〕
月廿九日、羽狩の爲山ニ皆く登たる留守を白日ニ走籠

シ、南郷之城を平、〔初狩ノ事也〕

2191

〔玄佐日記〕

一又世中人之心も中空なる折節、伊作ノ南郷の城を召取、
長吉と名あらためらる、ケ様之折も數外忍山野、伊十
院大和守殿迄被進使、被申承事も無二心故及也、

2192

〔右馬頭忠將譜中〕

一天文二年癸巳三月廿九日、忠良攻伊集院内南郷城、忠將爲從軍、手自擊上山左近、此時十四歲、

夏日詠竊契遐年和歌

近江守忠勝

2193 「新納忠勝譜中」

天文二年、遊行他阿彌陀佛留滯于志布志之際、催和歌會、所以一日之盡佳興也、其懷紙未泯、而存者記左、

行としハふけぬのうらのうらなミを
はるかにちきるつるのけころも

詠竊契遐年和歌

通法寺其阿

2194 「正文在新納三河忠徳入道楚弓」

詠竊契遐年和歌

他阿

ゆふなみの立そめしよりあしたつの

雲井にたかき千世のこえかな

詠竊契遐年和歌

藤原安竊

難波かたிர江のつるにことゝはむ

蘆原なりし世ゝのはしめを

詠竊契遐年和歌

喜阿

春のはな秋のみちもならへかし
しめゆふやまのつるのちとせを

逢にあふ折をしれとやそなれぬる
松にいく代のつるのもろこゑ

夏日同詠竊契遐年和歌

藤原忠重

和歌のうらに住てふ竊のけころもを

いくとし／＼かかさねきぬらむ

詠竊契遐年和歌

壽獨阿

萬代のはしめとやミむつるのこの

松にすたちをいそくこゑ／＼

夏日同詠竊契遐年和歌

藤原忠常

なにはえやあしへの波の千代かけて
子をおもふつるそ月に鳴たつ

詠羈契遯年和歌

金阿

つるのゐる千代のはしめのひめこ松
きミか御かけにならへてそみる

詠羈契遯年和歌

獨長阿

ともにへむ陰やたのめてゐるたつの
立もはなれぬわかのみつはら

詠羈契遯年和歌

一獨阿

立なるよハひやなをも友つるの
つはさにかくるわかのうら波

詠羈契遯年倭歌

三其阿

四の時かしらにみえて年とのミ
ふるはつもらぬ霜のしらつる

詠鶴契遯年和歌

僧阿

すたちゆくあし邊のたつやとしふとも
立かへりこむ浦の松か枝

詠羈契遯年和歌

一寮覺阿

千さともつはさにのりて行人の
よはひのすゑをたくへてやみむ

詠羈契遯年倭歌

二弥阿

葦はらや生立しその始をも
知や塩干のたつあさるこえ

詠鶴契遯年和歌

六但阿

年へぬる聲やま砂にゐる田羈の
月のしもふむ夏の夜のそら

詠羈契遯年和歌

壽重阿

いくとせか雲井の田羈の木すゑをも
ふみからすまでそなれきぬらむ

詠羈契遯年和歌

三留覺阿

いのる世はさくれ石まにすむ羈の
いはほの松に巢をかくるまで

夏日同詠羈契遯年和歌

味同心して此城永くたもちかたし、處詮、兼佳ニ詰腹

切らせ、北原に屬せんと蜜ニ野心ヲ企しニ、兼佳鼯鼠ものあり候て、蜜ニ注進したりける、兼佳大キに驚、

狐狼の中ニ棲居して患を招も心うしと、譜代の忠臣中

原氏の僧勘藏主を使として、忠相に屬せんと請ふ、忠相古老に相儀して兼佳に告られけるハ、味方ニ屬する程ならハ、子を壹人質となし、無二の忠貞ヲ抽ンでハ、

三俣の地半分ハ兼佳ニ付屬スベし、半分ハ忠相か兎裘の地となさんと也、兼佳違義に及されハ、天文三年閏

正月六日の夜、忠相の軍勢を高城ニ遣され、兼而期したる事なれハ、忠相の軍兵ヲ城中ニ招入レ、兼佳外郭

ニ呼けるハ、今宵よりして兼佳ハ忠相の味方に參し援兵を得たるそや、味方に屬するものあらハ、速に降參

せよ、落へきものハ落候へ、兼佳を討んものハ只今寄て打べしと、高らかに呼ハれハ、やわか立あふものも

なく、皆降參して屬しけり、日向よりの番勢ハ取太刀にて落退き、手指ものたになかりける、誠ニ一陳破れ

ハ殘黨全からざる習ひ、同二月十六日、梶山・勝岡・山之口ニ楯籠たる軍勢も、皆悉く城を捨、跡を昏し退

散す、

『笑輪覺書』

トシ、ツクツキヤ

一吐と歡、鼓切掛れば、サスカ猛勢ナレトモ不留脚踏行、

〔天文二年八月十四日、勝久公平田左馬助清宗ヲ得トシテ、兵ヲ帥ヒテ鹿兒島ヨリ本吉城ヲ攻ラレシ事アリ、日新公園田五郎兵衛カ注進ニヨリ、精兵五十余ヲ引

テ橋入ニ討破ラレシ事旧記ニ見ユ、此戦死ノ人数ハ其時ナラシ

伊地知筑後守・平田平三郎・長谷場弥四郎・鎌田兵部

左衛門・谷山ノ中村大膳・勝部宮内左衛門・鬼塚源三

・河野弥七郎戦死ス、其外數十人頸切掛テ、軍神ニ血

祭テ勝吐氣を作ける、又日置城主山田民部少輔改前過

被參相州ニ、則伊作・田布施之人數ヲ差遣シ、令日置

庄ヲ知行、然トモ見前之桑波田振舞、後車之誠也ト云

テ、同廿四日、民部少輔有馬ヲ被討、昔より敵將請降

者、助ケテ莫討之ト云、是ハ無下之事也ト人々申ける、

此民部少輔ヲ被討事、貴久先年鹿兒嶋御出之時、是

非可奉討之、助之似可放牧虎狼ト云テ強て企といへと

も、諸家の侍不許之、全御命、遂ニ當家之家督と成玉

ふ御運の末程、こそ目出度シ、入道日新ハ忠兼ヲ敵と

成し玉へハ、實久以下一門諸卒の大敵を防シニハ不如

武略、後ニ降參之者疑其心事如何ならん、罪を緩ふス

ルハ將の謀也、不可討之ト云玉へトモ、阿多加賀守・

鎌田刑部左衛門ナト、彼ハ得骨柄兵也、若又致二心、

相州家可危急ト云テ討之、雖然、其子藏人遂ニ被召出、被行恩賞也、

2203 「日新公御譜中」

一天文二年八月十四日、勝久欲討日新父子之計、園田五藤兵衛尉者、潜從虜島來告之、則其夜又三郎貴久入于永吉城、警衛敢不怠也、實如園田之言、催自虜島至吉田・日置七箇所之軍衆、來于永吉城之野頸發關、丁此之時、日新率五十餘騎之精兵、發於伊作馳到於永吉、横遮敵路防戰盡筋力、漸敵軍敗、而樺山右衛門・平田左馬助已下斬獲甚多矣、且虜取數十人、而後唱凱歌散軍也、

2204 「右馬頭忠將譜中」

一天文二年八月十四日、有自鹿兒島敵兵欲攻來之聞、於是貴久公及忠將入南郷城守之、同十五日辰時、敵將桑畑孫六・末弘伯耆守卒三百餘騎逼來、忠良自田布施遮後、討捕敵數人、因茲敵兵退散矣、此日、忠將着緋威鎧云、

2205 「新納氏藏」

檢見連々御望候之間、免申候、此以後者、大可被放候、恐々謹言、

「天文二年」

八月廿八日

源光清(花押)

鳴津近江守殿

小笠原

鳴津近江守殿

刑部少輔光清

2206 「全」

今度就鶴戸參詣抑留候之條、逗留候、執心之間、少々相傳候歟、左様候之間、於三ヶ國者少々茂可有矣見候、日記之義者、假染も不可有口外候、殊檢見免之事者、堅不可有外見候、諸事免之事者、可爲一代候、恐々謹言、

「年間不知」

十月廿六日

刑部少輔源光清(花押)

鳴津近江守殿

小笠原

鳴津近江守殿

刑部少輔源光清

2207 「正文在楞嚴寺」

奉寄進 隅州楞嚴寺

江子之尻ニ反島地堀リ切

島地二反之事

(右) 在坪者、江子之尻五反之内二反、爲道金禪門後生菩提也、

若本主可被請時者、本錢四貫文也、御吊以其儀ニ奉仰候者也、仍爲後日證文如件、

天文二年癸巳十月八日

堀切十郎右衛門尉(花押)

2208

「寫新納久四郎宗心」

(本文書ハ二九八号文書ト同文ニツキ省略)

2209

「在新納家」

就得御意候、於可有執心輩者、可致談合候、被下御一行候、就其御日記并檢見方之事、付別而之躰はい、矢入之たいはい、むねこしの引目の射様、以前之如起請文、可續家子一人ならてハ相傳申間敷候、一代之御免、奉得其心候事、

右條々僞申候者、

奉始梵天帝尺四大天王、惣日本國中六拾餘州大小神祇、別伊豆箱根兩所權現 三嶋大明神 八幡大菩薩 天滿大自在天神、殊當國鎮守妻滿五社大明神、當院惣廟山口六

所大明神、部類眷屬可罷蒙神爵冥爵於一身也、仍起請如件、

天文二年十月廿八日

嶋津近江守
藤原忠勝

2210

「日新公御譜中」

一天文二年癸巳十二月、山田式部少輔改前非、獻日置請屬於旗下、有其罪應其求移渠於山田、同月廿日、領其地、同廿四日、以漢高斬一公之慮、誅式部於伊作、以禁旗下之有學丁公者、丁公、項羽之臣也、嘗於戰場以短兵接漢高、漢高即皇帝位、丁公自謂、當得大功來謁漢高、漢高曰、使羽失天下者丁公也、當其時、彼不救我、則羽必保其天下也、而丁公救我得生、故卒至於此矣、遂斬徇軍中、以戒其後、後之論者曰、丁公之恩於漢高可云大矣、方今項羽既滅、漢高爲天子少無外懼、而立政之始也、若不殺丁公、則後之學丁公者多矣、故欲杜後患而殺之、高帝之垂戒深也、

2211

「新納忠勝譜中」

「寫在新納久四郎入道宗心」

大的之日記

嶋津近江守殿

嶋津孫四郎

嶋津駿河守

○○○○ ○○
○○○○ ○○
○○○○ ○○
○○○○ ○○
八 十 十

嶋津十郎



九

嶋津兵部少輔



七

嶋津清左衛門尉



六

嶋津新三郎



五

嶋津右馬助



七

嶋津四郎殿



十

嶋津又五郎



八

天文三年正月十六日

三度弓之時之日記茂此心得也、

但、つかひたるへく候、

2212 「北郷忠相譜中」

伊東之家臣落合刑部少輔兼佳在高城、通心於忠相、天文三年甲午閏正月六日、潜招入我軍於高城、容易拔焉、同七日、梶山・勝岡・山之口皆捨城退散、故入忠相之掌握、而後忠相移住于高城者也、

2213 「山田氏系圖」

久親

初久義 三郎二郎 式部少輔

2214 「正文在山田七郎右衛門久通」

藤氏嶋津三郎二郎殿

實名

久義

于時天文三曆甲三月 日

南樵雪(花押)

2215 天文三年甲午 或作二年、

四月三日、執印三郎次郎公友

久禮橋にて戰死、年二十九、此時死するもの主從十二人と

いひ

2216 天文三年甲午

八月十四日、平田右馬助清宗

大翁公清宗と樺山左衛門を將として永吉城を攻む、大中公

先城守して備給ひ、梅岳君伊、樺山左衛門尉・樺山中務少輔作より發し挾撃るに敗て死之、

・新納備前守・新納二郎兵衛 備前守 子なり、新納四郎三郎久武・宇宿弥九郎・三原遠江守重秀・比志島彦五郎・吉

田左近將監・指宿内藏助忠次 兄弟 戰死、伊地知筑後守・平

田平三郎・長谷場彌四郎・鎌田兵部左衛門・中村大膳

谷山、勝部宮内左衛門・鬼塚源三・河野弥七郎 七百三十人 戰死とあり、

奈良原彌六左衛門、大翁公の時戰死とあり、年月及其戰場詳ならず、此ニ誤考、

二十六日、島津左近將監忠長播州朝日山にて戰死、年三十四歳、
此年、新納安藝守忠行日州川南ニ戰死、一説十年九月三日の事共いふ、未孰れか是なるを知らず、

2217

「越前島津氏十五代忠長譜中」
十五代
忠長

左近將監

天文三年甲午八月二十六日、與赤松次郎共戰死於播州朝日山、年三十四、法名高清楚、

十六代
忠紀

壯之助 周防

享保十九年甲寅九月三日誕生云々、實吉貴公二男云々、元文二年丁巳三月十八日、有命令續越前島津家之名跡、賜采地壹萬石及鼓川宅地云々、略ス、

2218

「貴久記」

一 去程、天文三年同八月十四日、從鹿兒嶋被向多勢ヲ、藺田五藤兵衛落來テ告知ス、此事ヲ聞テ貴久者從宵南郷之城へ籠給、忠良ハ從田布施直ニ五拾騎計ニテ遮猛勢之跡ヲ、數十人討取、切捨數ヲ不知、去程ニ山田式部少輔者、

2219

「玄佐自記」

改前々之過ヲ、日置ヲ持參ス、雪月二日有知行、然共桑波田前之振舞ヲ見ニ、後車之誠成とて、同廿四日伊作被誅、サテ勝久ハ悔還御世、再鹿兒嶋入給ヘトモ、重代賢貞之臣ヲ不賞、然而近來讒佞之徒ヲ擧テ厚賞之、或末弘伯耆守「二郎兵衛尉」稱中世「武藏守」・碓山・竹内・小倉何と云輩世務ヲ掌ス、故ニ不正政道、如此者家國之衰も不遠とて、御一門河上大和守ヲ爲始、累代之家臣十六人作連判ヲ、實久同意ニ而雖成諫儀聞入不給、傾國之基此輩に有とて、谷山皇德寺ニ而末弘伯耆守ヲ討「十月廿五日」、勝久大ニ驚給て、夜ニマキレテ根占ヘ落給、御一家衆各走參、奉進共御入部、曾領掌シ給テ、「下文末ニアリ」

一 かくて一兩年以後御約束之儘、貴久様御妹君川上上州を御頼市來湊迄、從伊作濱御舟ニ而、入來院其比御味方之衆、彼山路を夜中ニ忍、乳母一人又一人上下三たりニ而、生別府江あやしき御馬ニ而こし御まいらせ候事、日新様御心底當時有間敷御事なり、是御奉公無二の印ニはあらし、かく而鹿兒嶋・生別府之間よからず、何とやらん猶豫の刻、鹿兒嶋より長吉へ御手遣あり、市來

・伊集院・谷山其外手持之所、雖不多、以數勢御働之處、此事内通之方有けるか、貴久様・又四郎殿御兄弟

ハ長吉之城へ御籠、日新様は草田と云袴へ入御之處ニ、市來衆其袴之手當なれば、日新様横入之御氣色を奉見、

輕く引退之間、鹿兒島衆へ被切付、平田左馬介御奉

行家ニ而、其日の大將成しを始數百人被討取、鹿兒嶋〔天文三年八月十四日也、古船へ九月トモカク〕人トカク〔古船、七百二十〕

之騒ぎ無類とそ風聞する、かく而鹿兒嶋ハ、末弘伯者守・碓山・小倉〔武藏守〕なとゆふ人々、勝久様被合御氣色、更

世上之人ハ是を謗、其後又何たる折にや、實久鹿兒嶋

へ御參上有り、其時之御老中末弘伯者守谷山於光徳寺〔天文三年十月廿五日〕

生涯也、勝久様無御存知子細にや、如祢寢被成御渡海〔三年十月廿六日西暦〕

〔勝久公御譜中〕

一天文三年甲午十月廿五日、幸臣有末弘伯者守者、薩摩

守實久已下爲群臣、所戮谷山皇徳寺、由是勝久去麿島

至禰寢、翌年四月、還于麿島、爰以連判所誅吾風之有

家臣十有六人、其中誅川上大和守、于時實久亦背于勝

久爲冰炭、是以連判之族與實久俱乘其時、亂入麿島放

火村市、其餘煙不絶者七ヶ日、勝久失防禦之謀、將去

麿嶋、

〔貴久公御譜中〕

勝久再爲 太守、雖擅權於麿島、而不分賢愚不明賞罰、

遠故舊貞良之臣、親讒佞邪曲之人、專淫虐無道、而不務

國政、唯末弘伯者守・本田次郎左衛門尉・竹内某・小倉

某・碓山某等之幸臣助桀爲虐、奉紂稱聖、事聚斂、增一

己吮民膏血、是實亡國破家之盜臣也、於茲乎、真正貴戚

川上大和守及社稷之舊臣十有六人、懼國家之迄破亡、各

一心以裁一紙之連署、就實久獻至諫、然而不許諾也、諫

者共謂、社稷傾覆之基、必在于彼曹、其忠心彌不止、天

文三年甲午十月廿五日、戮末弘伯者守於谷山皇徳寺、宛

類于鄭虎臣殺賈似道之事義也、賈似道、南宋之臣也、以元兇居

爲身謀卒以誤國、而主勝久聞末弘所害、則驚動周章向禰寢

而遁去、丁此之時、薩隅日三州之賢士各往禰寢、懇切上

達曰、請速返位、然而不肯容焉、天文四年乙未、密還於

禰寢、而誅其首諫大和守昌久於大興寺、餘族十有五人恐

其所害、背勝久屬實久爲讎敵、各乘其時、與實久俱亂入

麿島梵蕩村市、煙燄不絶漲天七ヶ日夜、由是漸兵器竭失

防禦道、同年十月十日、勝久遁去于隅州帖佐、而託身於

祢答院氏・菱刈氏等、故麿島爲實久之所有矣、翌年之夏、

勝久適眞幸院憑北原氏、而居般若寺者有年矣、其後適莊

內入都城、憑北鄉氏亦不能復本、而後適豐後州、居住沖濱云爾、勝久之母、大友皇前守政親女也、以故如斯云云。

2222 「勝久公御譜中」

天文三年甲午十月廿五日近臣有末弘伯耆者、於谷山皇德寺、實久已下群臣同意所以誅戮、由是勝久去麿島到禰寢、于時旗下一族他家來于禰寢曰、速歸麿島、然而不可、而有禰寢矣、

2223 「日新公御譜中」

傳聞、勝久再爲太守雖振威於麿島、而不行正道不明賞罰、疎故舊貞良之功臣、親讒佞邪曲之小人、聚猿樂商賈不勝己之職、而巧其言令其色者、或爲淫佚博奕之朋、或爲聚斂殖貨之臣、且復幸臣末弘伯耆守・竹內氏・小倉氏・碓山氏等助桀爲虐、奉紂稱聖、將爲亡國敗家之黨族也、於茲、貴戚之臣川上大和守昌久及忠義之士共十有六人、連姓氏於一紙、因實久獻諫書曰、君近小人則賢者當遠、若賢臣去則國家政道何之如乎、勝久拒之不容、又曰、唯仁人能受至諫、而有小過則改之、勝久彌不能聽之、又曰、夫知者順以成德、愚者逆以取害、有取害則危亡不遠、勝

久艱然不悅、猶將掩耳、故諫臣等以爲、三諫而不聽則逃之、噤口重不言矣、天文三年甲午十月廿五日、諫臣等謀而戮末弘伯耆守於谷山皇德寺、勝久聞之則驚奔遁于禰寢矣、國家忠臣義士各到于禰寢、速請還其位、而不旨諾焉、翌年乙未四月、密還麿島、殺諫者之首昌久於大興寺、由是所殘之諫臣等無所逃罪、實久亦背勝久爲胡越、乘其時十有五人諫臣結朋黨與實久、于時伊地知右衛門兵衛尉爲將、率加世田・川邊・鹿兒・山田・市來・伊集院・吉田軍衆亂入于麿島、而放火于村市、其烟焰漲天不絕者七日、勝久失防禦之道、不得已而忽去麿島、解纜於田浦、直到帖佐、憑澁谷・麥刈・蒲生等、然而無益、而翌年往于眞幸般若寺、憑北原某矣、故麿島者所以實久之爲領地也、日新聞此言、熟以爲、國家不幸、而無明君、使小人執其權、夫小人者先得於君、而自固於國家、忠臣義士欲擊之、而法不可擊、擊之而不勝、身死擊之而勝、君臣共不相安、不待君命而誅其側之惡人、何以佳乎、小人所好利祿、所貪貨財、先內以自固君子之交、外以不逆小人之意、而後待其發非道、而乘其變擊其惡、則其用力也、約而無後患也、嗚呼君臣俱不思而已、

2224

〔權山善久入道玄佐譜中〕

天文三年甲午、島津八郎左衛門尉實久候于鹿島、十月廿五日、誅戮幸臣末弘伯耆守於谷山皇德寺、太守 忠兼聞之、則驚動而遁去于禰寢、于茲島津豊後守忠朝・新納近江守忠勝・北郷左衛門尉忠相・肝付・本田隨其列、助太郎・善久亦爲渡海候禰寢、各達 太守曰、速可有還御云云、忠兼爲許容伺候之諸士得有對面、而後各爲歸宅畢、天文三年、太守 忠兼主鹿島遁去之後、島津八郎左衛門尉實久欲爲守護、先北郷讚岐守・本田紀伊守應催促爲同意、而往于飢肥、告于島津豊後守忠朝、忠朝亦應諾、其後往于志布志、告于新納近江守忠勝、忠勝敢不承引、因茲飢肥之評議爲空虛、雖然其企難止、故又到於清水、而招於大隅國中之人曰、吾有應念催促忠勝、而敢不應諾、所以恨之者不淺、先責亡於彼、而後有南方發向之企、宜與同云云、善久者爲日新之婿、實久雖能知、自今已後伸入魂之旨、且亦到于生別符、于時日新齋雖陷加世田城之有聞、敢不口外、向加治木往去畢、其後如前約責忠勝、此時助太郎亦與州郡之衆俱率軍兵令進發、時於都城爲忠朝被任安藝守者也、經一兩年新納之黨徒悉令没落、悲哉、其後末吉之内カイデノ門、安藝守令領知者也、

2225

〔日新公御譜中〕

〔正文有之〕

今度進藤左衛門大夫令上洛砌、懇報令披見候、仍段子貳端到來、尤喜悅之至候、猶期後音令省略候也、狀如件、

三月五日

〔花押〕

〔上包〕

愚谷軒

〔花押〕

2226

〔全御譜中〕

〔正文有之〕

當山大講堂起立之事、任勅宣之旨、三光坊令其企早、就其奉加之儀、入魂候者、可爲欣悅候也、

六月二日

〔花押〕

嶋津相模守とのへ

2227

〔御文庫廿二番箱一巻中〕

芳聞之旨令拜閱候訖、抑先年三宅泉州國秀、爲貴國競望、既至當國下着候之處、貴邦當邦以同躰之儀、不願思慮即時刑戮候、依之及畿内此方義絶、剩日本三津之其一薩州坊津爲敵破却候、雖然其國一味之上者、兼日覺悟候之條、

無仰天候喜、其辻無御忘却、此度相承候、先々祝着之至候、然間彼國秀一類合其鬱憤、今又渡船之企事実候、但帶將軍家之御下知、雖軍兵下向候、於當方無許容者、恐

者渡海之儀難事成候之歎、如前々至其方御校量者、薩隅日三州津々浦々之事、堅加警固、何様可遮兵船之海路候、其謂其外細碎聖現寺江令申候、定而可有演說候間省略候、

恐々謹言、

天文三年

九月十六日

老中

〔貴久公御譜中ニハ伊周村右トアリ〕

琉球國

三司官

〔末ニアリ〕
〔天正拾五年八月日 持主來阿〕

2228

〔御文庫廿二番箱一卷中〕

雖未申通候、令啓上候、抑先年備中州運嶋三宅和泉守

公方様以御下知流求國へ就罷下、至其表下國候、不慮生

涯候、然間薩摩三ヶ國御芳以御張行被仰付候条、彼等一

類共對薩州御芳含遺恨候、蓮嶋事我等申付在所候之条、

同心之覺悟候、然處同名三郎兵衛其表下向候之處、御芳

至彼仁被仰聞之段、流求國爲武略、三宅和泉守被爲生涯

由候ッ、存加之通令承知候、於無御等閑者、流求國江一

警固申付度所存候、以無別義筋目願候、同心候者、可爲

祝着候、於無左様者、津浦之儀被借下候者、可爲恐悅候、

依御報重疊可得貴意候、猶巨細同名三郎兵衛可申入候、

恐々謹言、

十一月五日

通詮

今岡民部大輔

徳永隼人佐殿

安來殿參

御宿所

2229

〔御文庫廿二番箱一卷中〕

〔琉球國三司官江國章案文 天文三 伊周 九十六 村右〕

〔本文書ハ二三二七号文書ト同文ニシキ者略ス〕

〔此書、前書同案文ナレトモ、本書ノマ、寫置也、又外ニモ同案アリ 略ス〕

2230

『正文在國分宮内社司澤氏』

正八幡宮

奉寄進三味職之水田一町願書

右、彼地者、先々雖爲社領三味職之、自家他家仁買渡、

依非儀先例之社役相滯、數年御神夏仁有障、故藤原董親
身心堅固、子孫繁昌、武運長久之爲願望、彼役無退轉之
致調法、仍於後々有懈怠之時者、自社家中可爲御催促、
於有餘夏、自且方可致其沙汰狀如件、

守護代藤原董親(花押)

天文三年甲午霜月吉日

2231

〔北郷忠相日記 自天文元年
至三年十二月〕

同六日、野々三谷の番北郷信濃守父子山籠候、内城外城

從此方請取番候、小杉河内守・津曲四郎左衛門内城請取
候、

〔天文二年〕
同五月十四日 丙辰 尾宿千 倍日 六ヶ村城取始候、山内豊前守歟

初候、豊州・新納殿、北原方城誘人衆合、

四日、北原方鳥越城被取候、

同十月一日 庚午 高城山衆六ヶ村麓人衆隱置伏懸候間、城

衆出合伏中道、

同十二月、勝岡・伊東依格護余候、豊州江被去渡候、嶋

津右衛門太夫方日置方城之事被請取候、新納殿此方人衆

同前打入番候、

〔天文〕
同三年 甲午 閏正月六日 酉 内合内匠依子細候、高城江夜中

人衆指向候、

同七日 甲戌 未刻、加治山・大熊捨候、忠相即時ニ馳籠格護
候、同山之口之城捨候、

此度退治城所領配分相定、豊州高城、新納殿平地格護、

大隅之内東郷ト云在所新納殿、高城之内格護之所領豊州

寄替候、北郷忠相加治山・勝岡格護、北原方野々三谷格

護候、新納殿格護之内七十町下財部ニ寄替候、

同二月十六日、節加治山・勝岡同日城祝、山内豊前守

地鎮候、城祝過候而、居瓶子三献、初献サシミ、二献シ

ホニ、三献ウニ、和田助七・小杉右近・津曲四郎左衛門

宮仕候、

同八月五日、當所天神作事始、

九月十五日、乙戸大明神鳥居立候、

同十二月十二日 甲子 山田江相動無取合戰候、大浦十郎右

衛門計負越、

2232

〔國史 卷十 大翁公 大中公
六 梅岳君〕

四年乙未夏四月三日、大翁公歸鹿兒島、召川上昌久於

川上城、昌久至、待命於大興寺、遣鳥取某賜昌久死、以

其首進逆耳之言也、昌久自殺、又遣兵圍昌久妻於川上城、

八・高木左近・竹追助左衛門・鍋倉筑後・宮野原助右衛門、

十月、肝付刑部少輔兼利谷山神前城の下ニ戰死伊地知左近重友・

樺山藏人谷山にて戰死とあり、此時歿、

2234 「勝久公御譜中」

天文四年乙未四月、自禰寢還鹿兒嶋矣、爰有所譏謗吾風之家臣十有六人、其中首長誅川上大和守昌久、以故實久亦背于我爲冰炭、連判之臣等與實久俱乘其時、入鹿兒島放火村市、其餘煙不絕者七個日、是以勝久失防禦之道、

2235 「川上大和守昌久譜中」

當時太守勝久主雖振威於薩隅日三州中、不行正道、不明賞罰、疎故舊貞良之功臣、親讒佞邪曲之小人、或爲淫佚博奕朋、或爲聚斂殖貨之臣、且復有幸臣末弘伯耆守・竹内・小倉・碓山某者、助桀爲虐、奉紂稱聖、將向國家敗亡、於茲乎、忠義之士共十有六人寫姓氏於一紙、依島津八郎左衛門尉實久獻諫言、拒之不容、又曰、唯仁人能容至諫、而有小過則不憚改焉、掩其耳不能聽、又曰、夫知者順以成德、愚者逆以取害、若有取害、則危亡何以遠乎、勝久

匪啻不容諫言、艱然不悅改其席矣、是以諫臣等空手退、而以爲三諫不聽、則不可又言、以噤口矣、天文三年甲午十月廿五日、諫臣等相議、而戮末弘伯耆守於谷山皇德寺、勝久聞此變、則奔逃禰寢、翌年乙未四月三日、潛還鹿兒島、而後徵昌久於川上城、稱諫之首長、將以誅戮、昌久寄宿於大興寺裏、所以自殺也、法號華翁淨榮居士、

2236 「川上久隅譜中」

久隅 初久信 犬滿丸 彥三郎 左衛門尉 上野守 入道 名慰敗

慈父昌久遂自殺於鹿兒島、則勝久發軍衆攻川上城、于時久隅三歲、母堂懷吾循環城中指揮、以不怠防禦、故不得陷、而徒敵兵歸陳焉、其後差价使告日新公曰、宜屬旗下、公孔好之矣、貴久主爲守護職、則如元安堵川上矣、慶長十六年正月十七日卒、年八十、

2237 「川上武藏守義久受久譜中」

天文四年、太守忠兼見誅川上大和守昌久、于時受久亦

將追誅戮、爲逃其害、隱身於隅州正宮邊地、丁此之時、有 貴久公之徵者、再三不止、故應其命爲旗下、參候伊作也、

「右、受久ノ妹昌久ノ室トアレハ縁類知ルヘシ」

『實久公記』

一天文四年乙未、人不知ニ鹿兒嶋へ歸給、連判之比川上

大和守ヲ被誅、其与之人々爲身ヲ遁、實久一味ニ成テ

鹿兒嶋ニ乱入、所々在家ヲ放火スル間、夜晝七日者不

絶兵火、猛烟空ニ幡、故ニ勝久者大隅帖佐へ開給、耶

答院・北原ヲ御頼有間、以廻文ヲ欲奉成入部ヲ、「下文

末ニアリ」

「樺山玄佐自記」

一爲豊州始、新納忠勝・北郷左衛門尉・肝付・本田、人

次と而助太郎參上す、實久も在御渡海、豊州・新納殿

御頼、末弘生涯之事ハ、逆心の者なれば爲御奉公如此、

依其儀、實久背上意事失本意之由御申、此上ハ無別儀

とて被成御對面、鹿兒嶋へ御歸國相定、出頭人と思へ

ニ歸、さて爲御相談にや、貴久・實久和平の事有、猶

勝久様へ碓山・小倉なとか被任分別、何事かよかるへき、鹿兒嶋本城東福寺を取誘、御屋形様も本城へ御移

なと有、折しも相州様伊集院を夜懸ニ召取、其折於松

尾口貴久様御合戦、敵大太刀に而左之御手を二太刀切

奉れ共何事なく、痕ハ深候しかとも、御弓ニもさわら

さりしこそ不思議なれ、伊集院袴皆かゝへ、本城江働

事無隙、實久ハ河之邊より谷山神前へ伊地知右衛門兵

衛尉と云者引入仕、されハ鹿兒嶋動轉にや、勝久様本

城へ御座有て、川上殿を被召寄、於寶持院御生涯、其

外實久江前へ申入、末弘伯耆守へ生涯させつる人々、

皆々氣遣最中に碓山・小倉などの才覺にや、北原・耶

答院を頼、北原加賀守与云者走參、耶答院ハ伊勢守自

身致參上之處ニ、從谷山鹿兒嶋のぬめり川と云所迄放

火しけるニ、耶答院衆かのかきたなけなる水はなに、谷

山衆を神前之外城戸口迄追責戦し處、鹿兒嶋衆ハ内心

實久へ申合、又案内者なれば見合せけるに、谷山本城

福本之以下の雜兵横入をし、耶答院の役人栗野越前守

と云族を始として、數十人討死なれば、伊勢守も無甲斐

帖佐をさしてにけ歸る、擬實久ハ鹿兒嶋池之上迄指寄、

本城へ御使を被立、實久勝久様への御意趣ハ、此前伊

2240

〔御譜中〕

作より御入部之事、加治木邊迄御供仕、御家を守奉る、是忠節深重也、諸事實久を御頼と御契約なれハ、末弘は生涯をさせつる、國をも從是以後實久可存之旨御神判有しなと事多けれハ不及筆、此事本城方之御使丹生〔四年十月十日〕備前守といへる人かたられしを聞置ける、勝久様御返答ハ、實久御申尤也、最前如御約束、實久御代を押而御進退可有也、今更此御躰ニ而何を御渡とハ仰候へん、今日より我ハ屋形と云へる名を別迄与なれハ、實久谷山へ先と而引退給ふ、扱勝久ハ其夜舟ニ而歸る浪も御うらやましくや、帖佐〔天文四年十月十日自田浦加帖佐〕江御渡海なり、始より御頼なる所にや、於帖佐、祢答院・北原奉仰、其比樺山・肝付越州などは北原へ入魂なれとも不指出、かゝる程に、伊集院椿へ其外吉田大隅衆皆實久を用る、實久鹿兒嶋へ被打入、守護之御振舞与見得けり、豊州・北郷右衛門太夫殿を以御懇切也、〔下文末ニアリ〕

一天文四年乙未十月十日、麿島東福寺城下有稱田浦之海濱、勝久解纜於海濱、至于帖佐、故麿島者實久之爲領

知也、治國家十七个年而如斯、

2241

〔北郷忠相譜中〕

天文四年乙未八月十四日、忠相出軍於新納氏之領末吉・松山・梅北、島津豊州有加勢、時伊東・北原爲新納氏之援助、處處放火、

2242

〔庄内平治記〕

一伊東か領八ヶ外城も悉く敵なき城となりけれハ、都而當家の領地となりて、忠相の武威の振ふ事、猛虎の山に靠るに似たり、同四年八月十四日、新納領地末吉・松山・梅北ニ忠相の兵ヲ出さる、時に島津豊後守數千騎の兵を以て忠相に加勢せらる、例の伊東・北原其透を窺い、在く処々に放火せり云々、

2243

〔谷山稱荷社由緒ノ内〕

一稻荷大明神宮

〔玉林ヶ城志〕

右、伯圍様御代ニ、谷山本城ニ寺山出羽守殿被取籠候を被遊御責候節、ぬめり石と申所へ、御陳前ニ白狐あらはれ出候而、本城の方を守居候ニ、被遊御意候者、御家ニハ佳例之儀候得ハ、此城即日ニ於落城者、永く可被遊御祭祀之旨御誓願之處ニ、日之中ニ致落城候由、

依之當寺之内ニ稻荷宮御安置、神領として田三町程御寄附之由、『ぬめり石ハすみ塚と改稱ス』

2244 「日州梅北村神社社司蔵」

奉修造島津御庄惣鎮守神社宮御寶殿一字三間

右、意趣者、奉爲金輪聖王、天長地久、別而者、當檀越藤原朝臣忠重・同朝臣忠勝并同朝臣久如官祿増進、武運長久、領内泰平、萬民豊樂、殊者、社頭安全、諸人快樂之故矣、將亦、當大官司伴朝臣兼秋并勸進沙門權律師頼舜・同隆行無二發願力驅有緣勸無緣、願念忽成就、抑當社妙見者、日本二柱月神、伊勢大神宮日神、此兩天爲無雙尊神、依是日州南郷奉崇敬者也而已、仍諸願成就如件、

天文四年乙未卯月廿九日

本願沙門敬白

小工藤原正續

大工藤原範續

2245 「勝久公御譜中」

「正文在祢寢右近重永」

於鹿兒嶋、爲假屋之地屋敷一ヶ所、同爲假屋付拾町所宛行也、早任先例、可被領知之狀如件、

天文四年五月五日 勝久(花押)

祢寢孫二郎殿

2246 「義弘公御譜中」

義弘

初忠平 中義珍 又四郎 兵庫頭 從五位下 侍從
從四位下 宰相 稱齋惟新、

天文四年乙未七月二十三日誕生、母入來院彈正忠重聰女也、

2247 一日新公ハ永正十一年御生ナレハ、天文四年ハ廿二歳ノ

御時ニ當レリ、伊作ニテ御誕生ナリ、

2248 勝久公長男

忠良

益房丸 又三郎 三郎左衛門尉 修理大夫 入道名

休庵

天文四年乙未七月五日、於鹿兒嶋本城誕生、母禰寢式

部太輔重就女「根占堯重嫡女」

雖爲勝久直子不受守護職者、我之誕生九ヶ年已前、使又三郎貴久爲猶子、已禪守護職、且復誕生之後迄九十四日、則嚴親勝久鹿兒島沒落、丁此之時、母堂入吾於襁褓中、向禰寢懷去、漸及七歲、則以伯父忠治緣座、適于日州、憑伊東修理亮義祐、義祐許諾、附與二箇之郷、以故居住廣原、十五歲時、義忠從豊後來日向、于時遂對面加首服、稱又三郎忠良也、在廣原之際、産男子三人、女子一人、義祐沒落、則適美々居濱浦矣、其後適隅州高山、居于三男兵部大輔忠親之宅地也、

〔山田氏譜中〕

〔正文在山田七郎右衛門久通〕

尚々前日御使者畏入候、右馬頭ニ然々申与候、委得其意候由被申候、次從肝付境聞得候雜説、八朔比可被相動趣之由候、彼雜説者、毎々申散候、可有如何候哉、事實之由候、御方御格護之城ニ御用心可入之由申候、可爲何方候之哉、

先日者不寄存知候之處、以御使節鹿兒嶋之覺、御内儀乍勿論忝存候、仍貴久様之御老中御存分之趣、益房殿様右

馬頭家景可有御光儀事、眞幸ニ御逗留以來被承候、盡種

々詞、難澁雖被申候、去年秋之末御越候、何共不及了簡、御逗留候、家景之迷惑不過之候、然處北郷殿・右馬頭以談合、三ヶ國旁被頼存候、此人衆不被相加衆、桃山殿・肝付殿・北原殿・伊地知殿此四人之由候哉、驚存候、我等頼候、右馬頭企不被申候事、各々御存知之前候、日本國中諸神諸佛、殊者正八幡大菩薩、鵜戸六所大權現、霧嶋大權現、天滿大自在天神可罷蒙御討候、少茂爲不申候、右馬頭存分無覺悟候、ヶ様之虚言貴久老中へ從何方被申入候哉、無念之至候、如此之儀被聞召置候上ニ、北郷殿御難儀を可有御尋之由、貴久様仰事通承及頼候者、於身上子孫迄モ御憑數難有存候、次自肝付之使僧高崇寺、肝付玄蕃允方爲使者越候時、拙者可有様之存分申出候と于今存知、右之段肝鹿へ虚言被申上候、ヶ様之儀者每之事候間、中々無申事候、世上之躰迷惑之ま々令申候、万一之時者、鹿伊之老中へ御心得憑存候事候、恐々謹言、

〔朱力光〕
〔天文四年秋〕七月廿六日

久參(花押)

日置伊勢守

〔上書〕

山田殿

敷根殿

御宿所

久參

〔勝久公御譜中〕

〔正文在入來院石見重頼〕

重々預使僧候、畏悦之至候、仍昨日河邊衆谷山へ打越候而、鹿兒嶋人衆遣候、出合切着候間、敵貳百人計討取候て谷山神前城迄追詰、下柙表發向候、此方之勢可有推察候、然者、郡山宇良破候由承候、喜悦之至候、將又市來浦之事、嶽平原之門、自其方繰取候て可有仕役候、爲心得候、恐々謹言、

〔天文八年〕
〔天文四年秋〕十月一日

勝久(花押)

〔重頼〕
入來院殿

〔上包〕
入來院殿

勝久

尚々此度之弓箭、於弥憑入計候、實久事郡山へ被越候、明日此方へ手仕候由聞候、然者帖佐へも合力之義候者、自其方も可預見次候、

就今度之逆乱、人衆馳走祝着之至候、然處、舍弟刑部少輔討死之事、合戦之習と者乍申、無念之至無是非候、雖

然、自身之勤、其上忠節旁以無比類候、永代何様不可有忘却候、恐々謹言、

〔天文四年秋〕
十月二日

勝久(花押)

肝付越前守殿

〔勝久公御譜中ニ在リ〕

〔勝久公御譜中〕

〔正文在入來院石見重頼〕

又此方へ、今明日衆遣之由、其聞候、爲搦手、市來宇良之事、可被仕詰武略肝要候、此方へ衆遣候者、彼境可爲無人衆候哉と存候、

今度者、被勵忠勲、一味合力、感悦之至候、爲其忠賞者、郡山・隈城兩所之内、御所望之地可進候、於弥頼存候外無他候、尤以使節雖可申候、好便候間、先以顯心底候、今度開運事候者、報厚恩度計候、恐々謹言、

〔天文四年秋〕
十月三日

勝久(花押)

〔重頼〕
入來院殿

〔上包ニ有之〕
入來院殿

勝久

〔石谷伊賀守梅久譜中〕

天文四年乙未十月十日、實久以下逆徒亂入麿島、放火村市、勝久公却之出奔帖佐、實久押領鹿兒島、而後彌奮逆威、時 貴久公密賜一封于梅久父子、其旨不忘奮好、

可抽忠節、梅久・忠榮奉應 殿命俟時、

2254

「勝久公御譜中」

「正文在肝付伴兵衛兼重」

前日以使者如申候、女房之事あまりいつとなくかこ嶋へをき候へ、外聞不可然候、就其、栴山殿・本田同前にたのミ存候、かいふん心にそへ候て、急度むかへ取候て給候へ、何よりも奉公たるへく候、こゝもとの調はう、ひとへに憑存候外無他候、入魂無余儀候へ、可爲祝着候、たとへくりとり候ハすとも、舟本まで船を遣候て、善惡の返事をきゝわけ候へ、外聞よく候するらん、いつかた其方を頼存度申候、左も候へ、一日もいそかし候、おなしなからはやくしくてうはう候へ、一段可爲喜悅候、恐々謹言、

十月十八日

勝久(花押)

肝付越前守殿

2255

『山之口的野正八幡宮棟札』

謹奉再興正八幡宮之宝殿一字、伏以當社者、和銅三年創造尔來号的野山弥勒寺云々、忝日州島津御庄三侯院宗廟

靈驗無双基也、雖然、前年當干戈紛冗之時、靈場也墮劫

灰、爰北郷賢主忠相、抽再興之願悞、天文四年龍集乙未

春之仲、聚良材斧成風、以同至仲冬修造功落成、種々宝

莊殿萬代久昌令月撰第二十四冀、以爲遷宮願滿之嘉辰云

、

天文四年乙未十月廿四日

大檀那北郷主君藤原朝臣島津忠相并忠親 忠孝 久厦

座主僧燈權少僧都覺睿

2256

『川上氏文書』

薩摩國串木野并荒河・市來院之内河上之事、今度依當國

錯乱之次第、一段被抽忠義、懇志之段、此三ヶ所進之候、

天文四年十一月七日

實久(花押)

河上上野守殿

2257

『正文在國分宮内社司澤氏』

願文

一所領祈進可申事、

一大節供七年可上申事、

「是ハ仲者之□にて候」
一領地よりおし合候て、三年こくたうまい可上申事、

天正四年十一月吉日

新納
近江守武久(花押)

(本文書編年ヲ誤レリ)

〔庄内平治記〕

一天文四年十一月廿九日、北原か領する處の志和地ニ兵を遣し、城下の町ヲ攻破り、敵首五ツを得るのミならず、生捕百五人也云々、

〔北郷忠相譜中〕

同年十一月二十九日、忠相破北原領志和地城下町、得首五、生捕百五人也、

〔勝久公御譜中〕

〔正文在龜山又六久運〕

不寄存候之處、一書被遣候、具披見候、仍豊州・新納殿意見之事、不可有餘儀候、今度如此之身上之事茂、其之所存候、聊我等非所行候、將亦入部之時儀者、其方之前候哉、言葉非呂之奉公者、於此前も無眞実候、被顯入魂之者、不可有吳儀候、恐々謹言、

伊地知周防守殿

勝久(花押)

〔新納忠勝聞書 天文四年所筆也〕

〔先祖〕
せむそ時御儀聞書

一時久御さい京の御時、かまくらにおいて度々御高名めされ事、然者十二月廿九日之日大合戦、一日七度之合戦めされ候て、御方にハふかてあさて十三ヶ所おい給ふ也、然者明正月さうてうにすりこをきこしめし候て、纏而露命めて度御座候也、

一きやうとの御御宿において夜うちミたれいり候て、御

衣しやう御こしのものことくくとり申候て、その時

つハなしと申候て、御うちかたなをとりあわせ候て、

散々にめし候て、てき人八人うちとめ候て御うんひ

らかれ候也、その時くわんれいあか松さまきこしめし

およひ候て、御せいを給ハリ候也、又その時御衣しや

うを御所望候へハ、しハらく御所に御とうたう候て、

御酒もりをこそめされ候て、ミヤこにおいて時久のは

たのしやく、そのかくれなしとうけ給也、

一たいりにて御さるかくの時、おそく御座候て、御門さ

ゝれ候て、我ら計つみちをひらりと御こへ候て、御ともの人數ハ外に罷居候、その時にめてのかいなをさしおろし候へハ、二三人つゝとりつき候てのほり申候、

又あい残り人、弓手の御あしをさしおろし候へハ、四五人とりつきのほり申候へハ、其時にミヤこ人、時久ハかたよりもこしつよく御座候哉申けり、かやうなるめいよを条々めされ候とうけ給ハリ候、

一 忠國御さい京とけられす候て、四國より御くたりのとき、先々しふしおいて御つきの候て、新納殿御はんしゆをめし仕候へぬとおほせくたさるゝ、その時面々したいを被申候、その時の御定にハ、くわんおんゐんうけ給候へ、時久のさい京の御時に、ミヤこにおいてりやう嶋津とうけ給ハリ候事、其かくれなしと御定也、

然者御うちの人と二にハあるましきよしを被仰候也、一 三ヶ國ミたり、國一きノ御時に、新納殿計御身方まいり候て、屋形の御うんひらかれ也、又しうきニても、御ゆミヤニても、度々の御ほうこうめされ候也、たいかいかやうには、へ可申候、

一 國一きの御ゆミヤの時、江州一人之たいしやめされ候て、坂より上しゆおひゝくしま又ハねしめゝきもつき

又しやうない・わた・高木、この面々御てき被申候を新納殿身方にかたらひとり候て、この人々をめしつれ候てかこしまに御まいり候也、その時せうふさまに

せいを御遣候て、其後こそ禍なく和世ニ罷成候、これ又ミつとのとのりの年、當年八十三年に罷成候也、一 いとふ殿において御弓矢をめしかけさうらう時、三ヶ國とうしん候て、ひふかの國とのほりの城におしよせ、城を御つめ候へハ、すてにいとふ殿御なんきにおよひ候ての時、新納殿御義をもて、禍なくふしに罷成候、

然者いとふ殿の御あんのん御座候事、道のうのはからいにて、かやうにこそ御座候へ、これ又かやうにこそ覺可申候、

一 せうおうの御しきよノ時、いしゆゐん殿御しゆこをのそミ申され候て、御いはいをもち被申候也、その時にきてんの守さまハ、ひうかの國むかさの城よりかこしまに御つき候て、このいはいをうはいとり候て、やか十八年、御たひをめしおき候也、その時にいしゆゐん殿きてんのかミをふせ申候て、かこしまにとりうめしかね候て、すへよしのことく御かへり候也、其後者、かこしまに十三度めはミいり候て、つるニしゆことなり

ね候て、すへよしのことく御かへり候也、其後者、かこしまに十三度めはミいり候て、つるニしゆことなり

給ふ也、これ又かやうにこそ覺申候也、

一 忠國【御佐】むかさの城に御座の時、いとふ方とりとめ申候て、

【頭注】「文安二年九月八日藤佐城攻落ト伊東大和守祐興カ承伝ニ見ユ、実ニ此時忠國すでに御なんきにおよひ候時、新納殿よりかふとノ事ナルヘシ」

二 敵の中をしのひ候て、むかさの城にこめ被申候、その時之人數にハ、長野のひたち方・眞幸の三郎太郎方

このりやう人の衆、てきなかをしのひ候てむかさの城

のりこもり申候、これ又ハたいかいかやうにこそ覺

申へく候、又其時に、御屋形方のおとな【乙名】にハ、枝方と申

候いとふ殿のおとなに申あハせ候て、やかて和世【文安二年九月八日ノ事カ】に罷

成候、御屋形さまハかこしまへ御かへり、何事なく候

てめて度候、これ又新納【忠臣】へ道のうの御とりなし候て、

御屋形さまも御あんのん、いまにめて度候、

一 九年せいしやうの時、きもつき方又平田方・大寺方・

かのや方この四人の人とうしん申され候て、御屋形に

てき被申候也、その時新納殿よりして、肝付のおとな

やく丸方又にしむた方このりやう人に、新納殿の御所

領を五町つゝ十町御遣候て、御屋形の身方にめしなし

候事、これ又きんたい【近代】の御事にて候へハ、若人も覺可

存候哉、

一 さるの年の御ゆミヤの時、さつしうさま、ほうしうさ

まとうしんめされ候て、すてに御屋形さまなんきおよ

ひ候時、江州さまのおほせにハ、誠々御屋形さま御な

んきにおよひ候了、おひのことくにいれ申候て、世の中

のていを見申さんとおほせ候へハ、其後こそおのく

御身方に参り候也、これ又新納殿めしなし候て候へ、

かやうなる事各々およく候へ共、まつくたいかい

やうに覺申へく候、

一 大里の御一見の時、ねう【女】はうさまに御めを見やハせ候

て、はとふくと申けるまくらこと葉をおほせ候へハ、

それを少しも御存知なく候て、のちに御返事をめされす

候て、御こう【後】くわいめされ候也、

一 和歌云、

ますらおかはと吹秋の夕間暮

とまれと人をいかぬ計を

かやうなる和歌を委敷御存知なきも、歌道を少御稽古

なきよて、これ計のミヤコにてとハ、御おつ度候とう

け給ハリおよひ候也、

一 ねしめ【編】・きもつき【肝付】・おひ【妖肥】・くしま【編】此方々たうのうを取

立可申よし申され候、きてん【義天】聞しめし付候て、末吉ニ

御出候を、たうのうきこしめし候て、我等たくまん【巧】儀

右四ヶ条者一代たるへき事、

ニ候へ共、上意ニちかひ候うへへとて、ほつしんして
いゝくま【北】マニのき候を、本かう殿取なしを以、松山にて
御目懸られ候、

一時久日向國新納之高城に居住、在名によつて新納とか【号】

ふす、此時貞久様爲御代在京、其留主に彼所を伊東う
はいとり候、其後薩摩國高江を貞久公より被下住す、

其以後救仁院知行、彼所者御所卷之節、時久依被抽忠
勲、從 尊氏將軍直ニ被成御判所也、

一笠袋・鞍覆之儀も、右之刻尊氏將軍新納之家ニ御免之
事、

一長光之御太刀拜受候之事、

一此時從 御屋形様ハ、御賀札を諸一家より最前ニ被下
之事、

一年頭出仕之刻、御内之御門を御開候之事、

一八朔太刀、諸一家より初ニ御請取之事、

一弓袋ノ儀者、小笠原光清、鵜戸就參詣御下向之刻、御
免之事、

一くま柳之むち、同犬打むち事、

一あかうるしの引目事、

一あわせ之事、

忠良公 自天文五年
勝久公 至同十年
貴久公

前 舊記 雜錄 卷四十五

2262 「義弘御譜中」

天文年間、薩隅日三州中健將勇士各乖離不和寧、匪畜不和寧、且復逆徒等往々蜂起、侵土地、殺土庶、是以不得已、而教軍衆討凶徒、予也自少之時著戎衣帶兵器、置身於戰場之危地、任命於時刻之到來者也、

2263 「國史 卷十 大翁公 大中公」
六 梅岳君

五年丙申春二月二十五日、北原氏遣兵襲安永、北郷忠相擊敗之、據島津支流系圖、島津實久使町田中務少輔久用居伊集院城、梅岳君遣人誘之不從、會久用如鹿兒島、三月七日、

梅岳君與 公俱帥千餘騎、襲伊集院城、遂陷之、據梅岳君套軍 久用、町田氏之支庶也、島津支流系圖、町田清久第六子日記、土佐守則久、久用、則久之曾孫也、

夏 大翁公如眞幸、遂居吉松般若寺、依北原氏、據大翁公松時為北原氏邑、梅岳君與 公謀歸 大翁公、遣使迎之於眞幸、

大翁公不肯、據弓箭起記、樺山助太郎家藏文書、黃套軍記、並言天文五年、梅岳君下伊集院城、大翁公聞之大喜曰、庶乎可以入鹿兒島矣、觀此則歸鹿兒島者、大翁公之所欲也、而終不肯、其故何哉、梅岳君舊譜、載大翁公七月二十五日書云、莊嚴寺、具開示諭、當與北原氏謀、此書無年、先史注其旁云、疑是天文五年、而所謀不詳何事、豈與北原氏謀歸鹿兒島、北原氏不許乎、蓋大翁公為島津實久所逼、不得已去鹿兒島、如帖佐依那答院氏、又如眞幸依北原氏、又如莊內依北郷氏、其心未嘗以一日而忘歸鹿兒島、猶言者不忘視、痿人不忘起也、然竟不能歸、乃如豐後耳、秋七月二十三日、大翁公如莊內及豐後、見第十七卷天元元年、

大翁公賜入來院石見守重朝百次城、酬功勞也、據大翁公舊譜、載六月三日賜入來院山城守、東郷越後守書曰、石州每事輒竭心思、卿等二人亦與有功焉、幸甚、此書無年、先史注其側云、疑是天文五年、石州即石見守、又載天文六年三月賜入來院氏書曰、近日入國之謀、殊賴卿力、觀此二書則入來院氏有功勞於大翁公、亦可知矣、百次城遺墟在百次郷地、重朝、重聰之子也、據入來院主馬系頭館東三町許、係百次村、入來院重聰見第十三卷、

初島津忠朝使六郎三郎忠吉守串良城、肝付兼興攻之、新納忠勝應兼興、絕串良、既肥往還之路、城中益困、忠朝使告忠勝曰、當以串良與安千代殿、願拯城中之衆、忠勝曰、諾、既而兼興殺忠吉、陷串良城、忠勝不救、由是忠朝怨之、八月十一日、伐志布志、據島津內膳家譜、忠勝次子孫四郎忠常者、忠朝弟備中守忠秋之孫也、幼字安千代丸、蓋是時約婚既定、故忠朝欲以串良與之云、按肝付兼興陷串良城、在上卷天永四年、島津支流系圖、天文二年忠勝老、長子忠茂立、則此年、領志布志者即忠茂、九月二十三日、梅岳君遣伊

集院忠朗、拔伊集院大田原壘、據梅岳君舊譜、黃套軍記大田原壘遺墟在伊集院地頭館西北一里有餘、係冬閏十月十八日、島津忠朝復擊志布志、破市井野田村、

據島津內膳家譜、志土橋勘解由左衛門尉因桑波田孫六左衛門尉・鮫島某乞降、十一月二十八日夜、燔伊

集院長崎壘、來降、據梅岳君舊譜、黃套軍記、伊集院氏支族有土輔見上二年、而桑波田孫六收局不詳、此云桑波田孫六左衛門尉、伊集院即孫六欵、長崎壘遺墟在伊集院地頭館東一里餘、係竹山村、

院神殿壘戍兵有屋田氏・關氏・否笠氏、皆應梅岳君、二十九日、梅岳君下神殿壘、同上、伊集院支族有屋田、石谷氏、伊集院神殿村多古城壘、

伊賀守梅久、與其子長門守忠榮居伊集院石谷城、梅久、賴本之孫也、石谷賴本見第十卷寶德元年、島津實久之反也、公賜梅久、

忠榮書曰、無負舊好、梅久・忠榮咸聽命焉、而脅於實久、未能從、公、及梅岳君連陷伊集院諸壘、梅久父子倚之、

密獻、公書為內應、而實久意忠榮有異志、召梅久及助太郎忠梅為質、忠梅、忠榮之子也、忠梅後改久德、稱兵部左衛門尉、又遣大

寺壹岐守、守石谷城、十二月七日曉、忠榮潛迎梅岳君衆、殺壹岐守、是時肥後大和守盛治法名助西、居竹山壘、盛治子周

防介盛家居谷口壘、皆實久黨也、各引其軍、圍忠榮於石谷城、忠榮潰圍一角、而出奔梅岳君師、大寺壹岐守之來

也、忠榮以內應謀泄、遣間使、告梅久・忠梅、使逃歸、梅久使忠梅奔梅岳君師、而梅久將還石谷、由小徑、至萩別

府、為盛治兵所害、據梅岳君舊譜、島津支流系圖、肥後平右衛門系圖、盛治黨於實久、不從、以谷口城降大中公、與此不同、石谷城、谷口壘遺墟在伊集院地頭館東南一里有餘、一係石谷村、一係谷口村、竹山壘遺墟在長崎壘北、萩別府屬大迫村、六年丁酉春正月七日、或作、梅岳君陷竹山壘、殺肥後盛

治、據梅岳君舊譜、十一日、本田氏遣東條出羽守、侵鹿兒島、破

壤福昌寺以下寺社、據梅岳君舊譜、福昌寺年代記、年二月、福代記作二月十一日、今從舊譜、

山・大迫二壘降于梅岳君、梅岳君遂與、公擊鹿兒島、行至大迫而止、島津實久悉府下兵逆戰、園田實明引兵自小

野至、擊實久軍後、實久敗走、奔谷山、遂奔川邊、據梅岳君舊譜、黃套軍記、伊集院福山村有古壘、在地頭館東一里有餘、大迫村中有古壘、又川路山有古壘、並在府城北二里有餘、中與地名、梅岳君舊譜云、梅岳君大破鹿兒島兵於小野栗山坂下、斬獲極衆、士卒譟譟、拊手鼓舞、

呼其處為鼓筒、郡山遜志云、小野村有南泉院別業、即鼓筒地不知何據、三月三日、北鄉忠相陷岩川新城、生獲二千餘人、據島津支流系圖、岩川新城係新納忠勝所領、遺墟在末吉鄉地頭館西南一里有餘、係中之內村、中之內村、五十町村、岩崎村總稱岩川、見第六卷延文四年注、

十二日、梅岳君與島津實久戰於紫原、據梅岳君舊譜、向井源實久戰於紫原、友茂死、紫原在府城南一里餘、十四日、大翁公

與入來院重朝書曰、今日入國之謀、惟君尤盡其心、因賜君郡山城及三十町之地、據大翁公舊譜、入夏四月、實久如

加世田、五月、梅岳君與實久講和、因請以伊集院・鹿兒島・溪山・吉田、易加世田・川邊、實久不聽、復與那答

院氏俱反、據梅岳君舊譜、冬十二月二十四日、大翁公以

本田董親為向島地頭、賜之嶽・藤野・松浦・西道・赤水

及荒田名八十町・澤牟田名十二町、賞功勞也、譜、大翁公奮
辻横、向島有嶺村・藤野村、大翁公之奔帖佐也、島津實久
・松浦村・西道村・赤水村、

欲爲守護職、乃如都城、告北郷忠相、忠相許之、如鉄肥、
島津忠朝亦許之、遂與忠相・忠朝及清水領主本田董親如
志布志、會肝付氏・禰寢氏等至志布志、與告於新納四郎

忠茂、忠茂與父忠勝謀焉、不可、於是忠相・忠朝等與實
久謀欲先滅新納氏、而實久如清水、召募大隅兵、誘生別

府城主樺山幸久、幸久應之、據島津支流系圖新納氏・樺山氏
譜、樺山玄佐自記、新納忠勝考、

忠茂嗣、見上、按樺山幸久事公無貳者、譜、
也、今應實久、豈出於一時自免之許乎、初北郷氏領隅州財部院、
新納氏取之、據島津支
流系圖、

2264 天文五年丙申

二月二十五日、池袋源左衛門尉宗政、北郷忠相の臣にて、北
原氏が安永城を攻るを
拒ぎ、
戦死、

八月十七日、調所新五郎、隅州奈良道
にて戦死、

十二月七日、石谷伊賀守梅久氏、伊賀守梅吉の子なり、本姓町田
氏、石谷を領し石谷を氏とす、
鹿尾嶋より石谷に回る途中、肥後助西と萩別府に戦ひ、長
山某に接して死之、下の二人一族にて同じく戦死す、町田八
郎左衛門尉忠親・町田三郎右衛門尉忠親弟也、年
四十六歳、

2265 「庄内平治記」

一天文五年二月廿五日、北原山田の兵ヲ催し、安永を攻
んとす、忠相の兵防戦ふニ利を得て、敵勢六拾貳人を
討、此日家臣池袋源左衛門尉打死す、

2266 「北郷忠相譜中」

天文五年丙申二月二十五日、北原某使山田兵襲安永、忠
相兵防之、得勝利、斬獲六十二人、家臣池袋源左衛門尉
死、

2267 「谷山伊佐智佐權現文書」

坪付薩摩國谷山之郡和田名

一七段廿 霜月廿日御祭田 たへた

一壹段 こんはうわふ つゝみた

一壹段 五月五日かくらてん せゝくし

一壹段 五月五日かくらてん はらいてん

天文五年二月吉日 重正

伊佐智佐神主孫左衛門殿

2268 「勝久公御譜中」

「正文在肝付伴兵衛兼屋」

2270

「日新公御譜中」

伊集院城主町田中務少輔久用、深與實久而敵于我焉、欲入此地於我之手裏、密屢誘之而敢不屬旗下、經春秋者多

2269

新年御慶(申進之)

尚以幸甚候、如仰之久不申承候、心外之至候、何様懸御目候て連々時佗可申承候、就中、(忠勤)(忠徳)豊州新納殿參會候するらん風聞候、然者旁々かこしまへ御參上候へ、老後之思ひ出ニ承候へ、何ともなり度候、餘々世間も無勿躰やうニ候へハ口惜候、恐々謹言、

二月廿七日

(書メズ) 肝付殿(花押)

御返報

重々狀進之候、先度申候祓寢へ乗舟之事、便舟などにてハ不可有曲候、態二夜伯(泊カ)ニ舟をしたてられへく候、祓寢より來候女共之事、しきりに女房之所より被申候間、きたんをやめへきために一人返候間、早々舟之事頼入候、恐々謹言、

二月廿五日

勝久(花押)

肝付越前守殿(兼書)

2271

『實久公記』

一天文五年丙申三月七日、忠良入道殿御父子三人相計而

矣、其間久用爲評議往實久之所、有不在之聞、是以天文五年丙申三月七日、日新父子三人自將引率一千餘騎之精兵、待夜暗襲取伊集院城、同年九月廿三夜、別記曰十三夜、再可考之。使伊集院大和守忠朗爲將帥襲取大田原之壘、土橋勘解由左衛門尉憑桑波田孫六左衛門尉・鮫島某、通歸服之意於日新父子、以十一月廿八日、放火長崎之壘、忽降來矣、神殿守兵有屋田某・關某・否笠某等請屬旗下、日新聞焉、同廿九日、率師旅企發向、于時降雨日已暮矣、欲行而不辨前路無何之如、爰有一慶瑞現日新之左傍者、始也如螢火之流草際漸長、終也似蠟燭之照座席、如斯者兩三箇、先軍衆暉路頭、日新以爲、是蓋稻荷大明神之助也、正心誠意祈敬不斜、衆亦皆共金剛合掌而拜之賀焉、無前路之障、到神殿之壘忽所以入手裏也、石谷長門守忠榮歸情於日新父子、然而守兵衆多、不任己之意焉、同年十二月七日曉天、潛招伊集院之精兵、而守兵之將大寺壹岐守已下之士卒悉屠殺、以降來伊集院矣、忠榮之父伊賀守梅久者、欲自麴島退伊集院之路、於萩別符邊地爲長山氏被屠殺矣、

伊集院之城ヲ切落ス、此由ヲ眞幸ヘ致注進間、是入國之基成トテ御悅ハ無限、「以下末ニ載セタリ」

2272 「石馬頭忠將譜中」

一天文五年丙申三月七日、忠良攻伊集院而放火、忠將之手討捕古垣次郎・矢木主殿左衛門・若松内藏之助以下十六人、陷伊集院城、此時忠將十七歲、

2273 「町田氏系譜中」

梅久

八郎左衛門尉 伊賀守

天文五年丙申三月七日之夜、貴久公攻取伊集院城、在之、奮威于遠近、梅久父子潛進使節數奉内通、同年十二月六日、忠榮馳飛脚於鹿兒島、告梅久曰、兼奉約 貴久公、密謀既顯、故明日將舉旗、速退來、依之梅久携嫡孫忠梅、及深更、潛出鹿兒島、自千手堂前、經小野之徑路退去、使忠梅直參伊集院城、梅久者要野趣石谷城、失道徘徊、夜將白、不圖會實久之旗下肥後助西之兵於秋別府、梅久奮戰、而後爲長山某被討、相從一族家臣共戰死、

忠榮

助太郎 兵部左衛門尉 伊賀守 長門守

忠榮改石谷之號、復本氏町田、氏族皆同焉、忠榮奉應 貴久公之嚴命、公感其志、天文五年之七月、忝賜御證判、忠榮頂戴、彌欲抽忠志、時實久疑忠榮、使大寺壹岐入石谷城爲警衛、其兵六十計、且招寄老父梅久幼子忠梅以下一族、於鹿兒島質之、以故不能起事、窺其隙、

石谷城者介谷口・竹山兩城間、谷口地頭肥後周防

・竹山地頭肥後助西者無二實久旗下也、相議欲攻

石谷事已急、忠榮察其機、〔文ノ誤カ〕天正五年十二月七日曉

天、招入伊集院軍衆、擊殺大寺以下警衛之士、因

之谷口・竹山敵兵來攻城、且實久將大軍屯一本松、

谷口・竹山之兵乘機攻之甚急、忠榮慮不能保城、

擊破敵之圍、向伊集院退去、敵兵慕之攻擊、一族

家臣戰死者多、

貴久公感忠榮之忠功、蒙安堵本領町田石谷、加賜

神殿之高命、再入石谷城而傳其榮于子孫、

法名悅峯源怡居士、

忠成

三郎四郎 民部左衛門尉 因幡守 子孫記別紙、

久徳

始忠梅 助太郎 兵部左衛門尉

大永元年辛巳誕生於石谷城、

天文五年十二月六日之夜、從祖父梅久、退去於鹿兒

島、時梅久使忠梅直參調于伊集院上達其情、貴久

公御感不斜、其後被侵疾病、不能拔攻城野戰之策、

空忠志不幸哉、

法名香中玄通上座、

忠房

中務少輔 子孫記別紙、

2274 「町田氏庶流系圖」

久用

又七 治部少輔 中務少輔

久用黨于實久、守伊集院城、天文五年三月七日、貴

久公率軍攻落焉、

2275

「新納嫡家藏」「三河忠徳入道楚旨」「此書新納忠勝譜中ニ在リ」

御屋形樣就御進退之儀

一實久江被仰渡、難澁之時者、可有如何ニ候之狀之事、

此時者忠嗣豊州江重ニ可申之事、

一彼所存之樣之可被仰出事、先者連判衆被捨間敷之由候

事、此時者實久へ以前之辻連判衆可有分別之事、
〔天文三年八月ノ比カ、川上昌久等十六人〕

一御屋形樣御曹子御前依御入部之事、此時者勝久曾以世

一相州就伊集院之儀之事、〔忠房〕先以御家之可為御再興之事、

〔三月七日忠良公父子三人、夜掛ニ伊十院ヲ召取テ事ヲ勝久ニ真幸ニ告ク、公モ入國ノ基ト御悅也〕

一所領等之事、此等之儀者、入間敷之事、

一實久被成御納得御談合之時之事、至宮内可然之事、

一實久入來・東郷間之事、何れも和平之事、

一相州爲御使、境目之校量郡答院方可申合之事、〔伊勢守也重武以棉毛遊谷衆談合之事、〕

一相州御使之儀〔藤山女佐ノ一所也〕老別府・〔加治木・蒲生へ可申通之事、此分さしよせ可然之事、〕

一菱刈之事、〔天岩〕

一〔伊地知重興〕下大隅上井敷祢之事、

一伊東殿之事、〔義祐〕

一相良殿之事、

一相良殿之事、

一吉田へ校量早々可然之事、

一相州へ自三家爲使節、〔新納忠勝、肝付兼領、本田重親〕 祇答院より使僧之事、〔重武〕

于時天文五年三月十一日

〔御屋形様へ勝久公也〕

御曹子へ天文四年生玉ヲ修理木夫志良ヲ云カ、

御前へ根占罷重ノ女也〕

〔此文書へ、勝久公帖佐より眞幸般若寺に御移之時、忠勝般若寺へ參

上して奉伺候条書にて、禪山玄佐日記に合へり〕

2276
〔正文在楚司〕

雖比與候短尺書進之、

雖未申通候、由緒異于他事候間令啓候、抑一乱以來不辨

之儀難盡紙上候、此時一段預合力候者可爲祝着候、併芳

情願入候、猶九澤軒申合候、每事期後信候也、狀如件、

〔天文五年〕

卯月廿七日

〔近衛尚通公〕

〔花押〕

嶋津近江守殿

〔上書〕
嶋津近江守殿

在判

2277
〔新納氏藏〕

雖未申付候、以事次令啓候、抑 御家門御事吳于他御由

緒候處、御無音実背御本意候、定而聞召及候哉、 公方

様御祝言之事被遂其節、既去三月 若公様御誕生候、天〔足利義輝〕

下安基御家門殊御大慶候、自然相應之儀可申入、隨分不

可存疎意候、然而依數年都鄙亂逆、御家領等非分族押妨

候、言語道断候、如今者可及御断絶條口惜次第ニ候、

此砌以舊好之儀、被成御馳走被扶助申候者、公私所仰候、

此等趣態可被差下御使節之由御有増候、不知案内之間延

引之刻、九澤軒下國之由候間、雖被致故障候、種々被仰

被言傳御書候、并花月五十首御筆、同從禪閣御書短冊十〔近衛尚通〕

首御筆乍御憚被下候由、得其意可申旨候、猶彼軒可被演

説候、可得御意候、恐惶謹言、

卯月廿七日

長美〔花押〕

謹上

嶋津近江守殿

御館

進藤筑後守

謹上

嶋津近江守殿

御館

長美

〔右將軍家譜ニ稽レハ、義輝へ天文五年三月十日誕生、母近衛閑白尚

通女トアレハ、去三月若公様御誕生ト云ニ相當リ、又花押數ヲ按ル

ニ、判形モ尚通公ノ花押ニ疑ナケレハ、卯月廿七日トアルハ天文五

年ノ事也〕

2278

〔御譜中〕

一天文五年丙申之夏、適于眞幸、居于般若寺者數年、其後適于莊内、居于都城者有年矣、

正興寺

正國寺

正高寺

天文五年六月十六日

田所檢校(花押)

2279

〔勝久公御譜中〕

天文五年丙申之夏、適于眞幸、憑于北原氏、而居于般若寺者有年矣、然而不得復本、去此適乎庄内都城、雖北鄉氏之請救不能也、

〔前文ノ如ク昔時寫置ケリ、異同アリ、參考スヘシ〕

2281

『入來院氏文書』

薩摩國千臺郡之内百次城所領之事、爲忠節之賞宛行處也、早任此旨、可被知行之狀如件、

天文五年七月廿三日

勝久(花押)

入來院殿

〔包紙〕
入來院殿

勝久

2280

〔國分宮内澤氏文書〕

四所之宮御造營茶番之事

一番 桑幡殿

二番 田口殿 朝順

三番 最勝寺殿 若宮〔不詳〕

四番 大津殿 專与

五番 政所殿 刑部少輔殿

六番 永仲

七番 修理執行殿 直人

兩座より

2282

〔日新公御譜中〕

〔正文在吉松般若寺〕

其方御心底之通、今度以莊嚴寺、細々示給候、祝着此事候、然者則北原方へ談合之間、以得心般若寺別當爲使節被申候、彼依旨意趣、其方之相談可爲肝要候、此方之事弥以其之父子憑存候、覺悟之外更無他候、細碎莊嚴寺可被申候之条不能審候、恐々謹言、

〔天文五年カ〕

文月廿五日

勝久(花押)

相模守殿

2283

一奉勸請田布施池邊村當地頭政郎郷

薩州市來院諏訪上宮社本

大願主島津忠良并貴久

裏天文五年丙申七月廿三日

權少僧都頼盛誌之、

右者田布施池邊村諏訪御神鉢

(本文書底本ニ欠ク、鹿兒島県立図書館本ニヨリ補フ)

2284

『感應寺文書』

建長寺住持職事、任先例、可被執務之狀如件、

天文五年八月十二日

左大臣義晴判

尚珊西堂

2285

『貴久記』

「天文五年」

一同九月廿三夜、伊集院大和守「忠朗」ヲ爲武將、大田原之椿ヲ

忍取、霜月廿八日、土橋勘解由左衛門尉長崎之椿ニ懸

火、可參御方由、桑波田孫六左衛門尉・鯨島兩人ヲシ

テ申、九月廿九日、從神殿椿、有屋田・關・否笠軍衆

ヲ引入、御幕下ニ可參由ヲ申、故ニ忠良入道彼地ニ發
向ス、從本無シ月者、雨者降、鬧事前後ヲ不弁、爰ニ

一ツ瑞相有、入道殿之左右方ニ始者如螢火之見エケル
カ、後ニハ有明之蠟燭程ニ成而、二ツ三ツ先立ケルト

カヤ、稻荷明神之感應成とて各奉合掌、同雪月七日、

石谷伊賀守御方ニ被參、「以下末ニ載ス」

2286

「正文在川上十郎左衛門家」

又雪花之事得其意候、急度申付候て可合力申候、

態用一書候、仍其方之儀以澄眞、委數被申遣候、誠懇意

無比類候条喜悦之至候、殊當時地頭なともなく候處ニ、

偏此方以一味之心中、無余儀奉公之辻、何様永々不可有

忘却候、中ニも、河上十郎左衛門尉・河上山城守・否笠

佐渡守・伊地知七郎三郎・有屋田治部少輔・鹿嶋中務少

輔入魂候由承及候、一段頼母敷こそ候へ、於弥番用心堅

固、當概油断有間敷事、萬端頼入候、巨細之旨此僧申含

候間可口達候、恐々謹言、

十一月廿五日

(勝久)
忠兼(花押)

石谷伊賀守梅久
天文五年 心傳中空上座 十二月六日

右ノ墓誌銘文中如左、

〔上文略〕
蓋天文中、君自鹿兒島如石谷、遇島津實久黨肥後助西於萩別府、力戰而死云々、諱梅久、始稱八郎左衛門尉、後稱伊賀守、心傳中空其法名也、天文五年十二月七日卒云々、

〔町田氏庶流町田三郎五郎忠光孫〕

—忠親

左京亮 八郎左衛門尉

天文五年丙申十二月七日、於薩州石谷戰死、年六十

一、

三郎右衛門尉

天文五年丙申十二月七日、與兄忠親俱戰死于石谷、

(本文書ハ二三〇二号文書ト同文ニツキ省略ス)

天文六年丁酉

正月七日、伊集院又七郎忠次周防介忠胤嫡男なり、梅岳君肥後助西を竹山城に攻られ、助西等十三人を斬獲せられし時き戰死、年二十二歳、

二月、松崎藏之助梅岳君伊集院の福山城を攻る時戰て死之、或五年の事とす、此に置塚考、

山田加護右衛門伊集院戰死とあり、年月なし、此ニ塚考、

三月三日、城ヶ崎六郎次郎儀貞北郷氏臣隅州末吉君川にて戰死とあり、 十二

日、向井新右衛門尉友茂梅岳君實久を谷山紫原に伐給ふ時、戰て死之、

八月七日、平田安房介宗清阿多宮崎本地川原の戰に死す、下同し、年廿五 武元又

九郎年二十 五歳、

『實久公記』

一明者天文六年丁酉正月七日、竹之山之柁ヲ被攻、從入來院合カス、他之勢ヲ借事是始也、肥後助西其外名字之者十三人討取、同二月、敵福山之柁捨テ去ル、同月犬迫之柁セメトル、去程實久衆鹿兒嶋・谷山に不忍シテ、同七日、如川邊之越山ス、「以下末ニ載ス」

『榊山玄佐日記』

一されは、昨日ニ變る飛鳥川にや、伊集院を可被取返、〔實カ之〕實久御談合ニ而、實久・實久成御弓箭与、先竹之山之

栳へ肥後怨世入道を移し、其外栳之事、續との促最中ニ、竹之山を日新様被切取せ、肥後入道を被討取、從其栳共皆々井敷之城迄召取、實久鹿兒嶋御勘忍難成、〔倉良・本城、神前以上谷山三城也〕谷山三之城、山田倉良に平田備中守、本城へ祢寢幡磨守、神前へ駿河守殿、爰を全に御覺悟ニ而、さすかに鹿兒島へ御手ニ及ハす見得しを、東福寺に本田入番衆、向之嶋を拜領す、無幾程東福寺を捨嶋計を領す、〔天文六年二月十一日本田親兼命東条出羽掾取之〕掬昌寺を打破、本尊開山をもしらす、雜人原取寺物事不及言語、乍去公門前池之上を栳、少々人家有し、夫をも又破、かゝる間に、勝久帖佐より眞幸般若寺へ御移之處、新納殿爲何臆意〔イニ病〕にや、忠勝般若寺へ參上有、

將又新納殿様於弥御相談之儀最以可然候、拙者彼御方へ連々申上度心底候之處、此一兩年者路次不輒候て、乍存毎事御無沙汰罷過候、口惜候、御次之時者、可得御意候、次自種子島年内使節進入被申候之由肝要候、於此方も満足候、於自今以後細々可申承候、可得御意事可畏入候、

御制文之趣具令披見候了、如蒙仰候、依無題目候、自是茂御無音罷過候、扱心底無疎洩存候、爰元御同前之由示

〔庄内平治記〕

〔上書〕
謹上 新納四郎殿
御宿所

三郎左衛門尉貴久

嶋津

〔正文在新納楚弓〕「此書新納四郎忠茂譜中ニ在リ」

仲陽之御大慶重疊、雖申夏舊候、猶以不可有分極候、多幸々、抑如此之御祝言最前可及賀祝之處、遠路延引此事候、從今春者弥々滿快之由承及候、以御同前候、仍而五

明貳本進候者、眞々表御祝礼計候、万吉、恐々謹言、
〔天文五年ノ開款〕
二月十日
三郎左衛門尉貴久(花押)

謹上 新納四郎殿
御宿所

肝付殿

御返報

給候、大慶此事候、仍而邪答院方連續相談之儀承候、悉皆彼方以指南在度候、於向後無二之心中迄候、然者御方之御事邪嵐一味之御心底候哉、雖遠方候連々可得御意候、奉憑計候、心事雖多尚期來喜候、恐々謹言、
〔天文五年比カ〕
二月十日
良清(花押)

一天文六年三月三日、岩河〔北郷忠相カ勢ニテ〕の新城を攻て生捕二千餘人なり、

2296 「北郷忠相譜中」

天文六年丁酉三月三日、忠相陷岩川新城、生捕二千餘人也、

2297 『入來院文書』

(本文書ハ二三一ノ号文書ト同文ニツキ省略)

2298 「貴久公御譜中」

〔源紙ニ〕「正文、かねにいつけ候て有之由候」

〔在伊集院衆本田吉藏〕

御稻荷大明神御本地

大檀越嶋津 藤原

朝臣相州忠良并貴久

願主石見房慶俊

〔朱カキ〕五年
天文丙申肆月廿一日

權大僧都頼盛敬白

2299 「勝久公御譜中」

〔正文在入來院石見重頼〕

先日者、從入來院殿預音信候、爰許之仕合断絶之時分、

一段喜入候、併兩人故実共之故候欵、祝着候、遂本意候

者、別而此礼不可忘却候、將又雖事新敷候、石州〔入來院重頼〕より連

々懇切之處、更難盡筆舌候、然者、以使節其礼共雖可申

候、とても兩人其方へ居候上者、先々心得可被申候、石

州之事、諸事雖満足候、今程廻船者、無格護候間、我等

於入國者、七嶋之内一所、爲此報謝可進當概候、此由可

被申候、又唆所より巨細之文共遣候、弥此方之事、矢入

之心底無他候、又東條事者、先度之讀物庭訓計未事行候、

廿日比閑諸事候て越候者、可爲喜悅候、同大山事、此程

益房虫氣ニ候間、同心ニ越之儀、待入候、其外所用共多

々候、廿日比兩人共ニ越之義、必々可待入候、恐々謹言、

〔天文五年秋〕
六月三日 勝久(花押)

東條丹後守殿

大山源左衛門尉殿

〔懸紙上書〕
大山源左衛門尉殿

東條丹後守殿

勝久

「勝久御譜中」
「正文在入來院石見重頼」

猶々弥以其方之事、憑入之外無他事候、

每々從石州丁嚙(入來院重頼)之儀、其礼難盡筆紙候、就其、各辛勞之

由、歡悅之至候、仍石州之事、諸事無不足之儀候へ共、

廻船者、于今無知行候間、我等於入國者、七嶋之内一所、

此間之爲報恩可進候也、恐々謹言、

〔天文五年秋〕
六月三日 勝久(花押)

入來院山城守殿

東郷越後守殿

〔上包有之〕
入來院山城守殿

東郷越後守殿

勝久

「勝久公御譜中」

「正文在入來院石見重頼」

(本文書ハ二二八一号文書ト同文ニツキ省略ス)

「樺山氏七代信久譜中」

「正文在樺山源三郎久清」

「牛王」

起請文

「日新公御譜中」

一雖世間如何様轉變候、一度申承候上者、於永々不可存疎儀之事、

一如此申合候處、從敵方以城所領、計策之儀雖有之、不可同心之事、

一以和讒雜說之時者、相互可申披之事、

一於後々自然旁御難儀之時者、別而形中取出、可致御合力之事、

一各矢先雖安堵候、一人之前於無入眼者、弓箭可相支之事、

事、

右此旨於偽申者、上者梵天帝釋護世四王、下者堅牢地神、九州鎮守彦三所權現、殊者當所鎮護稻荷 須久塚

兩大明神、惣而日本六十餘州神祇冥道之御爵可罷蒙者也、仍起請文如件、

天文五年丙申十二月吉 藤原忠相(花押)

(備忘)
樺山殿 北郷

樺山殿 忠相

参

参

参

参

参

参

参

参

参

参

参

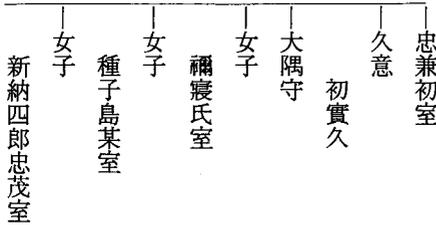
〔薩州家實久譜中〕

天文六年丁酉正月七日、或記曰九日、再可考之、陷於竹山之壘、肥後助西及士卒十二三輩斬獲之矣、入來院某合力增勢、假他之勢始于此也、同二月、敵兵棄福山壘退散、同月、犬迫壘亦降來矣、故實久不得支而捨麿島遁於谷山、同月七日、去谷山、退川邊者也、園田筑後守實正有言曰、傳稱我之祖父清左衛門尉實正心於日新齋父子、是以貴久公從麿島退去之時、既致忠功矣、其後召清左衛門尉、而有陷麿島之評議曰、以小野可陣營、清左衛門尉報曰、以大迫構陣營佳乎、其故何者、構陣則麿島之騎步銳前、可發向于其地、然則吾亦率自兵遮其後當攻討、如此則必可歸勝利乎、各同此義矣、而後日新父子之軍衆構陣於大迫、于時麿島之騎步悉向其地、清左衛門尉如前約遮其後、自東西競戰、以麿島之軍敗、而於小野栗山以西坂下悉被斬獲、丁此之時、日新方乘兵為喜悅之思、打手鼓以舞蹈、爾來以其地稱鼓筒云云、今藥園之地是也、

天文六年正月十一日、本田某使東條出羽守為將、以匪啻犯攻麿島、自福昌寺至諸神社、所以數箇之擊破靈地也、或記曰、三月十二日紫原合戰云云、首尾不詳、故不得記之、再可考之、

同年四月上旬、實久到于加世田、五月中旬、日新見實久為和睦、其故只有安國家保臣民耳、未久日新語實久曰、伊集院・麿島・溪山・吉田之地許子、而子之所領加世田・川邊之兩地與之於我、則如鳶魚之得其所於上下、而無少間斷、則誰敢侮我之三州乎、實久不諾而反、與祁答院俱運謀略者、所以日新之為憤恨也、

2304の2



先是 太守忠治・忠隆早世、以故其弟忠兼為太守、娶于之姉、使我掌國家政事、漸夫婦不和而離別、予亦不合太守之意而為氷炭矣、丁此之時、使島津相模守忠良司國政、且息男虎壽丸為猶子、加冠稱又三郎實久、禪守護職、去麿島、隱伊作、然而不經幾程、匪啻悔返其約、再入麿島、為國家之大亂、實久亦再會而雖在于麿島、漸漸武威衰微、而自加世田至薩摩郡、五ヶ年中令不知行、唯和泉四箇所和泉・高尾野・阿久根、所以領知也、法號昌嶽源久、

攝津守

山城守

中務

女子二人

女子

いせじやう加護結婚

2305

『貴久公記』

〔天文六年也〕

一同四月上旬、實久加世田へ有着岸、五月二日、相州・

薩州兩家和平と成、是則思家思國ヲ耳、有時忠良實久

ニ向テ曰、領スル所之伊十院・鹿兒島・谷山・吉田ヲ

進テ守護と可仰と云々、加世田・川邊兩所ヲ去被渡者、

向後爲如水魚之、於無風波者誰人カ於三州侮ン、實久

誘引セス、剽邪答院カ謀略ニ同、又不知之由、有其聞

得聞、請太刀成テハ叶マシトテ、「以下末ニアリ」

2306

『玄佐自記』

一其脇實久・豊州御相談之ため、先北郷殿へ入御、從其

飢肥へ被越山、北郷讚州・本田紀州被召列、始中終御

談合と也、それより志布志江御越〔天文六年七月ノコト也〕・禰寝・肝付も被參、

2307

『玄佐自記』

實久守護の御望の御地躰を被仰候欤、忠勝江其頃肝付
・本田なども新納之進退なればにや、此儀無承引、さ
れは豊州〔忠勝〕・北郷殿〔忠相〕・本田於飢肥之内談、新納此事於無
同心、先新納殿〔忠勝〕を責亡し、其後南方へ可取向、其間實
久今分を專一に御分別と有けるか、

2308

〔肝付越前守兼濱入道以安傳〕

一天文六年七月廿八日、犬迫川ち山と云門、日新様を生
別府すみと申ニ御賜、其脇中村名御そのと云門、安藝
守江被下、

2309

『新納家九代四郎忠茂傳』

〔本文ハ二三二二号記事ト同文ニツキ省略ス〕

一天文六年丁酉、實久望守護職、往告豊州・北郷氏・本
田氏皆服、新納忠勝不可、于是實久催隅州兵衆於清水、
伐新納氏、兼濱雖非本意、一旦應催促從軍云々、

2310

〔勝久公御譜中〕

「正文在肝付伴兵衛兼屋」

猶々雖每事候、祇寢へ所用之事候、乗船一艘御馳走候者、可爲祝着候、將又鷹二懸所持候處、餌飼儀共事欠候、佐藤民部左衛門尉其方へ給候なる、如此方越候やうと御調法憑入候、

近日鶉戸へ社參之儀思立候、然者以此次益房丸事、忠朝へ可憑入之覺悟に候、其之事連々丁寧之条、爰許爲御存知候、恐々謹言、

貳月十三日

勝久(花押)

肝付越前守殿

2311

「勝久公御譜中」

「正文在入來院石見重頼」

今度就入國之企、一段入魂之奉公、最神妙之至候、仍爲此忠賞、滿家院之内郡山之城井卅町之事、所宛行也、早任此旨、可被知行之狀如件、

天文六年三月十四日

勝久(花押)

入來院殿

入來院殿

勝久

2312

「樺山善久入道玄佐譜中」

天文六年七月廿八日、犬追村之内川路山之門令賜御隅、安藝守之室、其後中村之内御園之門賜于安藝守也、日新公次女、同年、貴久主渡御于生別符、善久施面目者也、

2313

「庄内平治記」

一大隅國財部へ尾張守資忠より累代の領土なりといへ共頃年新納近江守忠勝に押領せらる、忠相の鬱懐胸に溢れ、薪に伏膽を嘗て、再び彼地ヲ攻靡ケ、我本懐を達せんと謀られける事日久し、其比蒲生肥前守武範といふものあり、下財部の内横市を領分して、忠相の手ニ屬せり、天文六年七月廿八日、忠相武範ヲ召て曰、汝か領横市に立給ふ天下の天神ハ、効驗第一の靈社と聞ク、我高祖資忠より譜代相傳の領地たり、財部院の事、頃年新納か爲ニ奪れ、其遺恨深重也、如何にもしてかの處を再び我領地となし、先祖の本懐を達せん事、是我一ツの願也、一とふの側に他人の鼾睡をたに容れといへり、况や譜代の本領をや、此丹困の旨を忠相又薦福寺の不磷和尚を招て竊ニ事をはかられけるに云々、天文七年正月三日鷄鳴を相圖ニして寄らるへしとそ定

ける、味方の相圖敵ニ洩て、鷄鳴ハ敵寄るべしと各用意せし處に、都之城の鷄ハ夜いまた半ならざるに悉鳴渡れり、例ニもあらぬ宵鳴に、軍兵時刻ハよきそとて、各打立押寄たり、財部の勢共ハ未た夜半の事なれハ打解居たる、其處ニ忠相の軍兵不意に押寄たりけれハ、聊刃ニ覓すして即時に落ニけり云々、

2314

「正文在樺山源三郎久清」

「牛王」

契狀

一 雖世間何様轉變候、一度申承候上者、於永々不可存疎略事、

一 如此申合候處、從敵方以城所領、雖有計策之、不可同心事、

一 相互難儀之時者、方中取出可有功成事、

一 以和讒雜説之時者、相互可申聞事、

一 雖各箭前安堵候、一人之前於入眼無者、弓箭相支何度

モ相談可申事、

右此条々於背候者、起請文

奉始梵天帝釋四大天王、殊者當國鎮守鷄戸六所權現 同
妻萬五社大明神 正八幡大菩薩、惣而者六十余州大小神

祇等之御爵可蒙罷者也、仍起請文如件、

樺山殿(信久)

御返事

豊後守忠朝(花押)

天文六年丁酉八月廿五日

大井別府(上包)へ

まいる

從飫肥

2315

「貴久公御譜中」

「正文在上原長次郎」

坪付

薩州日置庄之内

古垣名

上原屋敷

一段

穴の町

以上

天文六年丁酉九月吉日

貴久(花押)

上原長門守殿

2316

「勝久公御譜中」

「正文在本田作左衛門宣親」

一鹿兒島荒田名八十町

一澤牟田名十二町

一向嶋地頭之事并嶽・藤野・松浦・さいたう・赤水之事、

今度之仍忠節進候也、

天文 十二月廿四日
六年

本田紀伊守殿

勝久(花押)

2317 「國史 卷十 大弼公 大中公」

七年戊戌春正月三日、北郷忠相復取財部院、據島津支流系家譜作

四日、二十一日、島津忠朝遣右衛門大夫忠隅攻大崎城、

忠隅、忠朝之弟子、大崎係新納氏所領、梅北以下皆同、二十九日、陷之、二月二日、忠相

拔梅北城、二十日、忠朝拔安樂城、夏四月二日、又拔夏

井砦、秋七月二十三日、又下末吉・松山二城、據島津內膳家譜、大崎

城遺墟在大崎地頭館南一町許、係假宿村、安樂城遺墟在志布志地頭館西

一里許、係安樂村、末吉城遺墟在末吉地頭館西北八町許、係諏訪方村

松山郷地頭館在新橋村、其地即古城、忠相・忠朝既取數城、遂與

肝付兼演・樺山安藝守助太郎改稱安藝守、幸久等攻志布志城、新納

忠朝等講和、二十六日、島津支流系圖新納氏譜作三月二十六日、忠茂以城授忠

相・忠朝等、與其母俱奔佐土原、依伊東氏、忠茂母伊東而尹祐之女

忠朝與忠勝市木、使居之、市木在柳間、於是忠朝取救仁院・末吉

・松山、忠相取財部、當取梅北、忠朝請以三侯院高城易

之、忠相許之、據島津支流系圖新納氏・樺山氏譜、島津內膳家譜、肝付典勝系圖、冬十二月十

八日、梅岳君屯於益山諫方原、將攻加世田城、加世田兵

掩其不意敗之、梅岳君走、敵軍追之、梅岳君急下馬入茂

林中、春成兵庫助久正從之、匿梅岳君於諫方大明神祠中、

而久正伏於其側、敵兵六騎適至、且搜祠中、鳩出於祠、

覺起於池、敵兵見之曰、此中無人、乃去、梅岳君得免、

據加世田人春成刑部左衛門家藏舊記、加世田益山村有諫方ケ尾、諫方大明神祠在益山村、春成、日繼氏之支庶、島津支流系圖、日繼久影第三子曰春成刑部左衛門久智、久梅岳君復欲攻加世田城、求策於群下、於正久智之曾孫也

是春成久正以阿多人小鷹兵衛、往密覘形勢、城下多覺驚、

往往成群、小鷹兵衛夜巡陂澤、打起覺驚使諫、城中聞之

以為寇至、登陣為備、既而無寇、若是者連夜、丑以為常、

不復為備、梅岳君聞之、二十九日夜、與公向加世田城

將發、宴士卒、梅岳君謂士卒曰、此行也、吾欲死加世田

城、爾輩欲生還者、勿往、夜半襲加世田本城、分軍為三、

第一隊向船待口、第二隊向大手口、第三隊向搦手口、先

拔三丸、城代大山宮內少輔與飛松左京亮久友、交割而死、

據梅岳君舊譜、春成刑部左衛門家藏舊記、舊譜作梅日、據明時館長曆法天文七年十二月小盡、舊譜非、今從春成刑部左衛門家藏舊記、黃卷軍記

十二月二十八日、梅岳君攻加世田、飛松久友者伊集院氏之支庶

城、二十九日、陷之、又與此異、

也、據島津支流系圖、伊集院長門守國第十五男曰相模守久義、為飛松氏、久友、久義六世孫也、久友傳云、梅岳君將攻加世田前三日、久友如加世田、與大山宮内少輔交割而死、與此不同、又梅岳君壽譜、以久友為實久之臣諷矣

2318 「北郷忠相譜中」

隅州財部院者、太守公所讓與高祖資忠之地、而世世領之、頃年新納忠勝押領之、同七年戊戌正月三日、薦福寺住僧不磷和尚・財部壽福坊快成運計策、容易陷彼城者也、

2319 『玄佐日記』

一其後豊州如御企之各新納殿江被取懸、其刻助太郎も催【忠朝】【天文七年正月也】

人衆出張す、於都之城忠朝被號安藝守、其弓箭之事者、一兩年を経て、新納殿父子共没落、末吉之内かいてと云門安藝守知行、ケ様之時節迄貴久様江御奉公之人珍敷、入来院御内縁彼は無餘儀候つる、其故にや郡山を一度被下、去程に上之山城被取拵之刻、福昌寺長老怒岳と申せしへ、河田へ御度之處ニ、龍慶後へ喜冠和尚と申へ、鹿兒嶋勝久御亂世より生別府へ逗留在しか、此折河田へ被參、（相カ）日州様・貴久様へも直指出、安藝守心底之旨をも被申入、されは鹿兒嶋ぬめり川【蒲川】一町を給り、六右衛門尉と云物を指置、舟をも進入す、

2320 『玄佐日記』

一實久志布志より清水江御越、大隅一所之人衆をも被召寄、御頼之由被仰合、助太郎も參上す、別而可令入魂之旨承、【忠良公】相州様眼前之事、乍御存知、先新納殿へ爲弓箭之にや、得其心之處ニ、剩生別府へ御越、一入御懇意之刻、【天文七年十二月廿八日ノコト也】相州加世田を召取之由聞得けれ共、實久此事被仰出加治木へ御越なさる、

2321 『壹岐賈州年代記』

一同七年戊戌、新納殿没落、其子四郎殿兄弟御當方江山中、

一此年十二月廿九日、加世田城ヲ攻玉フ、大寺越前守・鎌田加賀守・右馬頭忠將軍功アリ、

2322 「新納四郎忠茂譜中」

先是天文四年乙未十月十日、前 太守勝久麿島没落之後、島津八郎左衛門尉實久流涎於守護職、運籌策於島津豊後守于時居北郷氏于時居都城、肝付氏于時居高山、三家、而後來志布志、告催忠茂父子、忠茂父子敢不承諾、於茲乎欲亡當家、使三家率多勢從三方來攻居城者甚急也、不隨實久之催促者

2323

「新納忠元譜中」

其故何也、忠茂父子專有欲仰島津三郎左衛門尉貴久於守
 護之臆念也、是以今也欲請救兵於 貴久主、而無通价使之
 路、雖然使家臣刀迫囚獄助・柴主殿助忍赴薩陽、經日州
 山中、主殿助先到隅州生別符、告件旨於樺山氏、則以指
 南送南方無恙到着、上達 貴久主、主報曰、聞忠茂之危
 急、忽欲發援兵、而薩摩州之兵革未止、無如之何、是以不
 能、忠茂父子運籌策爲和諧、宜逃今日之急難、不忘後日
 之得利、主殿助詳以反命矣、囚獄助未知死何之地、惜矣
 乎、隨 貴久主之旨、天文七年戊戌三月廿六日、與豐後
 守既爲和睦、憑伊東氏與母堂俱乘舟船、遠經海路到于山
 東佐土原、老父忠勝賴豐後守、攜二男忠常到于飢肥矣、
 丁此之時當家之重器及文書悉以燒失、實是因仰 貴久主
 之深心也、
 天文七年戊戌十一月十三日、落髮、同十二月十日、參候
 薩州南方、而居鷹島小野、其後賜隅州日當山、移居于此
 矣、

天文七年戊戌秋七月、宗子忠勝之喪城邑也、同族世臣多
 離散者、安萬乃隨父祐久適田布施、臣事 梅岳君、於是

2324

「殉國名載中」

安萬年十三矣、詳見文下、

天文七年戊戌

五月三日、山崎民部左衛門成通百次に於て討死とあり、

七月廿三日、城ヶ崎右衛門儀實北郷忠相臣にて末吉の城攻に戰死す、下同し、或儀英に作、來住源七郎秀光・來住源六綱安、

十二月十九日、井尻四郎左衛門尉祐秀或伊東に作ル、梅岳君嶋津實久と加

後掃部左衛門尉與三郎といふも同人歟、

十二月二十九日、猿渡與市左衛門信資梅岳君大中公と加世田城を攻給ふに

從ひ、黒鳥口に戰死す、年五十七、他へ下に見ゆ、時き實久方にも大

山宮内少輔は富松左京進久友と刺違へ、其外阿多飛騨守・大山内藏助

後守家保・大寺彦五郎等も城守して死之、猿渡與市兵衛信兼信資

の弟、同勘解由信資の弟なり、兄弟三人戰死、市來備前守宗政・上原五郎

四郎久次年十吉田吉左衛門・本田九郎親宗・稅所助

十郎・富松左京進久友・蒲池新三郎・猿渡彦次・同九

郎・同民部左衛門・三原藤次・丹生民部・二之宮四郎

九郎・蒲池帶刀左衛門・同左衛門四郎・同五郎左衛門

・橋口但馬・平田民部左衛門尉・知覽四郎左衛門尉、

全日、與倉太郎兵衛忠守間瀬川にて戰、下同し、與倉彌太郎知久・

上床八郎三郎、

梅北宮内左衛門天文中加世田城にて、毛利助左衛門尉加世

て戦死とあり、邊牟木助四郎國信・毛利助七郎・毛利彌田に

太郎・前田又六郎範時・山田與市久宗、

北郷刑部少輔忠榮北郷譜に、七月三日加世田藤野原に戦死と記し、年紀なし、此に置て竣考

2325 「新納家八代忠勝譜中」

初忠家居城志布志、其外領地安樂・大崎・松山・末吉・

恒吉・高隈・垂水・廻・市成・牛根、本地ハ不及記、新

納繁榮在此時、小笠原刑部少輔光清鶴戸明神ニ參詣之由

聞及、志布志ニ申請二ヶ月留申、弓馬之道不殘相傳候而、

犬追物令張行云々、

2326 「全九代忠茂譜中」

此時志布志落居、其故ハ薩州實久守護を望、叛逆ありて

豊州于時在北郷、肝付于時在北郷、此三家ニ内通あり、モト飯肥

ヨリ新納ハ親類たる故雖被爲透引、更不許容、依其三家

一味シテ當家ヲ欲亡、當家多勢ナリトイヘトモ、敵従三

方責來ル故及難儀、此趣南方江欲申上、關多而難通、此

時家來刀迫囚獄介・柴主殿助字宿菜女 正トモヲ山ク、リニ遣、

刀迫ハ被殺ケルカ、終に其行衛を不知、柴ハ漸深山幽谷

凌、日州ノミ之山中おいの別府ニ着、樵山へ申入候、樺山使

者ヲ相副南方へ被送届候、則志布志之様ヲ懇ニ申上候へ

者、御返事ニ御加勢之御志雖不少、薩摩國中之兵乱未相

止、難及御力之間、如何様ニも相計致和談、後日之忠功

ヲ可被掛心云々、依其異本ニ肝付・北郷ニ和談ヲ求、天文七

年戊戌三月廿六日ニ豊州ト成和睦、忠茂ハ伊東ヲ頼、母

儀ト山東ノ二字 異本ニ加フ、共ニ渡海、父忠勝ハ二男忠常ヲ伴ナヒ、

飯肥江退出候、新納之家至于此時滅亡、代々之寶物并文

書等粗焼失す、早竟南方江無二心抽忠功之故、家門繁榮

一時ニ亡者也、翌年十一月十三日、落髮、同十二月十日、

南方へ參、薩州小野へ住、其後日當山異本麥刈トモを賜り移

ル、於此地死去、

2327 「日新公御譜中」

天文七年戊戌十二月晦日、異記曰廿八日、末知孰是、可有再考、戌時招軍衆

曰、只今向加世田欲攻之、若好生不願名者速可退去、好

名不願生者速可發向、再三言之、備酒肴、忽有蜘蛛之瑞、

父子三人共感謝、斟三爵、而後選銳士爲前鋒以進行、各

速欲到于其地、孔闢而過阿多松坂、則夜半鐘聲仄觸耳矣、

于時會狐火之照闇、先前路如白晝也、各衛枚密進于城壁而後發闕、此地自古昔有五壘、各柵欄堅固也、雖然二男右馬頭忠將爲將帥、從擲手所攻責甚急也、是以翌曉寅時陷本城、此時富松左京亮・大山宮内少輔二人共實久、短兵相接而死于^{旗下}一處、阿多飛驒守者走入城中、與大山内藏助并戰死焉、其餘敵兵亦走入新城、決死催醉之際、日新之軍競進奮氣大呼、其聲動山嶽轟林川、天未白、新城亦陷矣、此時敵兵三十餘輩疊枕而死、其中有號相德者、引其妻妾送于途中、立歸城裏、而戰死也、自古忘身重名勇士之所致也、豈不快乎、谷山藤左衛門尉・吉富吉左衛門尉實久兵之亦被屠殺、於斯時也、敵兵相支暫息、迄于午時、大寺越前守・鎌田加賀守率川邊・山田之衆、欲助新城之勢、貴久即騎馬突出欲追討之時、敵兵乃斷其後、危急莫甚焉、雖然忠將忽鞭駿馬、向多勢盡筋力、以挑戰數刻矣、敵勢有中阻、雖防禦而不利忽敗、雖然市來備前守・猿渡與一左衛門尉・稅所助十郎・本田九郎・蒲池帶左衛門尉・同姓左衛門四郎等共八人遂戰死者也、加世田者日新之祖父河内守久逸戰死之地、今日之利豈能有比此者哉、

薩州河邊郡加世田城者、島津八郎左衛門尉實久所領也、實久背日新齋命、天文七年戊戌十二月晦日、日新率兵攻加世田城、時忠將爲將帥、非施指揮汗馬之功耳、自馳馬向大敵、盡筋力以挑戰、敵兵失利而敗走、城亦陷、

一去程ニ忠兼朝臣悔還御讓、鹿兒嶋ニ入玉フト云ヘトモ、天性無道ノ生質ナレハ、不賞賢貞之臣、此間文字 舉讒倭ノ徒、遊戲博奕ヲ事トシ、又執事末弘伯耆守忠重其外碓山二郎兵衛尉・竹内備中守・小倉隱岐守等之輩、掌國政專無道、見ヨク國家之衰亡端的也トシ、心有入ハ申シケル、然ニ薩摩守實久・川上大和守昌久ヲ始として、累代之家臣十六人雖奉成諫言、忠言逆耳、思國故ニ然ル而已、或時忠良向實久曰、吾今所領分ノ伊集院・鷹島・谷山・吉田進之、實久ヲ可仰守護職、加世田・川邊於兩所者我ニ賜テ、向後如水與魚シテ、於無風波ハ誰人カ三州ニオイテ此家ヲ侮ラン、實久聞之不諾、剩ヘ祇答院ヲ相語ラヒ成謀略ノ由其聞ヘ有リ、受太刀ニ成テハ不可然トテ、天文七年十二月廿八日、日新父子三人酉ノ刻ニ已ニ打立ントシ玉フニ、酒肴ヲ

ソナヘ舉盃トシ玉フ時、面前ニ蜘蛛糸ヲ牽テ落下ル、是希ノ吉瑞也ト宣ヒテ、軍兵ヲ勇メテ打立玉フ、去程ニ加世田ハ追手ニ五ツノ楯有リ、要害構ヘ用心稠シカリシカハ、忠將ヲ爲搦手ノ大將、不思寄内ニ、搦手ニ兵者ヲ差廻シ、廿九日ノ寅ノ刻ニ忍々押寄せテ吐吐作撃、息ヲモ不休攻入レハ、已ニ本城ヲ攻落ス、爰ニ富松左京進ト大山宮内少輔ト引組テ差違ヘテソ死ス、城ノ内ノ人ノ阿多飛彈守・大山内藏助爰ヲ専度ト戦ヒシガ、同枕ニ被討ケリ、其外數輩被討、所殘ルノ兵トモ新城ニ楯籠リ、最後ノ酒宴ヲソ始メケル、不移時刻推寄セ撃ヲ作ニケル、暫戦トイエトモ、終ニ被攻破、吾ハト思ヒシ侍トモ、三十餘人枕ヲ並テ討レニケリ、平田民部左衛門尉・市來備後守下知ヲナシ防キ返シ戦エトモ、終ニハ皆々討レニケリ、爰ニ相徳新衛門ト云「本マ、レ」者妻子ヲ中途ニ送リヤリ、其身ハ城ヘ立戻リ、遂ニ戦死ヲ遂ニケリ、武士ノ惜名志ノ程コソ哀也、慈ニモ谷山藤左衛門尉・吉富吉左衛門以下數輩討死ス、雖然加世田ヲ輒ク討取テ作勝吐氣、各御喜ヲ被申、斯ル處ニ大寺越前守・鎌田加賀守卒河邊・山田ノ人數、其翌日ニ寄來ル、貴久即打出、河邊・山田ノ者共未兩家ヲ

2330

疑テ催促迄ニ來ルヲ、差詰追詰メ討玉ヘハ、足ヲ不留落失セケル、餘リ遠追シ玉ヘハ、敵トモ遮跡、既ニ危クミヘツルニ、忠將舉鞭鎧ヲ合セテ馳セツキ、敵ヲ中ニ取籠メテ前後ヨリ攻ケレハ、敵ハ戦ヒ飽ンテ其場ニ多ク被打ケリ、市來備前守・猿渡與一左衛門尉・本田九郎・税所助十郎・蒲池帶刀左衛門・同左衛門四郎・知寛四郎左衛門尉、其外以下ノ輩多ク打ラル、入道日新彼加世田ハ吾ガ祖父河内守留屍地也、今雪其血、散舊齋云々、「下文未ニアリ」

『加世田大中庵由緒書』

一諏訪山 益山村 大中庵

右、前代ハ道仲軒と申庵地ニ而候、四代目之任持照岳有鑑庵主、日新公天文七年戊戌十二月廿九日、加世田江御出陣有之候節、爲陣僧御供仕、右之道仲軒江被遊陣取、被掛御腰候處ニ、加世田之軍勢相働候付、諏方大明神江宥鑑御案内仕、社頭江御籠被成候、其間ニ加世田之勢相過候付、阿多之様ニ御供仕候、同十二月廿九日、加世田御手ニ入候、宥鑑事右之爲忠節、道仲軒天文八年ニ日新公被遊御再興、山号諏訪山与御名付

2331

云々、元龜二年、伯園公於當所被遊御遠行候節、御位牌被遊御安置候ニ付、大中庵と被相改云々、

〔庄内平治記〕

〔天文七年也〕

一 此年二月二日、忠相梅北の城ヲ攻て、掌の内に握らる、同月廿日、島津豊後守安樂の城ヲ陥ル、同四月二日、夏井もまた没落す、七月廿三日、松山・末吉の城を攻て、忠相の家臣城ヶ崎右衛門儀實・來住源七郎秀光・同源六綱安等末吉ニて打死す、同廿七日、志布志を攻む、總て陥ル處の五ヶ處、皆忠相の領地となる、同十一月十九日、豊州志布志に移らる、新納近江守忠勝は櫛間・市來五十町を領して櫛間ニ移られける、

2332

〔在阿多高良八幡宮由緒書〕

一 鰐口壹ツ奉施入、加世田別府今泉天神御寶殿悉地成就、于時康正三稔丁丑五月九日、願主大衛伊膳右、高良八幡之儀者、日新公加世田江御發向之時、長々落城不仕、天文七年戌十二月廿九日、御參詣被遊、御誓願有之、直ニ阿多花瀬村之内、立本原与申所ニ、衆揃有之、万之瀬川之川上岩瀬戸与申所御渡被遊、加

2333

世田尼ヶ城江後々御駈、輒落城仕、右鰐口御持參之由、御宮初者中嶽山高良尾ニ御鎮座ニ而候處ニ、加世田落城以後、日新公御意を以、本宮地ヲ引下り、只今之宮地ニ被引移、御宮御造立候間、毎度被遊御高覽、御棧敷之跡于今御座候云々、

〔新納忠元勲功記〕

一天文七戌年、忠元拾三歳罷成時分、嫡家忠勝居城志布志を初拾余城領知仕居候處、飢肥領主豊州忠朝・都城領主北郷忠相等申合、双方ヲ攻伐仕、防禦之術茂盡果候ニ付、同七月忠勝居城立退候節、父加賀守祐久嫡子忠元并弟縫殿助忠清等召列、右通之御由緒御座候故、伊作江參越仕、祐久叔父漁隱を相頼、日新様 大中様御方江罷出、其節今一人之叔父山城守忠光漁隱弟茂同断相頼、是者田布施江罷出、一瓢様御方江被召仕、後ニ日新様御家老御役迄相勤、是久子孫嫡庶共、何れも右次第御間柄之譯ニも候哉、餘程皆御心安爲被召仕由御座候、

〔本文書ハ底本ニ欠ク、鹿兒島県立図書館本ニヨリ補フ〕

「阿多花瀬村」

一 稻荷大明神

右、永正九年壬申十二月五日、日新公御建立被遊候、

右、稻荷大明神之儀者、天文七年戊十二月廿九日、夜中ニ加世田江被召駈候節、大手口之通路ニ狐火夥敷相見得、加世田方大手口之用心稠敷、搦手ニ油断有之候故、後ニ被遊御駈、輒爲被遊御攻落由ニ御座候、右狐火稻荷擁護之神力無疑御事ニ御座候、御正躰之後ニ大願主嶋津藤原朝臣忠幸・忠良と被遊置、御棟札ニも御銘書有之、神領被召付云、

『阿多高良八幡由緒』

一 高良八幡

右者、日新公加世田御發向之節、長々落城不致、天文七年戊十二月廿九日、御參詣、御誓願有之、直ニ阿多花瀬村之内、立本原と申所へ衆揃有之、万之瀬川之川上岩瀬戸と申所御渡被遊、加世田尼ヶ城江後ニ御駈、輒落城仕候、右御宮、初ハ中嶽山高良尾ニ御鎮座ニ而候處、加世田落城以後、日新公御意を以、本宮地ニ引

下り、只今之宮地ニ被引移、御宮御造立ニ而候、

『阿多』

一 稻荷大明神 花瀬村之内

永正九年壬申十二月五日 日新公御建立

天文七年戊十二月廿九日之夜、加世田江御取駈候節、大手口之通路ニ狐火夥敷相見得、加世田方大手口之用心稠敷、搦手ニ油断有之候故、後ニ被遊御駈、輒御攻落之由、右狐火稻荷之加護無疑事候故与、正躰之後ニ大願主嶋津藤原朝臣忠幸・忠良と被遊置、御棟札も有之候也、

『貴久公記』

一天文七年雪月廿八日、入道殿御父子三人、酉刻計打立之、又はスクリ給テ酌之參時分、蜘蛛落サカレリ、三人御同前、是希代之善道也、去程加世田ハ追手ニ五ツの楅ヲ取、用心稠シカリシカハ、貴久御舍弟忠將ヲ搦手の大將トシ、不懸思内手ニ圍シ、廿八寅刻許本城ヲ切落ス、爰ニテ富松左京、大山宮内少輔と引組て、指違て死ス、阿多飛驒守從麓城ニ籠ル、大山内藏助何モ

2338

一所ニテ一足モ不去打死ス、殘所之兵共新城ニ立籠、
 最後之酒宴シ待懸タル處ニ押寄セ作時ヲ、雖數刻戰ト、
 不叶シテ未明ニ攻破ル、籠所之兵卅餘人枕ヲ并テ被討
 早、慈ニモ谷山藤左衛門尉・吉富吉左衛門尉討死ス、
 爰ニ相徳ト云者有、妻子ヲ中途迄送テ、其身ハ又立歸
 て、於新城討死早、名ヲ惜志哀ナリ、カクテ居タル處
 ニ、大寺越前守・鎌田加賀守卒川邊・山田之人衆、午
 尅計垂之涯迄寄來、貴久様即時ニカケ出追拂給ニ、敵
 軍跡ヲ遮ルヲ不知、既ニ危カリツルニ、忠將鞭ニ鐙ヲ合
 テ馳續キ、敵ヲ中ニ取籠、從前後攻ケル間、市來備後
 守・大寺彦五郎ヲ爲始ト數多討取、貴久様御手之衆ニ
 モ、市來備前守・猿渡与一左衛門尉・税所助十郎・本
 田九郎・蒲地帶刀左衛門尉・同名左衛門尉四郎其場ニ
 討レヌ、彼加世田ハ祖父河州屍ヲ留シ地也、今其血ヲ
 濯テ散舊齋云々、「以下末ニ見ヘタリ」

如仰連々可申通候之處、海路依不輒候、乍存無音罷過候、
 御懇之御芳問祝着存候、仍彼使僧相州江越山候條々承候、
 畏入候、巨細之趣此御使僧へ令申候間、閣筆候、恐々謹
 言、

2339

「天文七八年比款」
極月七日

（書入）
忠譽（花押）

新納殿
御返報

（上書）
攝津介
忠譽

新納殿

御返報

「國史」卷十
六
梅岳君 大中公

八年己亥春正月元日寅刻、進攻本丸、城代阿多某開門納
 之、遂拔二丸、據梅岳君舊譜、春成刑部左衛門家藏舊記、和語謂子
 城爲本丸、副城爲二丸三丸、謂留守城爲城代、言

又圍新城、拔二丸及三丸、殺城代市來・中村以下
代君守
 城者也、

三十六人、本丸城代別府某遣極樂寺僧、告梅岳君曰、今

日當降、願釋一死、梅岳君不許曰、臨難苟免非勇士也、別

府某不得已、出城臨陣、梅岳君以眉尖刀斬之、梟其首於

大手門外樹上、同上、新城遺墟在加世田郷地頭館西北、春成刑部左
 衛門家藏舊記細注、相傳當時極樂寺在加世田城中、

梅岳君之冥軍士也、川上十郎行酒、梅岳君舉觴、蜘蛛忽

集其上、問左右曰、是何祥也、春成久正曰、吉也、此行

必勝矣、果克之、同上、春成刑部左衛門家藏舊記、載久正語曰、
 吉備公入唐以來、以蜘蛛爲吉兆、其事見野馬齋

詩序、今錄於左曰、野馬齋詩者梁寶誌和尚所作也、嘗有一女詣和尚自言
 其本國終始事一女去則一女來、來者合千八百人、其言皆同、和尚異之、

其言爲千八百人、於子爲侯、蓋倭國之神化爲女子、來告以倭國讎也、因採
 其言爲二十四句、題曰野馬齋詩、野馬謂陽焰、蓋謂國、言倭國人道輕

薄、雖有如亡、猶陽焰起春臺也、其詩曰東海姬氏國、百世代天工、右可
 爲輔翼、衝主建元功、初興治法事、終成祭祖宗、本校周天壤、君臣定始

城、忠克女、實久之妻也、實久始娶薩摩守成久生一男二女、實久之妻、後娶忠克女。實久是以授之、公攻市來本城、城且陷、忠克畏懼、秋八月二十八日、使福島筑後告、公曰、某事實久、不忍相負、請使兒虎德丸以城降、許之、於是、使信濃守忠興携虎德丸、如市來見於公、而忠克去串木野、從實久、據大中公舊譜、島津支流系圖、樺山玄佐自記、黃套軍記、流系圖、入山玄佐自記、黃套軍記、忠興、忠克之從祖叔父也、來院重朝取百次城、先是、大翁公賜重朝百次城、事見上五年、城將不服、至是取之、據入來院主馬系圖、公圍市來本城、新納忠苗善守、六十餘日不能拔、二十九日、忠苗與島津越前守俱降、群臣皆欲甘心於忠苗、梅岳君曰、臣爲其主、職耳、何可誅耶、乃赦之、據大中公舊譜、黃套軍記、樺山幸久來、賀市來城之捷、公賜幸久松浦・二侯、賜島津忠俊赤水、賞軍功也、據島津支流系圖、樺山氏譜、樺山玄佐自記、自記原文云、六月二十七日之戰、幸久被創歸養、未幾、聞市來城下來賀、郡村高辻帳、向島有、九月十日、入來院重朝取限之城及宮崎、據入來院二侯村、主馬系圖、限之城東手村、是歲、公命重修福昌寺、以宇宿爲寺產如故、有地稱宮崎、是歲、公命重修福昌寺、再興記云、天文龍集丁酉三月、福昌寺廢壞、至於己亥之春、大中公以宇宿、爲福昌寺領如故、命貧道、新建之、東条出羽守塙福昌寺以下寺社見、上六年、天文丁酉即六年、己亥即是歲也、

「正文吉松士和田佐左衛門藏」日新公御譜中文正文吉松衆和田左近卜

アリ

吉書

- 一可修理神社佛閣、專祭奠之夏、
- 一神者依人之敬增威、人者依神之德添運之事、
- 一可專勸農調納國々年貢之夏、

天福皆來 地福圓滿 天地和合樂 武勇長久樂、噫々如律令、

嶋津相模藤原日新(花押)

天文八年己正月十一日

掟

一諸士衆中忠孝之道第一に相守、五人與中むつましく可交る事、

一領地多き衆は、七書を習ひ、人數かけ引昇貝太鼓之合圖、作法常々調練あるへき事、

一若き衆中へ、武藝角力水練山坂步行、平日手足をならすへき事、

但所領持并無息衆中、其身相當之武道武藝心懸無之輩者、所帯没収之上重科たるへし、

一田地壹反ニ付、武用立候家之子壹人ツ、家内ニ可有

養育事、

一陣中三十日、自飯粒引當無之、并軍役出物等於遲滯者、所帶没収すへき事、

一諸士衆中、番符普請、其外役務之間ニ者不致唯居、主人家之子女迄も、早朝より農業ニ出へき事、

但地頭領主不請免許而、其所をはづし出候ハ、死罪たるべし、

一百姓并又内之者ニ而も、獨身并困窮之者あらハ、横目衆に非候共、早速直ニ可申出事、

一諸士衆中之子共、無免許而出家成停止たるへき事、

一地頭領主并奉行頭人下々之訴訟、則不致披露、又者邪成捌候ハ、不及取次、我等父子之目通ニ直ニ可申出事、

一我等父子邪行聊尔之儀見聞候者、誰人ニ而も不差置□いたすべく事、

右條々、若違犯の輩あらハ、所持之衆者、必所領没収、無息衆中者、可加嚴科者也、

天文八年己亥正月 日 忠良御判

貴久御判

「右原本何れに在る歟、博古ニ糺すへし、いま其出所を知らざる也、兩公の御謄ニも見へず、右の御文言に奉行頭人五人組、或は違犯の

輩なとかゝれしハ、近世の詞に似たり、或人云、徳田翁の偽作と、左もあらん歟、糺すへし、此に載せて考ニ供す」

2342 「新納忠勝譜中」

「案文在新納三河忠徳入道楚弓」

誠當春之御慶萬幸々、仍如御芳書慮外之就弓箭、如此罷成候、被聞召付預御尋候、一段畏入候、嶋津豊後守新納之二字可被残之由被申出候条、櫛間院傍致住宅候、就中表革三種七領形送預候、此方大切之物ニ候、可致秘藏候、自是茂唐紙三十程令進覽候、誠祝儀計候、恐々謹言、

「朱力半」

「天文八年二月廿八日」

忠勝

相良殿

御返報

「上カ半」
草案

2343 天文八年己亥

三月十七日、本村源四郎時眞、谷山紫原にて戦死、

六月、蒲生宮内大輔清綱、市來平城にて戦死とあり、此月大中

考、

八月廿八日、池上將監、市來の兵來て伊作城に寇する時き柴、垂口に戦て死之、子孫加治木にあり、

南郷兵部少輔置久伊作にて戦死とあり、此日の事故。

此年、伊地知新四郎左衛門二男なり、吉田にて戦死とあり、月日詳かならず。

〔参考〕

天文八年己三月十三日、谷山紫原ニ於て、日新公實久

方と御合戦、實久方敗北、同廿六日、神前城も終ニ和談

ニて御味方ニ大中公、御方江、参る輩左ニ記ス、

平田式部少輔『初右京亮後備中守少時風実久トアリ』神前ノ地頭宗秀岩剣戦死、大野駿河守

伊集院山城守出水衆

勝部兵庫允

高城右衛門尉

亦外ニ御味方ニ参る輩ニハ、

頼娃小四郎

同廿八日、御味方ニ参る衆ニハ、

鎌田加賀守川辺高城の地頭

同廿九日、本城平山も降参ニて、四月朔日、日新公平

山城江御打入、康久泰平の吐氣を擧ぐ、

新納伊勢守康久入道一珪齋

同比、日新公市來地頭多田紀伊介頼益を討せらるゝ時、

市來江馳續大將ニハ、

島津越前守

新納常陸守市來地頭を賜けると也。

天文八年己閏六月十七日、大中公市來平城を攻玉ふ時、

發向する人數ニハ、

『〇』島津又四郎忠將

樺山安藝守範久

島津攝津守

入來院石見守

佐多入道半閑齋

頼娃小四郎

種子嶋左近太夫『時亮』

根占右近太夫

△肝付山城『道内守』入道省釣『兼續』加治木入道威安『越前守兼演』

伊地知佐渡守

蒲生若狭守

同廿七日、敵大日寺口ニ討出、御方高名の人數、

樺山安藝守『善久入道玄佐』喜入攝津守

蒲生宮内少輔

同年八月四日、本城市來の野頸ニ堅陣を取、日夜合戦、

『〇』島津又四郎忠將大將伊集院大和守武將忠崩入道孤舟案内者

三原下總守長井兵部左衛門

同廿八日、串木野城主川上信濃守榮久人質ヲ出し、降を

請ける故、即ち忠歳串木野ニ被差遣、且串木野庄を賜ふ、

新納伊勢守忠歳上野守トナリ

同廿九日、新納常陸守忠躬城を降る、因て翌九月朔日、

本城ニ入り大平の吐氣を擧ぐ、

伊集院大和守忠朗〔入道孤舟〕

島津越前守并常陸守忠躬以上百餘人を舟津迄送出候様、

御沙汰有之、相送人數ニハ、

新納尾張守忠歳

本田下野守親貞〔入道三省〕

2345
『裝輪覺書』

一天文八年癸巳三月十三日、於谷山紫原、相・薩兩家之

者共、互に相戦と云へトモ、實久勢敗北せり、其翌日、

平田〔後備中守宗秀〕式部少輔谷山苦辛クラノ城ニ實久朝臣ヲ奉請シ、是ハ

川邊ノ地頭職安房守平宗康カ子也、實久普代ノ爲家臣、

相模入道蜜ニ可相語ノ牒狀再三ニ及ヒ、日新ノ妾ノ娘

ニ式部少輔ヲ嫁して、可相成腕モカト之旨、類ニ雖被

仰遣不承引、然ニ此事薩州ニ相告ク、彼實ハ雖有不事

二君之賢旨、相州以相謀らハ、遂ニハなとか不相順、

先是を可誅疑クハ謀ルカ、とて竊ニ被計ノ由風聞す、式部少輔

其難を遁シ〔日新公〕ニハ相州に參ランニハシカジトテ、苦辛城

ニ奉請入レ、同廿六日、神前ノ城和談にて地頭大野駿

河守、出水衆に伊集院山城守・松崎丹波守・勝部兵庫

允・市來縫殿助・高城右衛門尉・長井大炊介其外待數

多 貴久ニ被參ケル、其折節顯娃小四郎・喜入三郎〔忠房〕四

郎御慈ミカタに被參ける、同廿八日に川邊高城之地頭職鎌田

加賀守〔政重〕ノ屬御手ニ之由被申入、高城衆與力ノ侍少々相

具し、於川邊古殿入御見參、既にして新納伊勢守久次

承て高城莊を知行す、鎌田治部左衛門尉妻女等相具し

て、田布施へ被參上セ、〔治部左衛門妻女等相具して田布施へ參上有、加賀守より實ニやる也、〕

明レハ廿九日、本城平山茂降參す、同四月朔日、入

道日新本城ニ打入ル、新納伊勢守泰平之吐氣をそ被作

けり、

2346
『貴久公記』

一天文八年己亥三月十三日、谷山紫原之軍ニ敵餘多討取、

然者翌日平田式部少輔苦辛クラ之城へ貴久様ヲ被申請、次

日本城へ番衆被籠、從其十余日有テ、廿四日神前之城

議ニ成テ被渡、城主駿河守、和泉衆伊集院山城守・松

崎丹波守其外餘多有、同廿八日、川邊フルトノ迄日新

御越候間、高城之人躰鎌田加賀守祗候シ、少々屬御

手ニ由申、致參上、於中途ニ懸御目ニ、サテ其日高城

新納伊勢守被受取、鎌田治部左衛門尉妻子召列、如田

布施參ル、一日有て本城平山御手裏ニ入、是又伊勢守

被受取、四月朔日、本城へ日新様御光儀候間、新納伊

勢守太平吐氣被作申、「下文末ニ載ス」

『玄佐自記』

一此間に伊集院大和守鹿兒嶋上之山を取誘、自身罷移、

千秋萬歳の吉兆なり、

『玄佐自記』

一貴久様上之山江被成御發足、【天文八年三月十三日也】於紫原谷山衆出合軍有り、

貴久様月毛之御馬ニ而被成御下知、實久衆本城之人躰

祢寢播磨を初として數十人打取、【宇宿】うすく・波之平なと

云所迄追下りく被打破、其脇倉良平田備中守・伊集

院大和守迄申子細有、予薩州年來之者ニ而、親之時も

加世田之觸なり、頃阿多源太左衛門ニ被取替事非本意、

願は貴久様江御奉公望之由申入、大和守領掌して、以

武略民以下を手ニ付、倉良を夜中ニ仕取、貴久様御出

張なれば、平田備中守舎弟六彌太同懸御目、されは本

城ハ打捨、神前へ被指寄、其折喜入三郎四郎殿【忠房後忠俊也】是も内

々伊作へ被申通、以筋目此折隣所をも不見合、谷山坂

之上迄放火仕被【馳參、其時近所之人衆も不殘御奉

公と也、【天文八年三月廿四日ノコト也】されは神前之城駿河守殿二男を召取、妻子等

迄無何事被受取、從加世田日新様鹿籠・山田・河之邊

御知行、神前江、貴久様御座候所江、始肝付・祢寢・伊

地知參上、【天文八年三月カ】其折安藝守從生別府本田を調儀仕、本田爲

使本田又八被進、安藝守を伊作・田布施へ參上、長吉江

右馬頭殿江も參、典厩者於加世田御合戦ニ御手ニ切痕

深、其ころ迄御手不自由、それも伊集院へ貴久様御歸

陣なれへ、彼方へ參上、逗留中ニ本田紀州・同刑部太

輔出頭、安藝守申調、剩向之嶋を本田可致返上之旨を

兼く少度申置、此度類ニ申調へ、本田御暇被申折に、

彼嶋の上山・横山・萩原三人を鹿兒嶋へ召寄、大和守

殿江引付、それより嶋御知行なりし、

「谷山伊佐智佐權現由緒」

一弓 二張 一箠 二腰 一大般若經 一部

一般若本尊 壹幅但惣テ損シ物

右、品々從 貴久公御寄進之由候、申傳候、天文八年

相州・薩州兩家於谷山紫原及御一戰、貴久公御出馬、

數日之御取合、御勝利不相見得、伊佐智佐宮江御誓祈

ニ而、追付御安堵被遊、右品御寄附之由、外ニ田地茂

十六町御寄進有之候得共被召上候由、

「貴久公御譜中」

一天文八年己亥三月十三日、於谷山紫原遂一戰、討殺數多逆儻、而當郡入貴久之手裏、翌日、平田式部少輔請待貴久於苦辛城、故往其地、而明日入守卒於本城、纔經十日、神前城請和、同月廿四日降參也、城主谷山駿河守及伊集院山城守・松崎丹後守三士共實久之旗、厥外士卒下出水之入也。咸屬旗下矣、異記曰、三月廿九日、日州大輪之地為太守有也、同四月廿一日、安樂沒落、同七月廿五日、島津豊後守忠朝之土平田新左衛門尉受取松山城、同廿六日、新納近江守忠勝志布志下城、豊後守忠朝領其地、同廿九日、受取末吉城云云、

「野村喜兵衛藏」

當弓箭從最前（ヨメズ）段、被抽忠節候事神妙、大慶之至、向後茂猶以（ヨメズ）存候事実也、（ヨメズ）不□ハ、狂心之縱候、然雖有讒（ヨメズ）々々々々ニ可遂相談候、爰以貴久同前候、若此儀候、（ヨメズ）違乱者々天道所也、仍狀如件、

三月廿二日

日新花押

富松左京亮殿

野村兵部尉殿

「丸尾覺左衛門藏」

いつやらん詩歌送り給ふ、いたつらニハとおもひ侍るま

ハ、

松竹をさなから朋とすむ水の

心のそこを何とかハくむ 〔短尺〕 日新

有かたや白毛かしらを盡しても

つくさむ物か神のめくミハ 〔短尺〕 日新

見るか内もなくさめかねつ名にたかき

こよひの月の都ならては 貴久

「右之御歌、此所ニノスベカラス」

「日新公御譜中」

天文八年己亥三月廿八日、日新催於領土之騎歩、向於川邊古殿之地、則高城主鎌田加賀守竟降服焉、其士卒亦共謁于途中、故使新納伊勢守領高城、而後鎌田治部左衛門尉之妻子爲質遣田布施矣、翌日本城平山亦入手裏、故又令伊勢守受守之、同四月朔日、日新到本城、教伊勢守唱凱歌、而呼太平矣、

坪付 薩州谷山之郡

一三段 修理田 抜田

以上

天文八年己亥卯月吉日

(伊集院) 忠朗
(村田) 經定

伊佐智佐權現

2355

『喜入領主忠房臣伊集院某申状』

一伊集院民部少輔切腹之後、子共ハ指宿ニ居申を、喜入御先祖嶋津忠譽様御取立ニより喜入江被召寄、藥師堂と申所江罷居申候、民部少惣領者女子 忠譽奥方、嫡男兵部少者戰死仕、二男又十郎^{久統}忠譽様之御息三郎四郎義運様江申上候者、今度御弓箭御味方何方共不究候、雖爲主君、勝久公ハ不有道ニ御行儀たる間、御當家之滅亡可爲眼前、伊作方江被御心寄處こそ、可爲御家御長久之起由、無據申ニ付、御家中之諸士皆々喜入之御城江被召寄、此由被仰渡候得共、一大事之儀ニ候得者、何分共不申上由候、左候而諸人申候者、又十郎申所理ニ當リ候様ニ候得共、内心ハ 太守勝久公江御吳見申上候處ニ、末弘伯耆守依讒言、川上大和守民部少を初メ餘多切腹被仰付候、左様成恨ミを以大事成儀を進メ申者哉と爲申由候、其時田代・長野・馬場・安樂・淵田・指宿・蘭田・天達・平瀬・森此衆を先として、卅

2356

餘人心を合せ申候へ、又十郎内心ニ者、私之恨も可有之候、申所ハ理ニ當リ候、勝久公御利運ニ成候共、萬事理ヲ背給候而 御當家之滅亡可爲眼前、惣而無理合戦ハ自然之時仕合如何ニ候、壹筋ニ伊作方江御味方可然と申ニ付、義運様被遊御悦喜、又十郎ハ御使被仰付、先御縁者之故桃山安藝守殿江申合、其より喜入尾拵より山くぶりニ而、堂の尾ヲ金峯山之越ニ通伊作へ參リ、御味方之御約束申上、其後方々承合、以上六度御使仕候由候、左候處ニ谷山・川邊より喜入・伊作之間ニ無心本存候哉、堂之尾ニ見取之人數六人出候、終之御使之時又十郎行合込さしと取籠候、又十郎下人荒介主從ニ而相戰、其身ニ茂三ヶ所手を負ひ、敵者川邊衆逆瀬川・山口名字之者兩人討取申候而、御使之首尾無恙申上候事、

『全』

一谷山神前之城を可責落御相談、相圖之日限ニ 義運様者喜入を御立候、其時迄茂御供ハやうく右申上候三拾餘人也、就夫跡之勢夜中ニ爲可相立、右之内少シ被召殘、三拾人程ニ而御立候、雖無勢候上下共運之極ニ

『公記』

出立候事、頼母敷見得たりとなり、又十郎事ハ先ニ掛通、平川障子川坂之上迄を燒拂、神前之城江近付、大音ニ而名乗申候者、嶋津三郎四郎 虎壽様へ申合、只今寄來候、御陣者藏良之城、合戦ハ明日たるへし、城を乗取ん事案之内たる由申觸候、藏良之城よりも如相圖之村々へ火を掛名乗合候由候、其夜者兩陣相堅メ明ルを御待候處ニ、喜入人數百餘人未明ニ參陣仕候、敵何と思ひ候哉、させる戰茂なく下城之由候、其より三郎四郎殿事、御陣へ被爲參御祝言御三献之時、御腰物御拜領爲被成之由候、又十郎儀茂御三献ニ罷出、御長刀一揮・御感狀拜領仕、于今子孫所持仕候、御感狀ハ喜入美作様御病中被成御覽、御跡ニ見得不申候、義運様被召列候人數、頭立候者江者御酒爲被下由候、其より守護方々へ、泉も次第ニ伊作御手ニ入、勝久公ハ他出之由候、

一如右之御國相治候而之後、御城江御直之時、別而御忠節之由候而、取分ヶ御座近ク御參候而、御太刀茂御同意之衆より相替御進上之由承候、其外御祝言御申候時

『忠房臣伊集院某書出』

茂、伯圍様上意を以御座配高御參候、右申上候様ニ御太刀茂御對面所ニ而上り申候儀、忠節之しるし無其紛事ニ而候事、

一 貴久公 勝久公御弓箭之時分、谷山者鹿兒嶋御方ニ而取籠候、就夫ニ忠俊より 貴久公御味方之御内通伊集院又十郎江被仰付、堂の尾山ヲくゞり度々御内證之使相勸申候、其内川邊・谷山之敵逆瀬川・山口名字之士ニ行合、其身ニ茂疵を請申候得共、主從二人ニ而敵貳人討果し其場ヲ通爲申由候、其後谷山神前之城江忠俊少人數ニ而、夜中ニ押寄心安く責落シ、 貴久公御陣藏良之城へ忠俊參上ニ而、御勝利之御祝儀被申上候節、民部少忠節之次第并子孫迄不相替趣被申上、忠俊江長光之御腰物拜領、又十郎江者御長刀拜領仕候云々、

『樺山玄佐日記』

一 扱鹿兒嶋麓所々ニ人々移、東福寺江村田越前守御番之刻、貴久様從伊集院上ノ山へ御光儀、東福寺江村田被申請、從其生別府江被成御渡海、加治木肝付越前守致

2360

參上、虎壽丸殿与奉申し時より、御奉公之事種々被申上、加治木江も御渡可被成御發足由、御供新納山城守・い集院大和守などへ被申、其分ニ相定らる「イニ候而」、本田紀州も參上、以之外用心ニ而、供衆七八拾人ニ而即時ニ暇被申、清水・加治木、實久・豊州を押立られし間、當座之儀也、肝付越前守加治木へ御光儀之爲御禮、い十院江茂致參上、御奉公之由被申上、其比市來は此以前「忠克」、川上上州薩州へ御奉公なれへ、市來の地頭之事、「天文八年六月」、串木野一所に申替、市來江者新納常陸「忠貞」介云人從實久御移なり、

〔箕輪覺書〕

一又爰ニ實久方市來地頭職多田紀伊介賴益ト云者アリ、同弟與一左衛門尉トテ、久シク入道日新ノ在家領伊集院大和守彼ヲ近付テ云ク、兄ノ紀伊介可參當家ノ旨、可申相計ラヒ、忠賞ハ望ニ可任、是忠良ノ仰也トソ被申ケル、君命ニマカセ密ニ忍ンテ、先ツ稻荷ノ大宮司塚田ガ許ニ往テ稻荷宮ノ修理ニ事ヨセ、多田紀伊介ヲスカシ寄セ、此事ヲ告ニケル、紀伊介少モ不承引、其弟ヲ散々ニ曠テ、汝今度ハ命ヲ助クルソ、再ヒ勿來

2361

コトト眼ヲ大キニ肝督シテ被出タリ、又二言ト云コト不能、竊カニ其所ヲ忍出ツ、塚田カ下女是ヲホノカニ聞テ、他所ヨリ常々通ヒ來ル男ニ語ル、其夫即出水ニ差越テ、紀伊介有謀計ノ企、不討之相州方ヲ引入テ由々數キ御大事ナルヘシトソ申ケル、然ハ早速ニ可退治、乍去其色ヲ見セテハ不叶ト云ツテ、折節相州ヨリ市來ノ城ヲ有被攻之聞エ、准其事催人數、市來へ馳續ク、大將ニハ島津越前守・新納常陸守其外侍數十人、其勢三百計リ馳集リ、多田紀伊介ヲ方使出シ「クガウ」、輒ク是ヲ討ニケリ、塚田伊豆守聞之、稻荷ノ御正躰御鐘「疑クハ鐘ナルカ」ヲ取テ相州方ニ落行ケリ、即市來地頭職ヲ常陸守ニ賜リ、多ク軍兵相隨へ日番當番用心嚴シカリキ、

〔樺山善久入道支佐譜中〕

天文八年己亥閏六月十七日、貴久主率軍旅發於伊集院、進於市來、即日挫平城以爲陣營、雖然本城堅固也、此事風聞、以之故、不移時日、安藝守令參候于平良城、入來院石見守重朝妹者 貴久公之籛中、故入來之士卒於大口飛羽筋爲合戰、味方將敗、于時平良士卒忽雖進向、而敵軍得利乘勝前出、就中有稱小野左近者、爲魁指向于安

藝守、即討捕左近畢、安藝守亦蒙疵、于時喜入三郎四郎者安藝守爲加勢續合、合戰無比類者也、善久爲深傷療養歸私宅矣、

其後市來者 貴久公入手裏、安藝守之疵未愈、而參候于市來、上達於慶賀、于時前日合戰之爲褒美、賜助宗之寶刀、與向之島之内松浦・二侯、後日替于藤野也喜入三郎四郎亦任式部大輔、且賜向之島内赤水、眉目之至也、

2362

此度就出張之儀、同心御馳走之由、最御頼母敷覺候、然處色々奇瑞共多候之条、今度動之事存留候、既中途邊及被打出候哉、勞煩之儀不及申候、恐々謹言、

〔疑天文八年〕
六月廿三日
〔忠實也〕
攝津介殿

貴久(花押)

2363

今度新納忠重干戈之次第、言語道断候、至于今者志布志末吉被取延度存候、其方肝付於同意者、既肥境顯形可入魂候、余者年行共細碎可申候、恐々謹言、

〔天文七八年九〕
三月廿九日
本田殿

可水(花押)

2364

〔貴久公御詳中〕
〔正文在本田作左衛門宣親〕
尚々此方环物候蛤羊預荒卷候、祝着候、

如承候、從此方も依無題目無沙汰罷過候處、預御音信候、畏入候、厥方無何候之哉、可然候、此方無吳義候、萬端期後音之時候、恐々謹言、

〔天文八年〕
潤六月十五日
貴久(花押)
本田紀伊守殿
〔重親〕
御報

〔上包〕
本田紀伊守殿
御報
貴久

〔上包裏有之〕
三郎左衛門尉

2365

〔貴久公御詳中〕
天文八年閏六月十七日、貴久自將率軍衆、向市來、不勞而即日挫平城、因以爲陣營焉、然而本城堅固而經數日之際、入來院彈正少弼重聰率師旅來、賀平城之入手裏、而自己即日歸宅、置戎卒於此地、所以防餘患也、鼠男石見守重朝之妹者以故如斯、同月廿七日、入來士卒進大日寺口、飛羽箭犯城裏、敵兵忽開門戶發出來競對之、我兵將及敗績、丁此之時、樺山安藝守善久走向其戰場、稱小野左近者、魁于衆

兵對於善久、善久忽雖討殺當敵、被深傷迫危急、于時喜入三郎四郎忠俊後稱式部大輔 攝津介也、蒲生宮內大輔等決死挑戰、遂得勝利矣、又經一兩日後有鬪戰、於此之時實久之弟中務少輔遂戰死、同八月四日、進本城之搦手、築陣營於湯田口、其將者弟右馬頭忠將也、匪啻如此無晝無夜侵城中、絕彼此通路、窮困漸倍矣、同月廿八日曙天、串木野城主川上上野守忠克使福島筑後者告貴久曰、吾不幸而屈實久之旗下、思終身無二心、而今也則請獻串木野於貴久、教息男虎德丸屬旗下、且携篠原氏幼童來為質者也、其後同姓信濃守携虎德丸、謁于貴久、同廿九日、本城守將島津越前守・新納常陸守等勇氣倦而請降伏、然而常陸守悉讎怨於前日、此故諸軍含恨窺隙欲屠殺云爾、日新齊聞之曰、渠等不辨其是非、以實久之暴虐、思順道之義兵、而專剛強在旗下、顯無二心而已、何強為讎敵乎、乃使新納尾張守・本田下野守保送島津越前守・新納常陸守以下一百餘輩、是亦以恩報怨之謂已乎、同九月朔日、遂素意領本城、使伊集院大和守忠明唱凱聲而大樂者也、此時自始至終不去陣中、勞軍務者佐多半門齊・顯娃某・蒲生某・種子島某等也、且復助勢并力者肝付氏・禰寢氏・伊地知氏等也、三原下總守亦運籌策之備也、

2366

「右馬頭忠將譜中」
 天文八年己亥閏六月十七日、太守貴久主經日、同八月四日、忠將為搦手將、日夜功實內、因守將等失防禦術、同二十九日、請和降城矣、

2367

「新納家支族常陸入道忠苗譜中」
 屬島津八郎左衛門尉實久、主市來之城、天文八年閏六月十七日、島津三郎左衛門尉實久公自將率軍來、攻實甚急、是以即日陷平之城、而為陣營矣、然而運籌策致防禦本城自若也、貴久公亦設奇謀、不止晝夜逼迫、無如之何、漸兵器竭勇氣倦、同月廿九日、請降逃去也、

2368

「相模守運久譜中」
 天文八年己亥七月一日卒、法名道登、號大年、大年寺殿、

大年道登大居士下短

登科拔萃夢中榮 煩惱菩提乾闥城
 警地翻身打筋斗 金剛正體甚分明
 恭惟 新捐館 大年道登大居士

三軍之傑

行令回春

洽及于叢林竹木

仁德稱乾

齊全於元亨利貞

家國依之偃戈甲

民戶依之樂昇平

加之

護持佛祖命脉列大覺寶位

拈提洞門關楸子弄王子誕生

善財童子能近侍 多宝如來好同行

生也不道死也不道 如月印水

默亦不是語亦不是 似谷傳聲

經曰 始知衆生本來成佛生死涅槃猶如昨夢

雖然與厂作

广生金剛眼睛

勝熱波羅看不破閑神野鬼自屏營

2369 「佐多氏譜中」

忠成

清久 又太郎 上野介 入道半門齋(附)

明應七年戊午誕生、母島津下野守延久女、

天文八年秋、軍薩州市來、戰功居多、

「貴久公記」

一 去程天文八年己亥潤六月十七日、貴久様市來御發足有テ、平之城ニ切乘其儘居リ給、同廿七日、出大日寺口ニ有合戰、嶋津攝津守・栴山安藝守碎手ヲ給、蒲生舍弟宮内太夫同前也、軍參之人ニハ入來院石見守御祝言被申上、軍衆少々相殘、一日之中ニ歸宅早、佐多半閑齊・穎娃・蒲生・種子島始中終共在陣也、軍衆馳走之人ニニハ、肝付・根寢・威安・伊地知、同八月四日、本城之野類ニ被陣付、大將者右馬頭忠將、軍輩人伊集院大和守、諸篇者三原下總守是ヲ沙汰ス、同廿八日、拂曉ニ川上上野守串木野之城ヲ可持參之由、以福嶋名字之者令申、爲人質ト、篠原名字之幼童ヲ出ス、以上主從三人也、然間〇イニ市來城主新納常陸守勇氣疲テ、廿九日降參ス、明者九月朔日本城被受取、此常陸守於度々作怨讎ヲ間、以此次誅諺(書)セント諸軍調鋒ヲ落往ヲ待、忠良是ヲ聞給テ、無二心者實久之貞士成とて、却新納尾張守・本田下野守承テ、嶋津越前守・新納常陸守以上百餘人舟津迄被送儀、是以恩被報怨ヲ耶、然者大隅之内市來之事、從山田式部太輔忠廣屋形様へ先年被進上、既御格護ナルヲ、「下文末ニノス」

〔養輪覺書〕

一天文八年己亥閏六月十七日、貴久朝臣御馬ヲ被出、市來ニ發向アル、舎弟又四郎忠將・樺山安藝守範久・喜入攝津守・入來院石見守・佐多入道半閑齋・穎娃小四郎・種子島左近太夫イニ將監トモ・根占右近太夫・肝付山城入道省鈞・加治木入道威安・伊地知佐渡守・蒲生若狹守、其外宗徒ノ侍三十余人其勢千余騎、市來ノ城へ押寄テ平城ヲ攻落ス、其儘本城ノ大手ニ押寄せ、各陣ヲソ被取ケリ、同廿七日ニ敵大日寺口ニ打出ル、御方ニハ樺山安藝守・喜入攝津守、蒲生カ舎弟宮内少輔馳セ合セ、散々ニ合戦シ、無雙之高名誠ニ譽レヲソ擧ケラレケル、同八月四日、野頸ニ陣ヲ着ヨトテ、又四郎忠將ヲ大將トシテ、伊集院大和守・三原下總守ヲ武將トシテ、其勢六七百計ニテ、案内者ニ長井兵部左衛門相具シテ、本城ノ野頸ニ差進ミ堅陣ヲソ取ラレケル、日々夜々ニ相戦フ、貴久方ニ御方ニ被參之輩日々ニ馳セ重レハ、城中ノ兵無爲方之處ニ、同廿八日、串木野ノ住人福島五郎右衛門・篠原又右衛門ト云者馳セ來テ申シケル様、串木野城主川上信濃守榮久可參御方之由申サル、如何ト思召ノ處ニ、篠原ガ其子ニ菊千代

丸トテ十二三ノ幼童ヲ人質ニソ出シ進ラスル、去ハ非違儀トテ即新納伊勢守忠歳ヲ差遣、串木野庄ヲ令知行、去程ニ新納常陸守忠躬勇氣疲レテ、同廿九日ニ城ヲ降ル、明レハ九月朔日、本城ヲ受取テ、大和守忠朗大平ノ時ヲソ作ラレケル、此常陸守ハ於度々相州致恐讎者也、幸ニ得此時爲誅戮トテ、諸卒皆干戈ヲ取テ落行クヲ討タントテ相待ツ處ニ、入道日新聞玉ヒ、無二心者ハ實久ノ不貞士乎トテ、却テ新納尾張守忠歳・本田下野守親貞ニ仰セテ、新納常陸守以下百余人ヲ舟津迄被相送、世俗ノ言葉ニ、恩ニテ怨ヲ以テ報スルト云ヘル、其言ニハ相違シタリ、是ハ怨ニ恩ヲソ報シ玉フ、

〔玄佐日記〕

一貴久様伊集院ガ市來江【天文八年六月十七日】以夜御働なり、各々碎手平良之城を被切取【十七日也】、本城無比類能城なれば手強戦、此由聞付【貴久公御陣也】、次第風与鹿兒島へ令渡海、無程安藝守市來平良へ馳參、吉田ハ御外城なれば不及申、大隅ガハ蒲生殿自身本田・肝付越前守ハ覺までに被立人衆、本城へハ實久御舎【中務太輔忠時】弟外各々被差籠、那答院ハ實久御味方なれば、帖佐山田衆ハ本城江、大隅ニ而者入乱更無分別、敵慈ニ而日

『島津忠俊臣池内佐渡傳記』

一 佐渡者大力弓勢強根當勝久之由候、忠俊公御近習ニ

夜矢軍合戦も有しに、入來院石州妹者〔重朝〕 貴久様御廉中、
 其上最前〔寺馬場本口〕の御奉公ニ而參上有けるに、至大日口入來
 院衆陣亡、〔六月廿七日也〕合戦矢軍取次之處、平良衆續合敵得利、猶
 其分ニ切懸リ、其儘前之衆をは追拂ふ、可退無暇、小
 野、左近与云人魁して、安藝守に指合之處、彼左近を
 討留、安藝守少蒙痕、喜入三郎四郎殿安藝守を見續、
 無比類合戦也、〔廿九日ノコトカ〕又兩日後合戦有、實久御舍弟中務殿御
〔衛門大夫定カ矢ニ中リ〕討死、ケ様ニ晝夜之無堺被相戦、市來湯田口へ着陣有け
 れハ、本城入目之處、川上上州日新様へ被申上子細有、
 我は實久江御奉公たるへく候、妻子は同名信濃守分別
 之様妹ニ而、串木野を可致進上由被申定、其分無相替
 事、上野守實久以御供串木野を退出なり、〔八月廿八日晝〕上州嫡男虎
〔字カ〕徳丸信濃守召列、貴久様へ懸御目、されは市來も被
〔九日〕去渡、安藝守ハ痕不調なから御喜ひのため市來へ參上
〔九月朔日受取ラ〕す、此度辛勞之由被仰下、助宗之御太刀、向之嶋松浦
 ・二 俣を給、其後藤野にめしかへ給、喜入三郎四郎殿
 号式部太輔、向之島赤水御給也、

『忠俊臣伊集院與左衛門聞書』

一 嶋津攝津守忠俊法名義運代ニ、嶋津相州御入道 日新
 様と島津修理大夫勝久・御同名實久一味ニ成、日新
 様へ弓箭を被取懸、三ヶ國皆御敵成、其頃 日新様者
 漸田布施・阿多・高橋・伊作四ヶ所御持被成候、義運

〔公〕

一 佐渡へ依長命ニ百六歳ニテ卒、年号不知、九月十六日、
 法名法覺隆信上座、廟所長善寺山ニ有リ、記之木ニ杉
 貳本有リ、

被召仕、諸所御一戰之節、野太刀爲御持、御側近爲被
 召仕由候、其比出水之島津實久公衆市來江被差籠、
 伯圃公者同所平城江御在陣、其節桃山安藝守殿 伯圃
 公江大隅之内小濱之城より御味方トシテ參陣被成候砌
 右敵城ヨリ出合及合戦候を、忠俊公者藝州公之姉御
 聲之故、御見繼トシテ御掛出、市來大日寺馬場本口ニ
 テ御兩家無比類大合戦之由候、忠俊公敵五六人右野
 太刀ニテ一打ニナキ刈被成候由、其後出水衆落城爲被
 申由候、右野太刀于今喜入御家ニ御格護被成候事、

者 日新様江御内意を奉通、御味方申上、山くゝりとして伊集院伊賀一人折、伊作江參候、彼伊賀罷通刻、谷山堂之尾ニ而川邊・谷山之敵ニ被見合、切疵數ヶ所受申、あやうき命を助り申候、其後參上申候時、日新様より御長刀拜領仕候而本之姿ニ可被成召由ニ而、彼子孫于今頂戴申罷居候事、

『全』

一 其比伯圍様虎壽様と奉申、乍御若輩、日新様御同心、南方次第く被相靜、數年勝久・實久と御弓箭候、市來江實久人數を出水より差籠候を、伯圍様同所平城へ被召乘候得共、本城差こたへ、三年御在陣被遊候、其時迄ハ御味方ニ被參、一所衆なとも無之、御手之衆計之由候處、始而義運參陣仕候、其後樺山安藝入道玄佐參陣候、是者御味方被申上候得共、大隅之内小濱之城江居住候處、彼表茂皆御敵ニ成候間、道かよひ難成故、御内通計ニ而、數年御味方被申上之由候、如右之平城へ御着陣之由被承、參陣被申候を、敵城が見およひ人數を出、合戦ニ成候を、攝津守義運者玄佐之姉尊なる間、見次候半と打出、市來大日寺馬場本口ニ而、

『島津忠俊家臣伊集院與左衛門申状』

兩家無比類大合戦、義運者名を得たる大力者にて、敵五六人一打になきふせたると于今申傳候、其後出水衆落城申、彼表召平、伯圍様者鹿兒島へ御入部と承候事、

一 市來江實久人數を出水より差籠候を、伯圍様同所平城江被召乘候得共、本城差答被遊御在陣候、其時迄者御味方被爲參壹所衆なとも無之、御手之衆計之由候處ニ、初而 義運様參陣被成候を、敵城より見及、人數を出シ合戦ニ成候、市來之大日寺馬場本口にて無比類大合戦、義運者名を得たる大力者ニ而、敵三人壹打ニ投臥給ふと于今申傳候、其後出水衆落城申、彼之表召平ヶ、伯圍様者鹿兒島へ御入部と承候事、其後勝久公ハ如豊後御上被成御遠行候、實久ハ出水が鹿兒島江出仕ニ而、諸方目出度相靜候、如右之御奉公被成候儀并有之間敷と 伯圍様上意ニ而、諸事御祝言之時分、御前近ク御參、其驗ニ者御太刀上り候儀茂、御對面所ニ而者大形之儀ニ無之候、右之外御忠節之段、御座候得共、先大躰ニ申上候、喜入殿御知行茂百町餘之御高ニ

而者、喜入、下大隅之田上、向之島、眞幸之花北名、
大山、邊川、鹿兒島之伊敷・唐所、其外ニ茂懸持之知
行有之候得共、先大跡如此候事、

2378

〔勝久公御譜中〕

〔正文在肝付伴兵衛兼屋〕

尚々廿日之宿を云付候て專一候、悉皆我等ニ奉公た
るへく候外、諸事行末頼入候外無他候、

態用壹書候、仍度々用段共申越候處ニ、種々懇々奉公誠
以祝着千万候、殊前日眉着候事、碓山内義共申候者多被
遣候、同惟近比見事候、涯分可出立候、彼是爲礼碓山遣
候、委曲可申達候哉、將又碓山宿もとしかくならず候
由申候、私ニ借候へハ色々雜説而々、我等一言之事頼候
由申候間、其方家景一宿候事頼存候、和泉罷越候者馳而
妻子と烈寄可申候、^(ヨメズ)纏ての奉公成間敷候、先此度供之間
事を云付候て可然候、彼者も委可申候条省略候、恐々謹
言、

文月十四日

勝久(花押)

肝付越前守殿
(兼西)

2379

〔勝久公御譜中〕

〔正文在肝付伴兵衛兼屋〕

就祢寢へ音信之儀、從益房所安樂將監遣之候、急度渡海
之様、便船等之事御調法偏憑入計候、恐々謹言、

八月十一日

勝久(花押)

肝付越前守殿
(兼西)

2380

〔正文在小倉西右衛門知重〕

此度勝久就山中、別而小倉武藏守庄内都城迄、抽忠節候
間、家之字久をゆるし候也、

天文八年九月廿六日

勝久(花押)

小倉武藏守殿

〔勝久公御譜中ニ在リ〕

2381

〔勝久公御譜中〕

〔正文在肝付伴兵衛兼屋〕

猶々加治木之事不審相殘候者、北原方へ無腹藏被相
尋候て可然候、自是者努々不存候、次先札如申候、
舍弟刑部少輔無比類忠節候、然者彼息男養育之事、
雖不申共候、能々被添心候て可給候、

2383

「勝久公御譜中」
「正文在肝付伴兵衛兼屋」

尚々申候、當家滅亡眼前候、此砌忠節候者、永々不
可有忘却候、

帖佐以來度々預音信、悦喜之至候、殊更依船着、毎々六

2382

「勝久公御譜中」
「正文在肝付伴兵衛兼屋」

每度之儀、雖無心千萬候、猶々又益房所より忠朝へ使僧
遣候、祇寢迄渡船之事、可得懇志之事頼入候、委細者從
局所可申候、恐々謹言、

霜月十四日

勝久(花押)

肝付越前守殿

十月五日

勝久(花押)

肝付越前守殿

加治木之事、北原方へ遣判形候由申散候よて、言語道斷
不存寄子細候、其之事偏憑入候上者、雖如何様之雜説候、
無信用、此節被成入魂候者、其辻永々不可有忘却候、就
其者、連々番衆合力可爲祝着候、恐々謹言、

2384

「國史」卷十 大中公 梅岳君

ケ敷事共申候之處ニ、懇志之儀聊非忘却候、將又我々父
子身上之夏、其方代々候間、一度逐本意候之様ニ、偏
憑存候外無他候、此刻被抽忠節候者、永々可爲芳恩候、
萬期後喜候、恐々謹言、

十二月十二日

勝久(花押)

肝付越前守殿

九年庚子、穆佐城主長倉上總介一作上野介、與其弟長嶺地頭長

倉能登守叛伊東氏、略川南地、伊東義祐將伐之、長倉氏

乞師於北郷忠相曰、若見救援、當以川南地降、忠相不可、

復乞島津豊後守忠廣、忠廣許之、秋八月二十八日、將三

千餘騎、救長倉氏、九月三日、與伊東義祐戰於火柱、忠

廣敗績、據島津支流系圖北郷氏譜、島津内膳家譜、島津内膳家譜、壹
岐弥四郎家藏文書、以此為天文十年事、長嶺今係延岡國、在穆

佐東、忠廣、忠相之子也、據島津支流系圖、冬十一月、公與梅岳

君講犬追物於伊集院、凡三日、據大中公舊譜、十二月、講犬追物

於加世田、凡三日、同上

十年辛丑春正月十二日、講犬追物、據大中公舊譜、夏六月二十六

日、伊東氏與北原氏合軍、攻三俣院高城、梶山・勝岡・

山之口之衆救之、城中出兵與之合、擊敗伊東氏・北原氏

軍、據島津支流系圖北郷氏譜、高城、堤山・勝岡・山之口皆北郷忠相所領邑、冬十二月十日、島津

忠廣・北郷忠相・本田董親・肝付兼演・禰寢某・蒲生某

・伊地知某・廻某・敷根某・上井某・入來院某・東郷某

・祁答院某凡十三人爲黨、各將其兵、攻樺山幸久於生別

府、公遣伊集院忠朗、將鹿兒島・谷山之兵、救生別府、

據島津支流系圖樺山氏譜、樺山玄佐自記、是時本田董親領清水、肝付兼演領加治木、故樺山氏譜原文書曰清水・加治木、各以其邑稱之也、

2385

〔在小倉四右衛門知重家〕

返々たんかうすへき事共候間、十五日よりうちさう

く可被越候、くハしく成留可申候、

新春之悦重疊申籠候、仍先度遣狀候か、于今延引くせ事に候、十日ニ可越由やくそく申候か、無其儀候、ふんへつにおよハす候、へいせいの口あひちかひ心かハリにて候哉、さやうになく候ハ、此ふミとゞき次第ニ可被越事待入候、恐々謹言、

正月十一日

勝久(花押)

〔上書〕

小倉武藏守殿

勝久

〔勝久公御譜中ニ在リ〕

2386

〔勝久公御譜中〕

一其後去都城適豊後、居住于沖濱畢、

2387

〔勝久公御譜中〕

〔正文在肝付伴兵衛家臣前田三左衛門〕

將又越前方毎々預芳志候事、生々難忘候、折々心得

頼入候、

幸便之条用捨書候、局ニたいし折々懇志之由聞及候、誠

々我等迄喜悦不少候、いよ々々芳志頼入計候、何様追礼

可申候、恐々謹言、

十一月六日

(勝久) 義忠(花押)

前田四郎左衛門尉殿

義忠

2388

〔全御譜中〕

改勝久稱義忠、而適乎豊後州、居住沖濱者也、

2389

〔庄内平治記〕

一同九年、伊東か臣穆佐の城主長倉上總介・長嶺の地頭長倉能登守と伊東ニ對して謀反を企、河南ヲ押領す、伊東是を征んため忠相に加勢ヲ乞ふ、長倉も又我勢の

『庄内平治記』

微なるを傷んで忠相に訴けるハ、コイネカヘク稀ハ此度の援軍ヲたひ給へ、さあらんにおひてハ、我領する處の川南を馬島の地ニ獻すべしと、誓書を以て頼しかハ、忠相の家臣悦ぼに入、干戈ヲ調へ向んとす、忠相是を制していわく、構て汝等楚忽なしぞ、案するに川南の地ハ山川遙ニ隔りぬ、我一戦の功ヲ以て縱令一旦多るといへ共、永く保ん事かたし、天の与ざるを取べからず、且ハ主のあたと也、天理ニ逆ふ輩ニ我何ぞ與せんやと衆兵を叱して止らる、故ニ長倉案に相違し、又島津豊後守忠廣彼地を領ん爲思案ニも及す應諾す、數千の兵を引卒して穆佐ノ地に打越、長倉か勢を合、伊東か勢相接し、宮崎火柱におひて攻戦ひ、東隅の勝ヲあるといへ共、桑榆の利を失て、忠廣の家臣悉く打死す、扱こそ伊東と豊州と互に讎を挾ミ鬪諍數年ニ及ニける、

一天文九年の比、伊東か家臣長倉上總介・同能登守兄弟伊東に對して野心を起し、忠廣ニ勢を乞ふのとき、福島・志布志にも調し合せす、旣肥南郷の勢を催し、欲念と我執とに引れて、僅ニ三百計の勢ニて山東へ打こ

「瀬戸口伊豆入道覺書」

矣、田野・石塚・長嶺に陣を取、伊東ハ流石多勢なるに、味方の小勢を顧す、天文九年九月三日、清嶽の城ニ押寄、飛術を盡して戦ふといへとも、多勢ニ無勢、叶すして豊州の宗徒の臣六十三人討れニけり、其外下ろうニ至まで七百餘り打死す、長倉能登も打れニけり、兄の上總ハ生残り、我城郭ニもこらへす、旣肥の軍衆と同しく鬼山を打越、漸々として三俣なる山之口ニ落付ぬ、其後平田某を頼ミ末吉に居たりしか、剩風氣ニ侵され終に空く成ニける云々、

一然者此所切れ不知豊後守忠廣ハ日州の其内おびの郡・南之郷・福島之院・志布志之里・中之郷の梅北・大隅之内の末吉、如此院號郡を守護しておわせしか、同國之侍に伊東といへる弓取有、彼宦長倉上野介・同能登守とて兄弟有けるか、伊東殿にたいして無本をたくミ、我城くわくにたて籠、豊州をこそ頼ミけれ、豊州方之人ノ御運のつきつところかや、彼長倉にたのまれて庄内へもきかせす、福島・志布志江無談合、おび南郷計ニて都合其勢三千餘き、山東へそ越給ふ、田野・石

塚・長嶺彼三ヶ所へそ籠ける、さすかぶけんにて双勢を揃待所に、それにあわさる無勢にて水清獄に押寄る、天文九年辛丑九月三日の事成るに、豊州方の軍兵共、近々の御親類老中地頭其外くきやうの侍達六拾三人はて給ふ、中らう下らうに至迄、其日ニ死する者共七百餘りと聞へけり、長倉能登も打死ス、兄の上野ハいき残り、我城くわくをにげ落て、おびの軍衆と同心して、鬼山と云所をやうくにしてみまたなる山之口へそ着ニけり、其後上野は末吉に平田殿助狀を得て年久しく有けるか、終ニむなしくなりけり、扱其後に伊東殿力を得たりとよろこびて、瀬平と云所を陳ニとり、扱其陣の堺目鶴戸山と申て日本始のれい地なり云々、誠ニ神秘の數々言葉ニものへかたし、筆ニもいかて可及、ヶ程たつときれい地なれ共、弓矢の道のはかり事ニいて、此山を城くわくニかまへて伊東をふせかぬと、城戸立垣ゆひ矢くらを付てそかまへけり、伊東ハ是を見るよりも安ほとと思ひて、ゑほしかたと云所に陣を取、道を作、山をなき、夜白をきらわす攻けれハ、同十一年卯三月十八日ニ終に此山落ニけり、誠ニ日本始と云水ていかん寺と申せとも、しゆらのちまたと成ニけり、

爰ニ而も又御一門曆々の人々、たゞいたつらに成給ふ、比類なき事あまたはんへれとも、先々爰ハかくのミぬ云々、

2392 「新納氏藏」

日向國福嶋院市來之内、水田六段田之内五段、於未後者毎月到忌日爲可請孝養、奉寄進鄂渚禪師者也、仍證狀如件、

天文九年庚子二月十八日 藤原 近江守忠勝

龍源寺 待者御中

2393 『福昌寺文書』「此一通御譜中ニナシ」

『貴久公御花押』
(花押)

薩陽鹿兒嶋城玉龍山福昌禪寺者、廼前奥州太守藤氏元久公創建古招提也、爰天文龍集丁酉季夏之間、丁國家喪乱、寺既及久廢矣、雖然歲次己亥之春、三州太府君藤原貴久公、寄宇宿舊地寺領等、以與其例敗、命老拙再現梵刹矣、由是證大府君於當寺中興大檀越矣、仍爲後代邦君佳判申請、永山門鎮護益佛日光加者也、

天文九年庚子三月如意珠日

福昌再住怒岳叟誌之（朱印） （花押）

『公』「貴久公御譜中ニ此一通ノセタリ」

「貴久公御花押」
（花押）

薩之玉龍山福昌禪寺、廼前陸奥守元久公創建之古招提也、
爰天文龍集丁酉三月日、丁國家喪乱、寺既及久廢焉、雖
然歲次己亥之春、太府君藤原貴久公、寄宇宿舊地并寺
領等、以再現梵刹、教野僧某與厥例敗焉、因是 太府君
證當寺中興大檀那以立其功畢矣、仍爲後代、邦君之御
判取置爲其證、以永山門鎮臺益佛日光加者也、

天文九年庚子三月如意珠日

福昌寺再住（朱印） 怒岳叟（朱印） 誌之（花押）

福昌禪寺 寄進狀 陸奥入道伯固

「張紙ニ」
「此上包書様非也、貴久判髮永禄九年二月彼岸也」
「上包」

「豊州家忠朝譜中」

「在川邊兼日置太郎介」

夫吾朝天神七代地神五代之後、

神武天皇以來禮樂征伐自天子出焉、爰人皇五十六代從

清和天皇十代之后裔鎌倉右大將頼朝卿誅伐平氏、其功覆
天下、「本ノマ、」 是以

後白河院勸感之餘、被任六十餘州之惣、自是天下之號
令出乎諸侯矣、其后胤當家之先祖 島津忠久公十一代
之孫薩隅日府君 藤氏忠昌公爲 豊後守於山東之固、
而自隅州帖佐郷被量移日州鉄飯福島之院、此時文明十
八年丙午十二月初吉、公年廿一歲矣、自爾以降國家惡
劇而蔑公道、乱君臣之禮、何異桀紂之乱哉、然間府君
忠昌公爲三州安寧、以 豊後守忠朝公之吹舉、被與奪
三侯之高城於伊東尹祐、其後不經數年而剩爲伊東長本、
而國家起乱者于茲有年矣、是故 豊後守運武略、率一
門之群勢、天文元年壬辰十一月廿五日、出場之始也、同
二年癸巳暮春廿八日、 豊後守自身發足、屯猛勢動天
地、震雷電、如雲、似霞、兵卒充滿而不知其員幾千萬
矣、雖得多々勝利、不遑敢記耳、同三年潤正月七日、
奪取彼城郭、創家國安平之基、武功以無雙者也、粵串
良郷者以故府君 忠昌公之重恩一所懸命之地也、然處
永正十七年庚辰八月朔、伴氏兼與一族密談而同心企圖
謀、催群勢欲奪彼住城矣、時越後守久武爲大將而調衆

評、下號令遊於所圍敵軍矣、其翌年大永辛巳八月十八日、豐後守自身出張矣、同廿一日、押寄鹿屋之城、間

近攻倚打破乱株逆木雉堞等、一心防戰、各致忠於馬前、欲揚名於后代、引足於鹿屋原合戰也、崩敵軍以得勝利

引退矣、少息汗馬甘氣而歸宅矣、而後大永三年癸未八月廿日、新納忠勝公與肝付兼與同意、而或留陸地、或塞

海路矣、故同四年甲申九月廿九日、城已落矣、主君

豐後守以他年之爵賞、天文五年丙申八月十一日、絶通路而欲雪會稽矣、寔兄弟闕于牆、禍起於蕭牆之謂是也、

然其爭已及兩三年、至同七年七月廿有六日、弓折矢盡矣、噫嘻天哉、驟然掃跡去于四方者殆千人矣、同廿七

日、豐後守忠朝公入部居住于救仁院廣朝城矣、把定封疆、鎮撫社稷、猛將謀臣出入幕下、俠客談士環列座傍、

其仁及乎庶民、其威振乎隣國、諸人僉言、知國似知兵矣、抑亦遊心於翰墨之場、專倭歌之道、仰乎難波津之古風、

酌乎富緒川舊流者也、嗟夫汝々不忘者乎、天文九年歲舍庚子姑洗初三日、公年七十五齡而蛇然率矣、於此之

時無貴無賤、縑素紛然自遠方來、不亦感乎、況於院內乎、同十有四日、日州飢肥院就于大龍精舍、以法闡維

矣、法名 道海、道號月舟、號常春院殿焉、於是家臣

藤氏久岑寫眞、忝命山僧令記其德、以要傳千載矣、忠義之至誠大哉、

皆天文九年庚子林鐘如意珠日

春山野納佛日常光勝一蘭謹誌焉

2396

〔北郷忠相譜中〕

天文九年、伊東氏領穆佐城主長倉上總介・長嶺地頭長倉能登守對伊東企叛逆、押領川南、伊東爲征之、乞援兵於

忠相、長倉亦云、遣援兵使川南盡爲忠相之領、忠相之氏族皆悅而議救長倉、忠相曰、所隔山川者、以我戰功雖取

之、始終難拘、況可與敵對主人而背天理者乎、遂不諾、

依茲長倉憑豐後守忠廣乞助兵、忠廣應諾而悅領川南、率數千援兵至穆佐合長倉之勢、於宮崎與伊東挑戰、雖得東

隅之勝、失桑榆之利、豐州之家臣悉殞命、從是伊東與豐州家不和、而鬪諍及數十年、此時伊東義祐贈書於北郷氏族之中、有正文左記之、

2397

追而都城左衛門佐殿へ未申通候、如何様可慶書進之候、萬事御同前本望候、

米良紀伊頭進之候之處、丁寧之儀誠快然之至候、然者、

長倉能登守連、構惡之謀心候、就中當時北原又八申合候由、其聞候之条、兄上總守へ成敗之由申付候、於自然同意者、堅可致其校量候、就其者眞幸弓箭之儀申合、涯分可抽粉骨候、大小御同前可爲満足候、恐、謹言、

七月廿五日

北郷殿

〔伊東〕
義祐(花押)

2398

『感應寺文書』

薩摩國感應寺住持職事、任先例、可被執務之狀如件、

天文九年十一月拾六日

嶋津實久(花押)

〔感心寺十五世住持俗姓島津氏薩摩守因久、五男〕
從薰首座

〔上包〕
從薰首座

嶋津實久(花押)

〔此文書、薩州家實久之譜中ニ在リ〕

2399

〔川上武藏守受久 義久 三男 譜中〕

〔正文當家有之〕

上梵天帝釋四大天王、下堅牢地神、惣日本國中大小神祇冥道、別當所諸神等之可蒙御罰者也、

2400

天文九季庚子十一月廿六日 貴久(花押)

〔惟久〕
河上武藏守殿
〔上力キ〕
貴久様之御請紙
進覽

〔貴久公御譜中〕

〔正文在伊地知彌吉郎〕

於伊集院

犬追物之手組之事 天文九年十一月廿一日

三郎左衛門尉殿 十二疋 相模守入道殿 九疋

嶋津右馬頭殿 四疋 嶋津三郎九郎 二疋

比志嶋孫太郎 二疋 嶋津伊賀守 三疋

三原次郎左衛門尉 三疋 税所右衛門兵衛尉 三疋

嶋津尾張守 四疋 嶋津掃部助 三疋

嶋津攝津守殿 四疋 嶋津三郎次郎 三疋

檢見 喚次

嶋津武藏守 本田民部少輔

2401

〔正文全上〕

犬追物手組之事 天文九年十一月廿二日

相模守入道殿 十四疋 三郎左衛門尉尉 廿六疋

嶋津右馬頭殿 五疋 嶋津尾張守殿 九疋

山田弥九郎 二疋 本田弥次郎 三疋

指宿刑部少輔 一疋 鎌田又七郎 三疋

河田飛彈守 二疋 伊地知式部大輔

嶋津上野入道殿 八疋 嶋津攝津守殿 三疋

檢見 喚次

嶋津武藏守 嶋津十郎左衛門尉

2402 「正文全上」

犬追物手組夏 天文九年十一月廿三日

三郎左衛門尉尉 三十三疋 嶋津上野入道殿 五疋

嶋津淡路守 一疋 嶋津尾張守 五疋

嶋津三郎九郎 一疋 嶋津掃部助 四疋

税所右衛門兵衛尉 三疋 河田飛彈守 一疋

伊地知式部大輔 鎌田刑部左衛門尉 二疋

本田弥次郎 五疋 鎌田圖書助 四疋

嶋津伊賀守 一疋 村田越前守 一疋

嶋津攝津介殿 六疋 嶋津右馬頭 七疋

檢見 喚次

嶋津武藏守 比志嶋彦三郎

2403

「貴久公御譜中」
「寫在田中後藤兵衛入道龍淵」

加世田

犬追物手組之事 天文九年 雪月拾一日

相模守入道殿 十一疋 嶋津攝津介殿 三疋

嶋津三郎次郎 一疋 嶋津又太郎殿 三疋

嶋津尾張守 四疋 嶋津源五郎 一疋

猿渡大炊助 一疋 平田新左衛門尉 一疋

嶋津右馬頭殿 十五疋 嶋津疊秀丸殿 三疋

嶋津上野介入道殿 六疋 三郎左衛門尉尉 十三疋

檢見 喚次

嶋津武藏守 鮫嶋又左衛門尉

2404 「寫全上」

犬追物手組之事 天文九年 雪月拾四日

三郎左衛門尉尉 廿四疋 相模守入道殿 廿七疋

嶋津四郎入道殿 二疋 嶋津治部左衛門尉 一疋

嶋津疊秀丸殿 六疋 嶋津源五郎 一疋

2406

「貴久公御譜中」
「正文有之」

三郎左衛門尉殿

嶋津左京亮

検見

喚次

嶋津四郎入道殿 八疋

嶋津攝津介殿 四疋

嶋津三郎次郎 一疋

嶋津尾張守 四疋

嶋津三郎九郎 一疋

猿渡大炊助 一疋

嶋津又太郎殿 四疋

嶋津伊勢守 四疋

嶋津曇秀丸殿 七疋

嶋津武藏守 五疋

相模守入道殿 十一疋

嶋津上野入道殿 三疋

天文九年
雪月十五日

2405

「全上」

犬追物手組之事

嶋津武藏守

嶋津左京亮

検見

喚次

嶋津攝津介殿 九疋

嶋津亦太郎殿 三疋

嶋津右馬頭殿 十五疋

嶋津三郎九郎 三疋

嶋津伊勢守 一疋

猿渡大炊助 一疋

嶋津尾張守 六疋

平田新左衛門尉「本マ、」

2408

「御文庫拾六番箱壹卷中」

嶋津三郎左衛門尉殿

「貴久」

二月十九日

（近衛權亮）
（花押）

其後遙久閑筆候、遺恨候、細々可及短札之處、依遠路打過候、口惜候、仍連々申候儀、別而馳走頼入計候、猶進藤筑後守可申候也、狀如件、

2407

「貴久公御譜中」
「正文在伊藤七右衛門」

嶋津武藏守

本田下野守

検見

喚次

嶋津右馬頭 十二疋

嶋津十郎左衛門尉 一疋

村田越前守 一疋

山田弥九郎 一疋

税所右衛門兵衛尉 二疋

指宿駿河介 四疋

嶋津尾張守 四疋

本田民部少輔「本マ、」

三郎左衛門尉殿 十二疋

嶋津三郎九郎 四疋

犬追物手組事

天文十年
正月十二日

御當家一流之犬追物之秘説不相殘申上候、自然失念之義者、不可爲訛謬候、若令違犯此旨者、

上者梵天帝釋、下者堅牢地神、惣而日本國中六十餘州之大小神祇冥道、別而當國鎮守新田八幡大菩薩 天滿天神當所諏訪之上下大明神并諸大明神之神罰冥罰可罷蒙候、仍起請文如件、誠恐誠惶、

天文十年辛丑二月廿五日

嶋津河上武藏守

惟久(花押)

進上
貴久様

河上武藏守

進上

惟久

「貴久公御譜中ニ在リ」

「武藏守受久譜中ニ在リ、惟久ナシ、如何、受久ノ子ハ武藏守經久トアリ、其子倍久弓馬之書ヲ相傳シ、自永吉移鹿兒嶋トアリ」

2409

「北郷忠相譜中」

北原某與伊東氏同意、欲奪高城、伊東氏陣于三俣院鳥越、北原氏屯于志和地城、同十年辛丑六月二十六日、兩陣軍勢攻高城、時梶山・勝岡・山之口兵爲後援、城兵得力開門挾討、敵軍騷擾而敗走、於茲斬獲居多也、此日北郷次郎右衛門久利・新納武藏守・春日寺同宿宗連・山内豊前守・山内玄番允義繼・河野源五郎・山内刑部左衛門・黒

田民部少輔・二方彈正・二方彦九郎・島玄番左衛門清賢・杏隱・武藏先達宥心・白谷藏人・江内谷筑前守・松本小五郎・西俣刑部少輔・竹下伊豆守・長嶺兵部・蒲生藏人・時任安藝守・同藤兵衛・堀口土佐介・木前彦左衛門・松仲左衛門・丸山因幡守・大浦十郎左衛門・園田四郎左衛門・九目藏人・高野市允・長嶺平次郎・竹下彦六・樺木丹波守・有島舍人・赤木兵部左衛門・同彦右衛門・福留彦六・別副兵部左衛門・同彌次郎・國分宮内・千多羅使與三郎・藤井甚兵衛・高野新兵衛・温水大藏・辨濟使與三郎・津曲七郎次郎・鳥羽彌五郎・時任七郎左衛門・田野邊次郎左衛門・西山舍人・高野四郎次郎・高山與三兵衛・槻木玄番・黒木左衛門・濱川九郎次郎・成松肥後守・隈本帶刀・黒木七郎左衛門・小牧對馬守宗直・津曲石見守・石川與三右衛門・成松傳内左衛門・有島某・尾崎掃部兵衛・長友兵庫・蒲生縫殿助、戰死于高城諏訪馬場、其外鬪死者多、

2410

「庄内平治記」

一天文十年四月、忠相味方の兵ヲ出し、志和地の繩瀬ヲ燒拂ひ、同五月、山田ニ打出、敵六人か首を取、同六月

「殉國名載中抄」
天文十年辛丑

六月十六日 或ハ廿六日とも 北郷次郎右衛門久利 北郷忠相の族臣ニテ、伊東氏・北原

一同月廿六日、忠相兵を志和地ニ出して五十二人戦死、

名略ス」

「全」

十六日、伊東・北原兩陣の勢高城ニ押寄、忠相の軍兵と諏訪の馬場にて挑ミ戦ふ、馬煙り天をかすめ、時の聲地を動す、かゝりし處に、梶山・勝岡・山之口に籠たる忠相の兵とも、高城の後詰せんと相圖を定めて打て出、敵陣の後に突て掛る、高城の勢力ヲ得て、門ヲ開いて打て出、前後より挟ミ透間もなく攻たりけれハ、伊東・北原打負て八方に散乱す、伊東か臣の討るゝもの山之城四郎右衛門尉・肥田木次郎右衛門尉・野村讚岐・落合又十郎・同弥二郎・長嶺甲斐・原田志摩・川崎兵庫・肥田木河内・重永志摩・岩田弥七左衛門尉其外六拾余人也、北原か家臣ニも討るゝもの多かりけり、當家ニも北郷二郎右衛門尉久利打れぬ云々、其外討死ノ

氏の師と高城諏訪馬場に戦て死之、下の人々、高橋五郎兵衛・山同し、右或左ニ作る、此日戦死七十人と云、
内次郎右衛門義重 義重ハ六月廿六日日州三俣下川内合戦ニ死スト系圖ニ見ユ、同時ナルベシ、春日寺僧宗運・新納武藏守忠吉 此年六月二日志和地戦死とも 山内豊前守義清・山内玄蕃義継 或ハ義成とも作る 河野源五郎通照・山内刑部左衛門・黒田民部少輔兼盛・二方彈正 六月二日とも 二方彦九郎 六月二日とも作る 島玄蕃左衛門清賢 或ハ賢、僧杏隠、 武藏先達有心・白谷藏人 或作白屋 江内谷筑前守・松元小五郎・西俣刑部少輔 六月二日とも作る 竹下伊豆守・長峯兵部・蒲生藏人・時任安藝守・時任藤兵衛・堀口土佐介・木前彦左衛門・松仲左衛門 左或作右 丸山因幡守・大浦十郎左衛門 或十左衛門 園田四郎左衛門・丸目藏人・高野市之丞・長峯平次郎 或平或四郎 竹下彦六・樺木丹波守・有島舍人 或作有馬 赤木兵部左衛門・赤木彦右衛門・福富彦六 或作福島 別府兵部左衛門 或別府作野副 別府彌次郎 亦野副とも作る 國分宮内介・千多羅寺彦左衛門・藤井甚兵衛氏房・高野新兵衛・温水大藏介 或温水トモ 辨濟使與三郎・津曲七郎次郎・鳥羽彌五郎・尾崎掃部兵衛正則・長友兵庫允・時任七郎左衛門・田野邊次郎左衛門・西山舍人 六月二日とも 高野四郎次郎・高山與三兵衛・槻木玄蕃允・黒木左左衛門・濱川九郎次郎 六月二日高城戦死とも作れり 成松肥後守・隈元帶刀・黒木七郎左衛

〔殉國名數中抄〕

天文十年辛丑

門・小牧對馬守宗直或作小松、津曲石見守・石川與三右衛門或此月二日日州高城戰、成松傳内左衛門・蒲生縫殿助・有馬某或有鳥トモ、福永紀伊介高城にて戰死とあり、此日の事故、考を俟、大田駿河守上にて同し、系圖に三俣合戰討、樺山三郎右衛門上にて同し、死とあり、子孫都城ニあり、忠頼上にて同し、系圖に三俣合戰討、樺山三郎右衛門上にて同し、死とあり、子孫都城ニあり、白尾近江守伊東氏と庄内高城不動寺馬場にて戰て死之とあり、年月詳かならず、此に置考を俟、

九月三日或ハ三月三日の事とす、日置美作守豊州忠廣の臣にて伊東義祐の師と日州火柱に戦ひ死之、平田筑前守宗勝雜兵三百余人、瀬戸口源兵衛秀勝雜兵三百余人、長倉能登守義祐臣なれとも忠廣に内應して死す、新納孫四郎忠常子孫四郎右衛門なり、忠勝の次男ニテ此時父子忠廣に屬きて出陣、忠常等一族戰死するもの多し、新納式部太輔忠郷忠勝の弟、初子孫佐、新納伊勢守忠弘新納十郎左衛門尉忠厚、駿河守、左衛門、新納新右衛門尉右或左ニ作ル、妖肥南郷地頭なり、新納安藝守忠行雄長男、治部少輔濱の市にて討死とあり、年月なし、此に俟考、

十二年十二月、始良彌九郎忠親生別府戰死とあり、此月豊州忠廣・北郷忠相等兵を合せ樺山善久を討、其時ならん、

『長谷場文書』

薩之龍山者、藤氏長谷場公之名字之地也、故其家門之禪侶在寺時者、加常住之扶助爲堪忍者也、仍證文如件、

天文十年辛丑八月時正

福昌住山恕岳老書(花押)

御朱印二御判

〔樺山善久入道玄佐譜中〕

天文十年辛丑、島津豊後守・北郷某・禰寢某・伊地知某・迴某・敷根某・上井某・清水・加治木・蒲生某・祢答院某・入來院某・東郷某共十有三人、以同意、欲陷吾之居城生別府、貴久主味方者肝付某・北原某・南方而已、使伊集院大和守與麿島・谷山士卒等、入于生別府、雪月十日、以多勢所責之者甚急也、麿島之士岩永某・周防房碎手蒙疵、而況於我之士卒乎、號樺山者已下十有餘員爲戰死、蒙疵者不知其數、雖然居城堅固也、是以 貴久主彌增勇士所以爲警固也、

『玄佐日記』

一天文十年、十三人以談合、生別府へ被取懸、其人衆豊州・北郷殿・禰寢・伊地知・迴・敷根・上井・清水・

2418

〔全〕
 一同年閏三月三日、北原か領する處の森田ヲ始、兒玉・西椿等の麥作を削る、これニ依て志和地の城兵西椿の邊ニ打出、兩陣ニ簇り挑ミ戰しかとも、一戰に切負て城中ニ曳退く、同廿三日、山田・木野・牛谷ニ至て、又麥作を散せし故、敵の勢三百余人同時ニ簇り來て、矢軍時ヲ移といへ共、今度も敵軍敗北して霧島を目標曳退く、

2417

〔庄内平治記〕
 加治木・蒲生・祇答院・入來院・東郷是也、貴久御方ハ肝付・北原・南方衆迄也、生別府へ伊集院和州、鹿兒嶋・谷山衆少々召列、被指籠候處、雪月十日、以多勢、生別府を責、其日限と見得しに、和州の籠御神慮と覺ゆ、鹿兒嶋衆各々、殊岩長方山伏周防房請痕碎手、所々人衆一段相働、椀山名字を初とし、十餘人討死す、手負不知數、〔イニ文佐〕其儘貴久様以御番衆御覺悟之處云々、

一同十一年二月十二日、北原か領内志和地・水流・繩瀬等の麥作を散して瀬之越まで乱入り、互に矢軍あり、

2419

〔全〕
 一同月晦日、嶋津豊後守忠廣肝付か領蓬原ヲ攻んかため加勢を忠相ニ請る、忠相北郷左馬介ニ命して多勢を卒して向しむ、去程ニ兩家の勢蓬原の搦手鹿の屋ニ於て攻戦ふ、時ニ柵占の士卒敗走して、園田將監・柵占八郎左衛門尉・同長門守等を始、宗徒の勢五十余人一同ニ打れける、

忠 良 公 自天文十一年
貴 久 公 至同十五年

前 編 舊 記 雜 錄 卷 四 十 六

2420 「島津國史」卷十 大中公 梅岳君

十一年壬寅春、北原又八郎祐兼遣軍攻溝邊玉利壘、本田董親遣兵救之、北原軍敗諸上野廣原、斬本田刑部太輔等數十人、據島津支流系圖樺山氏譜、樺山玄佐自記、玉利壘遺城在溝邊地頭館東南一里有餘、係崎森村。祐兼、貴兼之曾孫也、據北原三左衛門系圖、北原時居溝邊高松城、據島津系圖、樺山玄佐自記、高松城遺城在溝邊地頭館西南二十八町有餘、係有川村。三月、公與梅岳君如生別府、與祐兼謀攻加治木、軍於吉原、祐兼軍於札立、札立皆在加治木段土村。祐兼親詣吉原、與約師期而還、加治木城中出兵、與祁答院・帖佐・蒲生等衆邀諸路擊破之、祐兼既敗、不能復振、公不敢攻加治木、罷師而還、於是隅州賊黨

益張攻生別府甚急、乃召幸久而諭焉曰、當以他邑封汝、汝且致生別府而去、若致生別府而去則將誰與焉、幸久對曰、願君以生別府賜本田董親、若使董親喜於君命以事公室、則加治木・祁答院等將與之離矣、然後可徐圖也、從之、賜幸久數邑、邑名不詳。於是幸久去生別府、遷于谷山福本村、據島津支流系圖樺山氏譜、樺山玄佐自記、黃套軍記、樺山幸久去生別府月日不詳、蓋在此年十二月六日賜本田董親小濱、努久見田等地、種子島加賀守惠時與其子左近大夫直時不快、直時乞兵於禰寢氏、禰寢某引兵、至種子島而還、復乞於公、公使新納康久往、閏月七日、康久至屋久島、而惠時出奔、自訟於公曰、種子島氏將不能復有三島矣、願以獻之、公不受曰、土地不可貪也、召康久還、而歸惠時、使與直時和解、由是父子乃定、據大中公舊譜、黃套軍記、直時逃之屋久屋久、永良部、島告新納康久曰、願獻三島、與此不同、三島謂種子島、惠時、□時之子也、據種子島藏人系圖、種子島晦日、島津忠廣攻蓬原、乞援兵於北鄉氏、北鄉忠相遣次子左馬助忠孝助之、與肝付氏戰於鹿野屋、據島津支流系圖屬肝付氏邑、夏六月十八日、志和池兵將侵勝岡、勝岡與梶山合兵、邀擊敗之、同上、志和池北原氏邑、梶山北鄉氏邑、秋八月二十日、伊東氏・北原氏合軍至三俣院高城、刈禾而還、城中出兵逐之、與戰於小山河原、北鄉尾張守忠親自都城來救、夾擊之、大捷、忠親、忠相之子也、同上、冬十一月十三日、公與

本田董親盟、據大中
公舊譜、十二月六日、賜董親小濱・努久見田

・西郷・小田・日木山等四十四町之地、從樺山幸久之謀

也、同上、樺山氏領小濱・西郷・小田・日木山、見島津支流系圖、生
別府城在小濱村、國分郷小田村有西郷門、郡村高辻帳、國分郷有

野久美田村加治、初伊東氏領野野美谷、北原氏取之、十六

日、北郷忠相下野野美谷、使族人信濃守守之、據島津支流
系圖、北郷

信濃守久隆、見第十三卷永正七年注、久初北原氏使白坂左衛門尉

為山田地頭、城中有釘村伊豫守者、陰應北郷忠相、忠相

因之、遂取山田城、其後北原氏復取之、使北原遠江守守

之、同上

2421 「北郷忠相譜中」

天文十一年壬寅二月十二日、削北原領志和池・水流・繩

瀬之麥作、亂入頼越、有矢軍、

2422 「日新公御譜中」

天文十一年壬寅三月日、日新及 貴久率薩摩之兵、渡于

隅州、到于樺山之居城生別符、欲攻加治木城之際、日州

眞幸院有北原〔祐兼〕兼孝者、入于溝邊高松之城、而與日新父子

俱謀攻加治木城、兼孝屯于札立、日新父子有于吉原、兼

孝來于吉原、伸於禮詞之際、日新舉盃之時、有蜘蛛之佳

2423 「樺山善久入道玄佐譜中」

天文十一年壬寅之春、北原氏使師旅發向於溝邊玉利壘、

已破卻之際、本田氏之士卒馳來欲救之、忽北原氏之兵對

之、競戰于上野廣原、而本田刑部大輔已下五六十人屠殺、

以追下于宮内、又加治木・帖佐士卒五十餘輩斬獲也、因

茲生別符亦所以快樂也、

天文十一年三月、日新公及 貴久主引率於薩州之軍兵、

瑞、即祝之而後欲赴當城、丁此之時、忽大雨降宛如灌焉、

所以期後日各爲歸陣也、北原之兵丁將退於札立之時、大

隅・那答院・蒲生・帖佐之兵襲到、而與城裏兵借進來、

于時已及合戰、北原周防介・澁江兵庫助已下七十餘人遂

戰死矣、雖然日新父子歸陣之旗下無一人之知者、無志到

于生別符、而解歸帆之纜者也、其後凶徒蜂起而侵生別符

者數度、聞之、則日新父子相議、而召樺山安藝守善久於

伊集院曰、所謂天時不如地利、地利不如人和、又聞、柔

能勝剛、弱能制強、暫棄居城則凶徒等必心快憤散、而漸

至于懈緩乎、然則窺其時、乘其變退除黨徒、何難之有乎、

善久應諾、故十二月六日、僞許其壘於本田某、以故隅州

渡御於生別符、北原祐兼亦入高松城、日新父子與祐兼俱謀而欲攻加治木城、祐兼者屯于札立、日新公 貴久主者共屯于吉原、祐兼到于吉原、見日新父子、于時忽然大雨降下、故所以期後日互退去也、北原之軍丁將引退之期、大隅・那答院・帖佐・蒲生之兵與城裏之軍俱數千餘輩責到、已及合戰、時北原周防介・澁江兵庫已下數十人遂戰死矣、此事日新公歸陣軍中敢無知者、其後所攻於加治木之以餘勢、生別符爲警固、日新公 貴久主者先歸帆之解纜矣、故凶徒蜂起而侵生別符者數度、臨此時善久蒙疵者不淺、日新公父子并國老已下擬評議、而後召安藝守於伊集院、使喜入式部大輔傳達曰、合戰之勝敗者有天時地利人和不和、先去生別符、宜俟天運循環、於所領者算生別符之田數、可充給云云、善久報曰、欲拋一命致粉骨、亦爲盡忠功也、何背日新公 貴久主并國老之評議乎、然則可去畀城於何族乎、于時善久曰、吾只獻城日新公 貴久主而已、去孰族賜何族亦非吾之所與知云云、又再曰、徒非去彼城所以後來之思勝利、善久何不謀公私之宜乎、善久曰、然則不得噤口、本田某爲當敵免城於彼、則誇優饒、專懦慢、疎加治木・那答院之交、如此則隅州大亂、可有近邇云云、上下共以許容此議、所賜生別符於本田氏也、安藝守

者賜七十五町於數ヶ所、攜衰老之父母、與幼稚之男女、而移于谷山福本、如愚案本田之懦日增月溢、因茲十有三人同意之一揆爲分散者宛如雲霧、及此時、豊後守忠朝之猶子次郎三郎・北郷讚岐守候伊集院、欲使 貴久公爲守護云云、聞此言而有喜悅者、又傍人曰、已受 忠兼之讓爲守護職、則何今將更乎云云、安藝守送七年之春秋於福本、其間窮困不可勝言、

2424

『箕輪伊賀記』

一天文十一年壬寅三月日、樺山安藝守ノ在城隅州小濱ノ城ニ南方ノ士卒ヲ被籠番兵、同五日、入道日新公・貴久朝臣彼地ニ發向シ玉フ、爰ニ加治木ノ主肝付彈正忠早速ク參相州、前雖致軍勞、北原・澁谷等令謀叛、先加治木ニ可發向トテ被相向之處ニ、日州眞幸郡主北原伊勢守兼孝カ家ノ子、眞幸・吉田ノ地頭職北原周防介・澁江兵庫允、湯ノ尾・栗野・横川ノ勢ヲ卒シテ寄來ル、貴久其奴原トモ寄來レハトテ何程ノコトカ有ベシ、イザ散散ントテ已ニ打立ント仕玉フニ、御酌ニ參ル入道舉盃玉フニ蜘蛛ノ靈瑞アリ、誠哉十方ノ諸佛土羅利不現身、豈圖、於此曠野唯垂大悲分身化トハ此夏ソト宣

ヒテ打立玉ヒケル、敵雖猛卒ノ士、早討負、北原八郎左衛門・澁江兵庫助ヲ始トシテ眞幸ノ軍徒七十餘人ヲ打滅ス、卽御歸陣有テ鹿兒嶋ノ御祝言万民^{サ、ムキ}アヘル也、

『貴久公記』

一天文十一年壬寅三月、日新入道殿并貴久公催薩摩内之兵ヲ、隅州小濱ニ越給、被向加治木城、同日從日州北原兼孝卒勢彼城下ニ馳來リ、御父子相看シテ主客之礼ヲ成ス、故ニ入道殿ニ進酒、先ツ盃ヲ舉給ニ蜘蛛有來セリ、瑞相誠哉、十方諸國土無利不現身、豈圖、於此曠野垂ントハ大悲分ヲ身化ヲ、サレハ敵強シテ北原周防介・澁江兵庫助爲始ト眞幸ノ軍徒七十餘人雖亡、御幕下一人モ無シテ悉歸陣シ給、

『玄佐自記』

〔天文十一年也〕

一其次春北原溝邊江手遺す、溝邊たまりと云柁を仕拂處に本田衆走續、其人衆を宮内迄追下、上野廣原ニ而本田刑部太輔を初、本田衆五六十、加治木・帖佐之衆五十餘人討死、生別府成勢、かゝる處に、天文十一年生別府へ日新様御渡海、御父子其外各々雖渡海、船路不

『貴久公御譜中』

自由、北原ハ高松城へ打入、加治木へ御衆を遣なり、北原は札立へ差寄、日新様吉原へ御座候處ニ、北原祐兼參上有て日新様被懸御目、其折以之外大雨降出、然者南方へ被成御開、北原衆へ城衆大隅・那答院・帖佐・蒲生迄之衆數^{千イ}十人切付、生別府方へ不知其由、北原周防介・澁江兵庫を初として、數度之合戦に北原衆數十人討死す、無力先々日新様被成御歸帆、生別府猶以手強御番也、小堡等には何方をもしつめけれ共、敵は多勢此方ハ無勢、鹿兒嶋・向之嶋の外續衆なきに、安藝守も深手負、其比働不達者に、伊集院へ安藝守可參承云々、

天文十一年壬寅三月廿三日、種子島父子有不快事、而島主加賀守惠時之子左近大夫直時憑禰寢某、催師旅渡其島、雖然諸般乖戾、故未久所以歸帆也、直時告件旨趣於貴久、以請得加勢騎歩、貴久應求、遣新納伊勢守爲將帥、以騎士三十餘輩與歩卒一百餘員渡其島、同閏三月四日、各往坊津、同六日、解纜發遠帆、其夜著硫磺島岸、繫纜、翌日、渡屋久島、于時加賀守惠時出奔來曰、三島^{種子・屋久・永良部也}、難

得擁持、共以宜獻貴久、雖然貴久未嘗貪人之所有、且復令惠時父子成和睦之儀以歸其島、而後渡彼島所救難之士卒悉歸帆者也、匪啻成和睦、三島共以如元畀惠時父子也、惠時父子思其恩惠之厚、高於山深於海、是以子來心服、且誓神明裁一紙曰、永抽忠貞、敢不可背、而敬戴厚於父母矣、爾來種子島之安固如磐石也、

2428

『箕輪伊賀記』

一同三月末ニ種子島父子就不快之儀、左近太夫直時ニ爲

〔天文十一年也〕

與力、根占右近太夫重武卒軍兵、彼嶋へ雖被押渡、依難成、無程歸帆セラル、直時類ニ貴久朝臣ヲ奉憑之間、

新納伊勢守ヲ爲大將、各侍三十餘人都合二百餘騎、閏

〔本ノマ、有侍カ〕

三月四日、坊津へ馳下リ、同六日ニ出船シ、其夜ハ硫

磺島ニツキ、次ノ日屋久島へ押渡ル、種子島重時モ屋

〔直カ〕意〕

久島へ押渡リ、三嶋ノ格護ナリカタキ之間、貴久へ可進上ノ旨雖被申、重時和談ノ上ハ不及違儀トテ、兵船皆々被催歸帆、其時種子島父子御芳恩不可忘却トテ盟誓ノ血判ヲ被獻ト云々、

2429

『喜入譜忠房傳抄』

2430

『貴久公記』

天文十一年壬寅、梅岳君如生別府、既而還伊集院、及公慮生別府挾乎敵間、竟難善保、而與列相議召善久於伊集院、使忠房說善久、且去城邑、移於谷山、以避其難、忠房亦私勸之曰、惟命是從莫如蒞時、善久從之、於是十二月六日、公賜本田董親小濱等四十四町、令益勵忠矣、

一天文十一年壬寅三月廿三日、種子島親子儀絶ニ就、直

時根寝方ニ与力シ、卒軍ヲ雖押渡、依難成、無程被打

歸、然處ニ惠時類ニ貴久様ヲ被頼間、新納伊勢守爲大

將、面々卅人都合一百餘之番衆ヲ被指遣、閏三月四日、

坊津へ下、同六日出船、其夜ハ硫磺嶋ニ着、次日屋久

嶋ニ着岸ス、惠時從種子島屋久ニ被落來、三嶋之格護

難成間、屋形様へ進上之通雖被申上、惠時入部之上者

無別之儀とて、番兵之人衆歸帆ノ刻、種子島父子於自今

以後、御芳恩之事故忘却間敷トノ神判ヲ以進上申と云

々、〔下文末ニノス〕

2431

『北郷忠相譜中』

天文十一年閏三月三日、散北原領森田及兒玉口西柵之麥

2433

『庄内平治記』

作、志和池城兵出西柵之邊雖防戰、追入城中、同月二十三日、散北原領山田・木野・牛谷之麥作、時計敵三百人寄來、有矢軍、敵敗退于霧島、同三十日、豊州出軍於肝屬氏之領蓬原、依之乞援於忠相、忠相俾北郷左馬助率多勢爲豊州之援助、兩家之軍勢於蓬原搦手鹿野屋合戰、禰寢兵士等敗崩、園田將監・禰寢八郎左衛門尉・同長門守戰死、其外兵率死者五十餘人、

同年六月十八日、忠相之領梶山・勝岡之兵率、欲亂入于北原氏之領志和池、志和池之兵亦向勝岡出、梶山・勝岡之兵迎擊于平江焉、得首級十七、殘黨盡追入於河、時夏潦數日河水甚漲、故溺死者不知數、

同日、豊州出軍於平坊、乞援兵於忠相、依之北郷信濃守率二百人而出張矣、

2432

「北郷持久四男辰久猶子信濃久隆譜中」

天文十一年壬寅六月十八日、豊州家出軍於平坊、時乞援兵於忠相、依之久隆率二百人之勢、出張于平坊、勞軍務矣、

2435

「北郷忠相譜中」

天文十一年七月四日、忠相發向于志和池、於三口合戰、

2434

天文十一年壬寅

一天文十一年六月十八日、忠相の領梶山・勝岡の軍兵共、北原か領する處の志和池ニ向て相働く折ふし、志和地の城よりも北原か勢共勝岡ニ向て押寄るニ、忠相の軍兵等平江ニ而相接し、互にそれとそ見るより早く抜つれて入乱れ、追つまくつゝ責戦ふ、北原か臣十七人忽ニ討れけれハ、殘黨即時ニ敗北して散々ニなつて曳退く、折節霖雨降つゝき夏潦夥しく漲り來て流水大ニ深かりけれハ、途を失て逃る勢、河水ニ押流されて溺れ死するもの數をしらす、同日島津豊後守平房ニ出張して加勢を忠相ニ請れしかハ、北郷信濃守を大將として、二百餘人を差遣し豊州の助成をなす、

八月十九日、或作廿日、北郷又五郎久厦臣にて伊東北原か又高城を攻るを拒き戰て 死、右の郎從にて死之、太郎介の戰死 織部、ハ庄内志和地ともあり、考を缺

十二月、小松某、北郷忠相臣にて庄内山田城にて戰死とあり 間歳、小杉某、以下六拾三人戰死、年月缺考

首級者多、中間岩本新兵、衛分捕、軍終後豊州援兵武藏守日置四郎左衛門來于茲、

同年八月二日、忠相出兵散北原氏之領木野・牛谷・楠牟禮作毛而退、北原之勢自眞幸馳來、與志和池之兵合追及薄谷、忠利之兵相返、於丸谷河鱸、討北原之兵四位助七・田上治部・紫尾田孫七・出家一乘坊、家臣山内勘解由・栗燒與一左衛門・加藤勘解由・華英某・山内助四郎・葛城志摩允有戰功、

同年八月二十日、伊東・北原率大軍再到忠相領高城、盡薙作毛、及晚將歸、時城中兵發出而挑戰于小山河原、忠親自都城出兵、從寶光山挾討、敵軍雖爲多勢、失行乍敗北、討殺北原家臣志和池城主白坂下總守・栗野地頭澁谷兵庫頭、且追逃走之敵、及志和池城下、得首級七百三十、此時北郷又五郎久屢抽戰功、家臣馴松太郎助戰死、

2436 「北郷尾張守忠親譚中」

天文十一年八月、伊東・北原襲高城、忠親從都城出兵、自小山寶光山攻敵將陣、得勝利、此時所獲首級委在忠相之譜、

2437 『庄内平治記』

一同八月二日、忠相味方の兵を出し、北原か領地木野・牛谷・楠むれの作毛を散せしむ、ときに北原か軍勢眞幸より馳續く志和池之勢と一ニなり、忠相の勢ニ掛合ぬ、多勢ニ無勢の事なれハ、味方の勢叶わずして高城へ曳退くを、薄谷迄追掛たり、爰ニて味方返し合せ北原か勢と戦ふ、丸谷の川鱸にて四位助七・田上治部・紫尾田孫七・古川の出家一乘坊を討取る、味方ニ山内勘解由・栗燒與一左衛門尉・加藤勘解由・花房三河・山内助四郎・葛城志摩允等ハ簇る敵ニ打て入、各分捕高名せり、

2438

『全』

一 忠相ハ高城ヲ居城トして、息男左衛門尉忠親ハ都城ヲ本營として兵馬の權を□いへとも、伊東・北原ハ其威風にも應ず、邊境を奪ヒ地を略す、頃日伊東・北原を語ひ、忠相の領燒なる春穰の作毛ヲ三年かあひた雜程ならハ、三俣ニ籠る者共ハ、疵なき死をなすへきと動も兵を出し、作毛を削る事更ニ防禦の暇なし、其比伊東か領地ハ城の者共忠相ニ意を通して、蜜に忍ひの兵

を以て忠相に注進す、其趣ハ伊東・北原一判して三侯の作毛を薙へきとの評議一途に窮れり、其時ハ何某等催促ニ隨て志和地ニ到るへし、三侯寄と風聞せハ白葛衣を二ツ程内城の郭外ニ晒へし、是を相圖の驗として、御用意可有候と蜜ニ注進したりける、扱こそ三侯の忠相ハ高城田間に遠見を出し、志和地の相圖を待れしに、八月十九日ニ相驗し見へたりける、去程ニ忠相敵の寄と心へて、息男忠親の都城ニ居られしに、早速ニ使ヲ走せ、敵の寄るを待居たり、明れハ廿日兩家の大勢高城に押入、作毛を薙んとす、忠相の臣有田加賀黒の駒を賜て、敵ちの境ニ乗出し、敵の分限を窺ひ見て馬引返しいふやう、敵ハ目ニ餘る大勢也、味方の小勢争てか防ぎ留へき、楚忽ニ掛て戦わへ、敵軍勝ニ乗へきと、暫くおいて氣を見よと、味方の兵を制しける、忠相ハ元來敵の多勢ニ氣を吞れず、少も屈せぬ丈夫にて、大手の口より打て出馳向んとの氣色見へしを、有田加賀等を初味方の兵ニ制せられ、是非なく馬ハ鼻を歸しどふの川に扣らる、去程ニ敵の勢春日田間の作毛悉く薙捨、敵の出合ぬへ、味方を畏るゝ處也と勢ひ猛ニ衝て、兩家の大勢差つとい、酒多んしてこそ遊ける、日巳ニ

斜也けれハ、曳退んと色めきあふ、有田加賀是を見て時分能ぞ、早つゝけ打て出よと觸渡す、忠相も時刻ハ今そと味方の勢を左右ニ隨へ、兩家の勢ニ突て掛る、角て寄手の大將ハ楯の羽を突並、鎗を揃て相待處ニ、忠相諸兵を進めつゝ、敵の多勢ニ亂入、小山川原を縦横に追つ返しつ責戦ふ、長男左衛門尉忠親兼て調イ合たれハ軍兵を相催し、寶光山ニ備を設ふけ、時分を見て、此方より眞騫ニ打て掛る、高城の兵勢を益し、吐氣の聲を作り掛り、兩方々挾て息を休す探たりける、敵軍多勢たりといへ共、頃剋ニ戦負て右往左往ニ引退く、北原か□の臣志和地の城主白坂下總守某を木田市兵衛打取る、又北原か鎗大將栗野の地頭澁谷兵庫始として、志和地の城下ニ至迄北を追ひ、北を奔て以上七百三十人暫時の間ニ打取りぬ、このとき、三男又五郎久夏の武功世ニ趣たり、味方副松太郎介并郎織部と云者一處にて打死す、其外敵と味方の勢甲を双、鎧を連て野原の露ニ身をさらすは哀なりしか分野也、志和地の荒人大明神ハかの白坂か靈を祭て今に絶せぬ事とかや、有田將監か記處の書ニハ、白坂下總守を勝岡の足輕市來隼人佐滿行但馬打取といへり、副松氏か子孫に

『菱輪伊賀覺書』

一 同十一月廿七日、入道日新・貴久朝臣樺山安藝守範久

〔天文十一年〕

ニ被仰遣、近邦ノ凶徒等、彼小濱ノ城ニ寄來ルコト度

々也、如今若有失利、昔北狄侵周大王去周遷邠、遂持

天下事ヲ得玉ヘリ、其上柔ハ却テ勝強ト云ヘハ、暫去

此地、令休凶徒之情欲、待時之至、不如討之ト宣ヘハ、

安藝守、十二月六日、本田ニ即此地ヲ被去渡、然間大

隅國內之士大凡莫不爲本田家臣、夫ヨリ雖奉服貴久、

恣誇榮花、窮驕而已、

『貴久公記』

一 其後彼凶徒等蜂起シ、此城下ニ寄來ルコト數度也、然

傳ふ處ハ、兼て忠相諸臣を集め軍事を評談するの時、

馴松太郎介と何某と一致して申やふ、今度伊東・北

原高城ニ寄るニ於てハ、某等相謀り、敵の勢に紛入、

彼白坂を討へしと、果して合戦の日至、敵軍ニ交入

り、馴松則白坂を討其場ニて打死す、故に白坂カ靈

馴松の子孫を惱す、依て今ニ至て彼荒人大明神を馴

松家より祭といへり、共ニ此書の説ニ違ふ歟、

後入道殿・貴久様安藝守ニノ給テ云、天ノ時者不如地

利ニハト云々、其上勝柔却強シト謂ヘリ、暫斯地ヲ去渡

凶徒令休鬱憤、以次不如討センニハトテ、雪月六日小

濱之城ヲ被渡本田、然間隅州内之侍一人トシテ莫不御

家臣、抑此貴久様者、先年虎壽丸ト申セシ時、既雖極

守護位、勝久同讒佞之輩ニ被悔、遠天ニ誠不儀、助道

理故乎、貴久様再領國ヲ給、雖然居シテ謙ニ施仁恩、

責己〔本ノマ〕駐礼儀故未稱守護、

『玄佐自記』

一 安藝守も深手負、其比働不達者に、伊集院へ安藝守可

參承、さてハと參上之處、日新様・貴久様・御老中其

外御家景之人衆以相談、日新様別而喜入式部太輔殿御

使ニ而、生別府御番今分ニテハ難成、一涯身上を取延、

可待時節、於其儀者御家景之衆所領進上〔をイ〕、當日生別府

の田代を合給ふへき之御意趣、式部太輔殿も日新様可

任御意之旨也、安藝守抛一命も御奉公、後日御弓箭之

御手立に可罷成事、何共御父子御老中之御分別之外別

儀有間敷のよしを申、扱は何方へ城を可渡かと承、安

藝守ハ御父子へ上申まで、何方とは不存知と申、時こ

2442

くは御談合と承時、扱はと申上、本田當敵なれハ、本田へ被下御頼之由候ハ、可令御奉公、其刻も加治木・祇容院ニハ可爲隔心、無程大隅可乱と申上候時、けにもとて其分也、安藝守小濱・堅利・日置・山名・中野・東之別府・楠原也、七拾五町此打替御家景在と所く七拾五町は初より拜領也、御坪付于今拜領す、扱本田生別府を被下、無二之御奉公なり、義久様御元服をも北郷讚州江申調へなど、今ハ實久之御事打忘けるかとそ、人心移安く、三ヶ國本田殿へと無雙人なれば、〔生別府へ取懸し豊州・北郷・赤穂等ノ十三人也〕十三人のくも古さけ緒にや切々になる、

〔正文在本田作左衛門宣親〕

条々

- 一 如承候、從此方も聊隔心不存候、於御丁嚙者、向後可頼存外、不可有他事、
 - 一 此前栂山殿隣所之間、雜説之儀、我等少も不致同心事、
 - 二 諸家此方江可被取懸時者、捨有間敷之由承候、祝着之至候、萬一其方難義之節者、見續可申事、
- 右此旨於偽申者、

奉始上者梵天帝釋、下者堅牢地神、惣者熊野三山大權現

2443

天文十一年十一月廿日

一 一所衆三献之事

- 川上殿 新納殿 右馬頭殿 佐多殿
- 右四人しき三こん

- 北郷殿 栂山殿 穎娃殿 喜入殿 比志嶋殿
- 豊後殿 敷根殿 種子嶋殿
- 右之御人數者古鉢三こん

入来院殿

右者澁谷三献也、

- 吉利殿 根占殿 肝付殿〔兼統〕 菱刈殿 伊地知殿〔重武〕

彦三所權現、當國鎮守開門正一位 新田八幡大菩薩、別者當所鎮護諏防上下大明神 天滿天神 稻荷五處等御對可罷蒙者也、仍起請文趣如件、

天文十一年壬寅 霜月十三日

〔此年御年二十九才也〕 藤原貴久〔花押〕

本田紀伊守殿〔重親〕 御返報

〔上書〕 本田紀伊守殿 御返報 貴久

〔貴久公御譜中ニ在リ〕

〔上包裏ニ有之〕 三郎左衛門尉

右之御人數者三ツ肴三獻也、

御老中

右者三ツ肴三獻也、

諸地頭

右者けつりものにてかすのかわらけ參候也、

國衆使之時

右者けつりもの但ひら折敷

談議所

右者先茶子參三はんでんしん吸物ニ而御參候、

但かわらけ盃也、

福昌寺

右同、但天目にてうけ酒參也、

道場

右同、但かわらけ盃也、

2444 「正文在本田作左衛門宣親」

大隅國之内小濱名六町・同城付怒久見田十貳町・西郷八

町・小田名六町・加治木郷之内日本山名十二町并加河限

之外諏訪山懸前後在之、右都合四拾四町之事、爲奉公賞

處宛行也、早任此旨、可被領知之狀如件、

天文拾一年十貳月六日 貴久(花押)

本田紀伊守殿

「上包」 本田紀伊守殿 貴久

2445 「新納氏庶流四郎左衛門忠充譜中」

「案文在新納三河忠徳入道楚三」

去大永七年^{丁亥}、依隅州亂劇、本田方爲與力、於社家遂合

戰、御神敵罷成、依其咎、新納之家風如此候、古語云、

例地者依地生云、然者 正八幡大菩薩以御哀憐、此家可

繁昌事無疑者也、抑爲清御寶前、就百度之御被之儀、澤

殿頼入候、依 御神徳安千代丸分限罷成候者、應田數御

供米可致進獻也、仍願文如件、

「正カキ」 天文十一年^{壬寅}十二月十五日 藤原安千代丸

正八幡願文

草案

2446 「國史 卷十 大中公」

十二年癸卯春正月二十四日、北郷忠相復取山田城、使族

人圖書助忠茂守之、^{據島津支流系圖、原書忠茂、北郷敏久第三子右馬助近久之孫、}伊東義祐軍

於瀬平、島津忠廣使家臣某據鶴戸山城以禦之、義祐進至

烏帽子形、攻鷯戸山城、三月十八日、拔之、據島津內 膳家譜、夏

五月九日、北郷忠相與忠親攻志和池城、十一日、陷之、遂

取其地、據島津支 流系圖、秋八月二十五日、蠻商漂到種子島、種

子島惠時與時堯觀之、直時更 名時堯、有持火器者、其制以鐵爲管、

以架承之、管長二三尺、中爲竅、外爲藥池、與竅相通、

而微火纜及藥池、雷動電激、鉛彈迸出、所中皆穿、乃鐵

砲也、時堯見之謂、此物可以爲軍國之利用矣、乃從蠻客

求之、獲其一、又使家臣篠川小四郎受火藥法、根來寺杉

坊聞時堯之獲是器也、不遠千里而來、求之甚切、時堯乃

以其一與之、明年蠻客復至、使金兵衛清定受製造法、命

鐵匠造此器若干、和泉堺浦商客橋屋又三郎寓種子島、善

學此器、比其反也、時人號爲鐵砲又、畿內畿外從學其術

者漸衆、又種子島家臣松下五郎三郎飄流抵伊豆州、五郎

三郎善鐵砲、以授州人、據南浦 文集、而杉坊以其伎、傳北條氏、

據本朝 軍器考、爾後鐵砲遂行於天下、據南浦 文集、鐵砲一名鳥銃、見名物 六帖

或稱種子島、據本朝軍器考、軍器考引八幡愚童訓、太平記等云、鐵 砲之名見於文永年中蒙古之難、然當時稱鐵砲者、如宋

時旋風單稍虎蹲之屬、蓋與後世鐵砲異製、按鐵砲鳥銃之名、出於經國雄 略何氏兵錄等書、且稱中國原無此器、傳自日本、而明王鳴鶴登壇必究云、

鳥銃出嘉靖間、最猛烈、是和人用以擊技巧、中國習之者也、由是觀之、 鐵砲鳥銃者明人之所名、種子島即和人之所名、但此器也、本出蠻國、應有 蠻名、而種子島時堯之始得此也、曰、火器長二三尺云云、蓋初見其物未 識其名、不知當時呼爲某物、然觀橋屋又三郎有鐵砲又之稱、則鐵砲之名 播於日本也、去此年亦不遠矣、軍器考又引諸書、論鐵砲行日本事、其說 甚長、茲不復贅、鐵砲南浦文集作鐵炮、今從軍記考、經國雄略等書、按字

書、炮、炎肉、砲、機、入來院重朝自誇功伐、侵掠城邑、重朝 取百

石、作砲、於義爲長、次城、隈之城、重朝者、公之夫人之兄也、屢加戒諭、弗聽、 及宮崎見上、

道路流言、重朝與東郷・祇答院等謀反、重朝訟於、公曰、

無之、公不省、據入來院 主馬系圖

2447 「北郷忠相譜中」

野之三谷城者自去大永三年以來、伊東雖領之、天文元年

忠相與豐州並北原氏合志、大破伊東、奪三侯之時、北原

成分取之地、然忠相與北原有隙、天文十一年十二月十六

日、遂降之、永爲忠相之領、使北郷信濃守父子守之、後

北郷三郎右衛門尉爲地頭、於此伊東之所構鳥越陣亦退散

矣、

山田城者元北原氏領之、白坂左衛門尉爲地頭、城兵釘村

伊豫守通忠相、終降、依茲忠相兵所守之、北原爲復我領、

率大軍而陷之、地頭小杉氏以下六十三人枕城、從是北原

遠江守爲城主、天文十二年癸卯正月二十四日、忠相再攻

落之、殺遠州、使北郷圖書助忠茂爲地頭、從此永爲北郷

氏之宋地、

2448 『庄内平治記』

一夫野々三谷の城と云ハ、去ヌル大永三年ヨリ已來、伊東
 か領地タリト云ヘトモ、過ニシ天文元年ニ忠相・豊州
 北原ニ互ニ心ヲ一ツニシテ、大ニ伊東カ軍勢ヲツヤシ、
 八ヶ外城ヲ責取シ時、北原カ分取ノ地タリト云ヘトモ、
 頃年忠相北原ト互ニ讎ヲ挟ミ、刃ヲ争フノ節ナレハ、
 自他ノ改變定リナシ、終ニ天文十一年十二月十六日、
 又野々三谷ヲ攻落シ、忠相ノ領地トス、故ニ北郷信濃
 守ヲシテ彼城ヲ守ラシム、尤其後北郷三郎右衛門地頭
 となつて是を守る、是ニ於て伊東カ構ふ鳥越の陣も退
 散ス、此鳥越といふハ天文ノ初ツカタ、北原構て城と
 セリ、同十年伊東某北原ニ与カシテ此處ニ陣ヲ張ル、
 同十一年又構ノ處ニ、同年五月六日、忠相高城ヨリ兵
 ヲ出シテ是ヲ破リおるといへとも、同月廿九日、又北
 原カ志和地ノ人數ヲ出して是を構ふ、然といヘトモ、
 忠相野々三谷を攻破て北原カ勢滅せしかハ、伊東も是
 ニ氣撓て鳥越の陣ヲ退散ス、

『全』

一山田ノ城ハ元來モ北原カ領地ニテ、白坂左衛門尉地頭
 と成て守リシニ、釘村伊豫守ト云ル者、忠相ニ内通ス、

故ニ忠相輒ク彼城ヲ陥レテ味方ノ勢ヲ籠置れしに、北
 原讎ヲ忘すして、大軍を引卒、終に是を攻破り、地頭
 小杉某を初、士卒六拾三人打れぬ、是より北原遠江守城
 と成て守る處ヲ、忠相又是を取んと思ひ甚深ふして
 霧島ニ祈誓し、且山田の住人桂木・安藤ニ頼て、山田
 之城を攻圍、同廿四日ニ至て再び城を攻落し、城主北
 原遠江守切て、一族北郷圖書介忠茂を彼城の地頭とす、
 此より山田ハ忠相の掌の内ニ入、是に依て、忠相霧島
 の權現ヲ山田ニ勸請し奉り、吉祥院ヲ建立し、山田内
 三町六反を神領寄付セラル、爰ニ勝岡の住人に南光坊
 と云者アリ、山田の城ヲ攻ラル時戰功莫太ナリケレハ、
 其忠ヲ賞セラレ、則霧島權現の神主と定られニけり、

『庄内平治記』

一伊東ハ猛卒の氣を振ひ、同十一年壬寅瀬平ニ陣を取、
 豊州の勢共ハ、鵜戸山ニ對陣を取て、伊東カ勢を防ん
 と、城戸逆茂木を堅く結び、矢倉をかまへて楯籠る、
 伊東ハ烏帽子形と云處ニ置て陣をこしらへ、山を薙、
 路を開て夜白を嫌す攻けれハ、終に天文十二年三月十
 八日ニ鵜戸山の陣没落す、爰にても又豊州の宗徒の一

族打れニけり、

「日向記云」

一天文十二年卯三月廿八日ニ義祐御出張有テ、鶴戸烏帽子形城郭、敵ノ強弱模様ヲ見計ヒ、近邊ノ山々ヘ登リ玉ヒツ、諸勢ノ手賦シ玉ヒテ、七重八重ニ取巻ト等ク相圖ノ貝ヲ立サセ、四方追手搦手一度ニ攻上ル、城中ニモ勇士多籠タレハ、左右ナウ攻入コト不能、去共伊東ノ猛勢同卅日迄唯責ニシテ攻登ル、カ、ル所ニ豊州方下田隠岐守、伊東方薩摩坊頼運ト互ニ組テ上ニ成下ニ成、岸一反計落ケルカ、何トカシタリケン、落ヨリ早ク下田ヲ組伏、則頸ヲ指上、此組ノ其内ハ敵モ味方モ拳ヲニキリカタツヲ吞、軍ヲヤメテ見物セシカ、隠岐討ル、ヲ見テ、敵ハ虚衰ノ色ニ成リ、味方ハ一度ニドット褒、エイヤ聲ニテ攻登リ、即時ニ彼城踏落、籠城三百人之内被討洩テ岩屋ニ逃籠待、嶋津次郎右衛門・梁瀬加賀守・同參河守・柏原備中守・祢答院筑前守父子、其上村田殿・河田源六ヲ始虜四十余人云々、

2451

三月廿三日、日高隠岐守種子島内城に於て戰死、以下數士同し。日高五郎實高・同從僕二人、國上九郎・鮫島圖書・日高甲斐・有留伊賀・長野平左衛門以上子孫皆種子島に有といふ。

三月晦日或十八日ニ作る。下田隠岐守豊州家の臣にて鶴戸山城の陥る時伊東義祐の兵と烏帽子形に戰ひ、死之、他死傷多し。

2453

「北郷忠相譜中」

天文十二年癸卯五月九日、忠相率數千兵攻志和地城、原北領之、都城野之三谷勢向于柳川原口、安永・山田・財部兵入于幸祥寺口、高城・山之口兵入于羽田口、梶山・勝岡勢向于今栴、時忠相先登破新城、都城兵聞之、乃附西栴岸、懸橋破西栴、時忠相住于高城、息忠親居于都城。財部兵渡蓮池、討自西栴籠本城敵、翌日城主乞降、同十一日、下城、北郷又五郎久屢有武略之功、

2454

「北郷忠親譜中」

天文十二年五月、攻北原領志和池城、忠親率都城之兵、切入西栴、忠親之兵依射火箭、城内不怵乞降、依是暫留箭之處、城兵變約、又防戰、家臣島某懸橋上屏、從是衆兵各進著屏、城内遂降、同月十日、伊黒丹後・有田加賀

爲使入城、翌十一日、小杉右近・蒲生式部少輔請取城、
忠相・忠親入城有祝儀、從此志和池永爲北郷氏采地、委
在忠相之譜、

2455 「北郷氏庶流系圖中」

讚岐守忠相之三男

久厦

又五郎 藏人

天文十一年壬寅八月二十日、日州三俣院高城小山合戦
之時、抽戦功、翌年癸卯五月十一日、忠相陷日州志和
池城、是久厦依粉骨也、是故舍兄忠親賜感狀、剩三俣
院太郎坊村所宛行也、有正文左記之、

2456 今度就弓箭、於高城合戦、被抽粉骨候、兼又志和知之事

連々以武略輸入手候、兩度之忠節無比類候、仍爲忠賞三
俣院太郎房村所宛行如件、

天文十二年卯癸五月廿七日

(北郷)
忠親(花押)

北郷又五郎殿

2457 北郷讚岐守義久六男

右京亮義知 — 右京亮久珍 — 右京進久尋

三郎左衛門久文

天文十二年癸卯五月、忠相攻落志和地城、移久文而
爲地頭職、

2458 『庄内平治記』

一忠相ノ武威國內ニ振フニ依テ、隣境普ク掌握ニ入スト
云處モナシ、都城安永ハ高祖ノ領地たり、山田・財
部・野々三谷・高城・勝岡・山之口・梶山等の諸城ハ
皆忠相ノ筋力ニ依テ服シ來ル處ナリ、此ニ北原カ一族
の楯籠ル志和地の城計こそ、いまた忠相の手に屬せず
して、動すれハ、讎をなす故ニ、忠相數千の兵を卒して、
天文十二年五月九日、志和地ノ城ニ押寄せ、四方ヲ圍
テ挑ミ戦フ、息男尾張守忠親も都城の兵を卒して志和
地の大手ニ打向わたるとの勢に、野々三谷兵相加て、柳
川原口に責寄ル、安永・山田・財部の兵ハ幸祥寺口よ
り切て入、高城・山之口の勢ハ羽田口に押寄る、梶山・
勝岡の軍兵ハ今梶口に責近く四隊の陣の相圖を定め、

息をも休す揉たりける、時に忠相先登ニ進んで、新城を攻破らる、忠親の勢是を見て西柵に切て入、火箭を放て城を燒、城中の者共叶かたきとや思ひけん、暫く矢軍を止られよ、速に城お下り、忠相の手に屬せんと乞ふ、誠そと心得て、暫く軍を留しに、燒處を取しつめ、武士の楯籠たる要害を左右なくすつやある、太刀の柄まで請取れと高聲に匍る、寄手の勢是を聞て責載ふ、忠親の巨嶋某西柵の岸に梯お掛て屏の上に責登、残軍勢我劣しと屏を乗越攻入れハ、西柵ハ破れける、是を見て財部之兵共、蓮池を渡て西柵ハ本城の敵お射る、實ニも一陣破ルレハ、殘黨全からさるらい城中遂ニ力盡て、翌レハ十日、城中ハ乙守柚木の某を出して忠相ニ降を乞ふ、味方よりも伊黒丹後・有田加賀城内ニ入て諸事を決し、同十一日未の刻、蒲生式部少輔・小杉右近城を受取、忠相も忠親も城中ニ入て軍の勝利を祝せらる、初献の酌ハ小杉右近、二献ハ土持民部少輔、三献者和田宮内少輔、一族諸臣下殘なく皆盃をたふてけり、殊ニハ今度の忠賞とて高木村を配分して島某に賜ひける、其外戰功之品に隨ひ三將恩賞ニ預りき、この時三男又五郎久廈の武略世に超て、拔取の劫をゑ

るもの也、此より志和地の城も忠相の掌握ニ入て永く北郷家の領地と成、

2459の1

『勝岡諏訪大明神棟札』

抑當社諏方大明神勸進之由來者、野々三谷從當方被渡伊東江刻、如安永奉抱畢、其後當城之爲鎮守奉崇、然者去歲天文十二年十二月十二日云々、

2459の2

野々三谷有知行、依爲本所、令還着、又伊東代造立之、御本地當所江奉抱旨如此云々、

天文十二年正月十八日遷宮畢、

地頭 和田越後守

2460

『日向記』

一去間島津豊州忠廣出城、鶴戸烏帽子形被攻落シ更ヲ不宣被思ケレハ、【天文十二年也】同年七月、志布志ノ大陽寺ノ住持好意ヲ爲使僧、豊府ニ上スル、油津ヲ七月五日ニ出船シテ、七日ニ東海ニ着、同十四日、府内ニ着テ、同十六日、大友修理大夫義鑑ニ對面シ、伊東・嶋津和陸ノ取組ニテ、彼地ニ得滯留シカトモ、無更不相調、同年九月廿

九日油ニ歸津ス云々、

2461

追而此前珠玄与風參越、万辛勞不及申候、次之時御心得可然候、

如承候、從此方者連々無沙汰之至非本意候、依此境無恙儀候、就中鹿預送候、祝着候、万期後音之時候、恐々謹言、

〔朱カキ〕天文十二年也、十月十二日ニ鹿一丸并ニ状サシ

上候、町田伊賀守殿へ當書之披露状御返札也
神無月十三日 貴久(花押)

〔重忠〕 本田紀伊守殿

御返報

〔上書〕 本田紀伊守殿

御返報

貴久

〔上包裹有之〕

三郎左衛門尉

2462

〔國史〕卷十 大中公 梅岳君

十三年甲辰夏、命絶重朝朝謁、據入來院、主馬系圖、山田忠廣獻 公

市成、據大中公舊譜、山田忠廣、聖榮子、按聖榮日記、文明十四年聖榮

年八十七矣、或疑獻市成者安、以賜肝付某、肝付氏與梅岳君爲姻

親、而梅岳君之攻市來也、遣兵助之、故賞以邑、據大中公

舊譜、黃套軍記、梅岳君長女適肝付河内守兼續、少女適肝付彈正忠兼盛、見島津系

圖、兼盛、越前守兼演子、肝付兼演遣兵、助梅岳君、攻市來城、見黃套

2463

軍記、而肝付甚兵衛系圖兼續傳云、天文十三年甲辰十二月、西侯知行、翌年乙巳七月、市成知行、則是賜兼續市成矣、而其事在十四年、大中公舊譜、黃套軍記則云、天文十三年賜肝付氏市成、即此年也、但肝付氏真詳爲誰、今因忠廣獻市成事、而連書之、且書其說以俟後考、秋八月十五日、夫人雪窓妙安大姉入來院、薨、據廟堂、冬十月、梅岳君賜伊地知式部大輔盟書、系圖、縫殿介重周次子曰筑前守重成、重成子曰式部大輔、名闕、閏十一月、公賜伊地知式部伊地知重周見上卷大永三年、大輔盟書、據大中公舊譜、是歲大友氏使定惠院和解島津忠廣・伊東義祐、不諧、據島津内膳家譜

〔忠將一流系圖〕

忠將ノ子

女子

入來院彈正少弼重豐室

天文十三年甲辰誕生、母佐多上野守忠成女、

重豐有女子無男子、故請以久二男又六重時而爲猶子、

連續彈正之家也、

右馬頭以久

守右衛門尉彰久

又六重時

北郷讚岐守忠能室

右馬頭忠興

『日向記』

一同十三年甲辰正月廿六日、義祐御馬ヲ被向既肥ニ入、東ノ内水尾ヲ陣ニ取玉ヒシカハ、忠廣ノ人數東ノ衆中ノ尾ニ小屋ヲ掛ル、忠廣被申ハ、山東ノ大軍ヲ院内ニ入テハ悪カリナン、和平ノ噁ノ手段ヲナセトテ、同二月下旬ニ忠廣爲使僧好意豊府へ上ツテ、同八月下旬ニ歸國ス、同十月八日ニ、大友義鑑爲使定惠院下向アリ、永慶寺ヲ宿トシ、十二月中旬迄滞留シ、義祐・忠廣和睦ノアツカヒ有、義祐宣ヒケルハ、如先規一所ヲ可被去渡由有シカハ、調義夏不成、同極月豊後ノ使僧モ歸リケリ、

『公』

一同年二月十二日ニ嶋津忠廣大軍ヲ發シ、賀久ヲ爲大將向陣ニ鬼ヶ城ヲ、同十四日迄ニ被取構由、水尾ノ番代ヨリ物内ニ注進シタリシカハ、山東ノ人數水ノ尾ニ驅集ルモ無限、義祐是ヲ見玉ヒテ、此多勢ヲ敵ニ見セ、敵ノ氣ヲ奪フ手段ニモヤトノ仰セニテ、鬼ヶ城ノ内陣ヲ擲置、同月廿四日、東大宮ノ邊ニ大軍ヲ下テ在々ヲ破ル、是ニ中ノ尾ノ敵ヲトロキケルカ、公ノ御下墨ノ

如ク、豊州勢色メキ立テ見ヘケル間、得タリ賢シトテ

中尾ヲ追崩シ、本城ノ圍迄踏破リ、名字ノ侍十四人、其外雜兵都合百卅餘人討捕、去共本城無雙ノ名城ナレハ、門一重ニテ支ヘタリ、忠廣カ人數惣門ノ出口ニテ、上原兵部少輔・吉武与四郎・長井圖書助ト云者共、命ヲ捨テ防戦フニ、重城戸ノ口櫓ノ木下ニハ、春成助七守テヨキ矢數ヲ射、故ニ落合新九郎ヲ始、山東ノ人數十人程ノ討死也、去間山東ノ諸勢ハ其儘高佐ノヤウニ引籠ル、然ルニ鬼ヶ城ノ人數モ、同廿六日ニ如本城退陣也、同六月廿九日、島津忠隅以計略、鵜戸山ニ伐入テ悉ク燒却テ、生捕十人、其外二人打捕ラル、然間同八月十二日、伊東勢出張而古市邊ノ古家ヲ放火シテ作難、其日ハ引退、

「瀬戸口伊豆入道覺書」

一同十二年甲辰の末なるに、水谷を陣ニ取、おひよりはを御覽してあまりに無念なればとて、同十三年乙巳二月十二日ニ鬼ヶ城と云所を向陣へそ取給ふ、伊東は是を見るよりも、同二月廿四日ニハ鬼ヶ城ヲは指置而、おびの町をそやぶりけり、其比おびの老中ハ御一家に

ておわします武藏守と申て、當若殿のおやといく時之奉行の事なれば、おびの人衆をめしぐして、都合其勢三百余騎鬼ヶ城へそ籠給ふ、しかれハおびハ不番にてたやすく町ハ破れけり、され共有合人ノニハ日置周防介を始として、新納清嵐忠勝公、彼忠勝と申ハ、志布志の里に御座有しを、いか成しやくい^⑧か出来なん、古豊州にはろほされ、古敵なれば忠廣を御頼にてましませバ、其比おびへそ御座有けり、扱忠勝ハ世ニこへて文武の人にてましませハ、其日の下知をそめされける、しかりとハ申せとも、かたき多勢の事成レハ、手本ニすゝむ者共、法師あまにいたる迄、其數あまたきりふせ、下かくひをそやふりけり、去れ共大手の口にてハ、上原式部か出合て合戦既に有ければ、大手ハふせきとゝめけり、扱口ミ方ミにて打取てきのくひ數五十人ニハ過ざりけり、しかりとハ申せとも、軍亂れ事なれば、實見する事もなく取みたしたる計なり、敵ハ其儘引ニけるか、鬼ヶ城へそ押寄る、彼鬼ヶ城と申ハ、兵者餘多籠つゝ、矢たねハたいてい有、さし取引取、矢ふすまを作りてふせきけれハ、ことくく手おいに成、かたきは陣へそ引ニけり、同廿六日ニハ鬼ヶ城をさしと

をり、高さを陣ニそ取ニける、武州は是を御覽して、

今ハならじとおほしめし、同廿九日之早朝ニおひの城へそ引給ふ、かたきハ是を見るよりもなのめならずによくびて、鬼ヶ城へそのりニけり云々、

2467 甲辰 天文十三年

四月廿二日、大地震、

2468 『庄内平治記』

一伊東弥勝ニ乗り、同十四年正月廿四日、水谷を陣ニ取、

既肥の者共是を見て、度々の軍ニ利を多すして口惜事

なりとて、「本文季直接ルニ、十四年ハ十三年ノ誤カ、瀬戸口覚書・日向記等モ十三年トアリ、是ナルヲ知ラス、後考ヲマツベン」同二月十二日、鬼ヶ城と云處ニ向陣を取て、

忠廣の従弟武藏守忠隅三百余騎にて楯籠候、伊東是を

見るよりも何かた既肥ハ無勢なるべし、この透を窺て

閑道より攻よとて、鬼ヶ城を差置、同二月廿四日ニ閑

道より攻入て既肥の町を打破る折ふし、既肥の執權た

る武藏守忠隅か三百余きを引具して、鬼ヶ城ニ籠居れ

ハ、既肥ニ勢こそなかりけり、思ひ掛さる伊東勢輒く

町を打破り、犬の馬場の板門までそ攻入ける、去共有

合人々ハ、日置周防介を始、新納近江守忠勝入道晴嵐、

『全』

此忠勝と申へ、島津家の貴族にして四代の太守忠宗の四男新納近江守時久ニハ八代の的孫也、家富勇々數かりけれ共、如何成宿意か候ひけん、古豊州ニ亡され古敵なれ共、其比ハ忠廣を頼ミ御座しか、文武ニ名を得し人なれハ、敵の多勢を引かけ、味方の小勢を勵して防ぎ戰とハいへ共、衆寡同からされハ、本より無勢の味方の兵、打るゝもの七十人、敵の勢競進て下柵を攻破る、去共追手の口ニてハ、上原式部か出合て命を限りニ戰へハ大手ハ防ぎ留けり、扱方ニ口ノノニて打取處の敵の勢五十人ニハ過さりけり、乱軍ノ事なれバ實檢するニ及ず取乱たる計也、去程ニ伊東か勢ハ飢肥の城より取てかへし、直ニ鬼ヶ城ニ押寄る、鬼ヶ城ニハ兵餘多籠て矢種ハ多し、射手ハあり、差とり曳つめ射る程に、寄手飽まで射しらまされ、忽ニ曳退き、同廿六日ニは新手の勢を催し、鬼ヶ城を差過ぎ、高さニ陣を取ニける、武藏守忠隅叶わしとや思ひけん、同廿九日の朝、鬼ヶ城を打捨飢肥の城ニ曳退く、伊東が勢ハ左右もなく鬼ヶ城を乗取て悦事ハ限なし、

2471

『感應寺文書』

普門寺住持職事、任先例、可被執務之狀如件、

天文十三年五月七日

左大臣義勝判

從薫西堂

『從薫ハ感應寺十五世ノ住持、自天文九至同十五住山七年云々』

2470

一同年十二月廿四日、飢肥郷之原の地頭羽島某味方を背て伊東ニ與す、豊州譜代の家臣として逆心を企ける心の内を洩ましけれ、

不存寄候處ニ預音書候、祝着不少候、此方無替義候、當日谷山ニ及罷越候、仍羊鈴珍物此事候、何様參會之節可

申承候、恐々謹言、

〔朱カキ〕天文十三年也、卯月廿一日御伏并鈴羊控可獻上ノ御返札也
四月廿貳日 貴久(花押)

本田紀伊守殿

〔上包裏ニ有之〕

三郎左衛門尉

本田紀伊守殿

御報

貴久

〔貴久公御譜中正文在本田作左衛門宣親ト記セリ〕

「貴久公御譜中 正文在本田六左衛門官親」

追而珠玄去月末之比者、雖待居候、于今延引、所存之外候、今月者被越候様ニ頼存候、

此前度之預音信處、祝着之至候、仍今程其境之躰如何ニ候哉承度候、此方無替儀候、就中來月可有越之由聞得候、大慶此事候、何様以面可申承候条、不能巨細候、恐之謹言、

「朱力キ」天文十三年也、御乳狀五月十四日ニ差上候也」

五月十三日

貴久(花押)

本田紀伊守殿

御宿所

「上包」
本田紀伊守殿

貴久

御宿所

「上包裏ニ有之」
三郎左衛門尉

「貴久公御譜中」

天文十三年甲辰之夏、山田加賀守忠廣大隅州之内獻市成領地於貴久、願肝付氏忠功之有所異于他、而直昇其地於肝付氏也、

入來院彈正少弼重聰或屢遣士卒助我軍勢、或自身帶甲青類務節義矣、老父日新齋能見渠之無偽心也、請女子之養在深闈、爲貴久之娶室家、而後廣昇土地曰、川内及伊集

院之内郡山共以使渠領知、由是挾狐假虎威之勢、通鑑曰、狐假虎

威、百、擅鯤變翼鷗之氣、莊子云、北海有魚、名曰鯨、變爲鷗、一日直上九万里、將亂於

作國中、故即削取郡山以懲其咎、雖然重聰不能改過、彌

增無道、與澁谷一族及蒲生氏・肝付氏・本田氏等俱謀、

而起跋扈之勇、丁此之時、唯樺山安藝守善久守隅州生別

符壘、而終不肯傾心於逆徒、其忠烈可謂砥柱中流、而不

惑者也、所謂國亂識忠臣誠哉、

「貴久公記」

一天文十三年乙巳夏之比、肝付方忠勤之志、依餘儀ナキニ、

同七月彼地ヲ被給、爰ニ澁谷黨之内、入來院者今度之

儀兵ニ馳兵士奉合力、或自甲冑ヲ爲枕、作忠故、貴久

公御内縁ニ定、有信者有德故、公之權威ヲ借、領仙臺

郡ヲ、加之感前功、伊集院之内郡山之庄被宛行、誇其

賞費前忠、内々乱國ヲ企事及度々ニ、爲ニ誠其罪、郡

山之庄ヲ被沒収、爰ニ知ヌ、過ハ必改不欲、剩澁谷黨

並蒲生・加治木・本田ヲ卒起乱、爰樺山安藝守者、隅

州之内小濱之城ニ有テ、彼輩ニ不組、忠烈之志無一也、

貞臣見國ノ危是也、「下文末ニアリ」

2475

『箕輪覺書』

一天文十三年甲辰夏之末、忠廣山田加賀守ナルベシ大隅之内市成庄ヲ貴久ニ差上ラル、曰ニ雖被収公、肝付依有忠勤之志、同七月、賜彼地也、

2476

『公』

一爰ニ澁谷黨ニ入來院石見守重胤、今度兵士ヲ馳セ奉合力、或自盡粉骨、致忠節故、貴久可有御内縁由被仰、既ニ御縁屬トナリ、有信有徳ト假君之權威、領川内郡、加之伊集院ノ内郡山ヲ充行ハル、誇其賞不遂前忠、内々企乱逆ノ由有其聞、故爲誠其罪、被沒収郡山莊、重胤於此不改過、剩相催澁谷黨・蒲生・加治木・本田等起乱、此ニ樺山安藝守而已、曾テ不與彼輩、忠烈之志無二也、忠臣ハ見國ノ危ト云是也、抑貴久朝臣先年爲忠兼之續子、雖被補守護職、忠兼被謀倭臣悔還之、然共天誠不義、扶道理故乎、遂ニ三州之武士奉歸服之、然居謙施仁恩、責己正礼義、此故ニヤ未稱守護、

2477

天文九年庚子四月廿二日、弓箭出來之已來、敵身形討死不知其數、就中同十一年八月廿日、於高城脚并小山合戰

2479

「貴久公御譜中」

天文十三年甲辰「本マ」 伊地知式部大輔殿

2478

「日新公御譜中」

「正文在伊地知筑右衛門」

一くりかへの儀得心候間、一所可進事、
一伊集院のあつかひ不事成候ハ、其方同意可爲事、
一世間如何様ニ候とも、きよこんあるましき事、
右此條とそむき候ハ、上てハほんてんたいしやくしたい天王、そうしてハ大小神祇、當所たかや八幡 吉田院王子こんけん 天幡大自在天神 若宮諸神等之御はつかふむるへき者也、

十月吉日

日新(花押)

天文十三年八月廿日 北郷 讚岐守忠相(花押)

大破之、至伊東・北原之軍衆五百余人討捕、得勝利早、爲其亡靈之、長田門施入高禰寺、末代不可有變易、右丹志之旨如件、

「正文在本田作左衛門官親」

(本文書ハ二四六一号文書ト同文ニシテ省略ス)

2480

「貴久公御譜中」

「正文在伊地知筑右衛門」

〔牛王〕

一世間如何様雖有雜説、對其方疎略之儀有間敷事、

一和讒凶害之時者互可開發事、

一於弥々不可有隔心之事、

右條々若有偽者、

上梵天帝釋四大天王、惣日本國中大小神祇 熊野三所

權現等、別者當國一宮開門正一位 仁田八幡大菩薩、

殊者當所鎮守智賀尾權現 九玉大明神 青劔大明神

新宮權現 諏訪大明神 稻荷五社等之可蒙御爵者也、

仍起請文如件、

天文十三年甲辰潤十一月吉日 貴久(花押)

伊地知式部大輔殿

「貴久公御譜中」

「正文在大口衆肥後助三郎」

〔牛王〕
起請文

前日以請文無二之通承候、一段之子細候、然者從此方

茂疎略之儀有間敷之事、若偽者、

上者梵天帝釋、下者堅牢地神四大天王、惣而者日本國中

大小神祇等、別而者當國之鎮守新田八幡大菩薩 開門正

一位、殊當所諏訪上下大明神 軍神摩利支天 天滿大自

在天神御爵可蒙者也、仍起請文如件、

十一月吉日

貴久(花押)

内山九郎左衛門尉殿

〔上包〕
内山九郎左衛門尉殿

〔上包裏、有之〕
貴久
三郎左衛門尉

2482

「貴久公御譜中」

貴久幼稚稱虎壽丸之時、雖得嗣子之位、勝久忽信讒佞之

言、而悔變前約、然而貴久天性氣宇軒豁、度量寬弘、以

故情意敢不困約、只慕前聖仁道、常憐鰥寡孤獨、而俟天

運循環時而已、此交不計國民之所歸伏、猶魚鳥之萃淵藪

矣、
異記曰、天文十三年豊後州刺史大友某遣定惠院住僧、島津豊後守与伊東某之為和平媒、雖然遂不成而徒歸國云云、

2483

「瀬戸口伊豆入道覺書」

〔十三年也〕
一十二月廿四日の事成ニ、郷之原地頭羽嶋殿と申て、と

し比の人なるか、すてニ野心をたくミて伊東方へそ成
ニけり、

2484 「國史 卷十 大中公
六 梅岳君」

十四年乙巳春正月二十六日、伊東義祐營於水之谷、將攻

餞肥、島津忠廣遣武藏守右衛門大夫 改稱武藏守 忠隅、據鬼ヶ城、分

兵守櫛間等處城堡、義祐徑襲餞肥、忠廣禦之、新納忠勝

來救、擊破義祐、忠勝居市木見上七年 是時、蓋自市木來救、義祐又攻鬼ヶ城、不

克、退屯鷲樓、二十九日、忠隅還餞肥、義祐取鬼ヶ城、

據島津内膳家譜、壹岐彌四郎家藏文書、伊三月十八日、島津忠廣東義祐取鬼ヶ城、在天文十五年二月九日、

北郷忠相朝 公於伊集院、據大中公舊譜、島津系圖、島津支流系圖、是時強宗大族各據城邑、

營立家門、不復知有公室矣、而忠廣、忠相乃朝公於伊集院、志可嘉也、但舊譜·支流系圖等言復立大中公為守護職者非其說已見上卷大永六年、而樺山玄佐自記云、不知者皆大忠廣·忠相定策之功、知者曰、大中公既已為守護職矣、又用忠廣·忠相策為、則當時已有知其非者矣、

四月十八日、公賜本田董親大隅國東郷·牛禰·邊田·

二川·堺等合二十四町之地、據大中公舊譜、郡村高辻帳、高山郷有邊田村、福山郷有境村、

公已絶入來院重朝朝謁、以懲之重朝不悛、秋八月八日、

遣兵攻郡山城拔之、據入來院主馬·新納左京系圖、大中公舊譜云、入來院重聰女為公之夫人、公賜重聰郡山、重聰挾狐假虎威之勢、擅賜變翼鷲之氣、將是歲近衛植家遣日野左大將亂於國中、故命取郡山城、與此異、

辨宰相、贈 公束帶衣服、據大中公舊譜、植家·基通十三世孫也、

據諸家知譜拙記、近衛基通許得佛公藤原姓、自是累世通家、且三百餘年矣、而此年植家遺贈公衣服者何也、觀其明年遺梅岳君書、豈以有求於公

故、先修舊好 通殷勤者乎

十五年丙午春二月二十九日、近衛植家遺梅岳君書曰、營

築之役既為 貴□所許、請君為我急之、據梅岳君舊譜、冬十二月

二十日、足利義晴讓征夷大將軍於足利義輝、據將軍家譜

2485 「貴久公御譜中」

天文十四年乙巳正月廿六日、伊東氏結陣於餞肥之東水谷也、

2486 「日新公御譜中」

「日新記有之」

加世田既入手裏、南方為平安之地、是以道路往還者無殺

戮之患、晝夜更莫止時、然而有一事之未慊心、阿多與加

世田之間、有大河之不能徒渡者、疾走速到、而欲成公私

之勤者、亦留河邊呼於渡舟移刻、居民上不止其患、則焉

得民之父母、已有長橋興作之企、營橫三間餘之長橋、既

終其功、則擇吉日良辰、請臨濟·曹洞·天台·眞言諸宗

數口於橋上、混雜讀誦法華、燒香師常珠寺七世後安和尚

也、讀經既終、則傍築大墓、建高顯樹、其文曰、

極聖自心無妙理 舉頭應化卽三身

大家莫道天真佛 本是山中一古樵

忍世界膽部洲大日本國西海道薩隅日三州大府君日新齋主掛冠於神武門以降、悟佛祖無上菩提心地、而離三界輪迴迷身、所以道鬚髮人之所重也、最先剃除、尊貴人之所敬也、儉約其身、然後準擬必芻、而勤修佛之四弘誓願久矣、一日忽然原乎衆生無邊誓願度之一句、而未來遠定彼岸現在、近定此岸矣、以四柱三萬六千地軸、而爲柱矣、以縱橫四十里劫石、而爲梁矣、世界平等、而爲橋板矣、以新定機而爲釘板矣、至万物一軀生佛不二之理、而畢功焉、弘誓之力偉哉、正當橋木梁供養之日、謹集山門列利之著宿、命眞言一宗之諸徒、而讀誦法華者也、竊以大願主藤氏 忠良公外施權情、內抱至仁、常樂我淨之四德、護連城壁、慈悲喜捨之三昧、轉大法輪智梯慈航渡驢渡馬、石橋略約度我度人、若向無寒暑處、則徧中有正、今當熱時熱殺、則主中辨資、赫赫大火欲西流、颯颯微涼拂暑塵、可尊當來福報奇哉、現成果因蘭盆已過秋旻時淳、雖然與麼卽令臨橋上底之一句子來耶、是不來是、

上不用諸賢利齋、下可受六道沈淪、

于時天文十四年乙巳初商日

大願主忠良合爪

2487 「北郷忠相譜中」

太守勝久公天文四年没落之後、國無主合戰不止、是以島津次郎三郎忠廣後守與讚岐守忠相胥議、招合同姓之家告焉曰、惟今三州無主、盡爲亂國、我憂之忡、是故謀立主全國、貴久公者曾受 前太守勝久公之讓、一任守護職、且有武將之器、嚴親相模守忠良入道日新公者文武兼備之良將也、使 貴久公爲 太守、日新公輔佐之、國家治平如指掌乎、如何、衆僉唯諾而領焉、以故忠相・忠廣各發居城、參調于伊集院、相議伊地知・本田以下譜代之家老等、天文十四年乙巳三月十八日、奉 貴久公、爲中興之 太守、

2488 『庄内平治記』

一三男修理大夫勝久御代を継せ給ふといへとも、政道正しからざる故ニ、三州の諸士歸服せず、竟ニ獨父と成果、他國ニ逃走し給へ、世の中も穩らず、兵革の断る事なし、忠久公より曰降、未た斯る例を聞ず、世の末とはいひなから浅間敷を覺へける、かゝりしかハ北郷讚岐守忠相と島津二郎五郎忠廣と申相儀し、同姓の家豪を集め故舊の臣を招て白、今三州ニ主なくして已

ニ乱國と成ぬる上ハ、鷓蚌の費ニ乘て害を吾邦ニ成すものはからざるに出来なん、吾儕是を愁ニ堪たり、故ニ今主を起、國を全せん事を謀ニ、相模守忠良の長男貴久主ハ曾て虎壽殿と申せし時、勝久公の讓を受、一たび太守に任し給ふ、殊ニハ將士の器備り叡智殆と類なし、嚴親相模守忠良入道日新公ハ文武兼備の良將たり、貴久主を太守と仰ぎ、忠良入道日新公を政道輔佐の師範となさハ、國家の治平掌を指かことく、逆徒の退散疑なし、このき如何候へきと諸人の旨趣を問れけるに、衆口同音ニ唯諾して、國家の安泰是ニ如しと皆人一致せしかハ、忠相・忠廣急ぎ伊集院ニ馳參し、伊地知・本田の舊臣其外譜代之家老等ニ相議し、又三郎貴久公を中興の太守と仰ぎ、天文十四年乙巳三月十八日ニ鹿兒府の城ニ移らせ給ひ、御名を三郎左衛門尉と改玉ふ、後ニハ修理太夫ニ任し、從五位下ニ叙せられ陸奥守とそ申ける、御剃髪の後ハ伯圀公共申、御諱ハ大中良等南林寺殿と稱し奉りし御事にてそ御坐ます云々、

『貴久公記』

2490

一天文十四年乙巳三月十八日、嶋津豊後守并北郷讚岐守其外一家國衆重代之隨臣各聚會シテ奉補任守護職、作其祝儀畢、古令尹之政必以告新令尹、其比京都從近衛殿日野左大辨少弼ヲ被下、相添玉札、御衣ヲ被送、則作守護祝之饗束、抑當家之曩祖忠久公作三州之守、薩府下向時、爲近衛ノ繼嗣、源ノ姓ヲ改テ爲藤氏如今也、冥符相合テ誠ニ爲甚深微妙之因縁、此貴久様之父祖者當家之統領一家之爲進士、隨天運存亡家臣ト成、捨權給事三四代也、天命落着此公、所謂天運循環往テ無不還、所以風不鳴枝、雨不破塊、既ニ經多年、「下文末ニアリ」

『玄佐自記』

一扱忠朝一子豊州は病者ニ而、右衛門太夫之子次郎三郎殿彼家相成「と」しか、北郷讚州伊集院江以參上、貴久様守護と可奉仰被申、不知案内の人々是をよろこぶ、其前勝久様御國讓之上は、今更事笑敷取持哉と傍におもふ者も有り、かゝる折ニも安藝守ハ老たる父母幼子共を引列、谷山福本に七年歴候間、懶事一夜白髪とのミ、古の賢人たと慰けるに、

『箕輪記』

一天文十四年乙巳三月十八日ニ豊後守忠親・北郷讚岐守忠相其外一門一家普代隨身ノ侍等參會シテ、貴久ヲ奉補任守護職、唱千秋、祝万歳、令崇之、古キ令尹之政以告新令尹、其頃從京都近衛殿、日野右少辨資方朝臣ヲ爲上使、被贈下玉札・御衣、則守護職御祝言ノ變束ト被成、當家ノ曩祖忠久朝臣爲三州之守護職、薩摩ノ國へ御下向之時、爲近衛殿ノ猶子、改源姓藤原、冥符相合テ誠ニ奇妙ノ因縁タリ、彼貴久者當家之統領爲一家ノ進士、隨天運存亡、捨權玉フコト今三四代也、天命落之、所謂循環シテ無往不復、此故ニヤ三州之太守ト成リ玉フモ理ナル哉、

『年代記』

乙巳 天文十四年

此年三月、大地震、時之内三度、又嶋津次郎三郎・北郷讚岐守同心ニテ伊集院へ參上ノ夏、三月、在所ヲ立ツ、同十三日、貴久ヲ奉仰守護、正月廿六日、伊東出張シテ、飢肥東ノ内水之谷ヲ陣ニ取、同二月十四日、鬼ヶ城ヲ向陣ニ取構、同廿四日、伊東又出張シテ本城

麓發向、彼鬼ヶ城廿六日ニ開陣ト云、

『貴久公御譜中』

一天文十四年三月十八日、島津次郎三郎忠廣豊後守・北郷讚岐守忠相及宗室貴戚等相議曰、立貴久於太守之位、則國家之享太平、可指日以待、而已立以爲中興之太守、稱三郎左衛門尉、屢免危險、倍遇祥瑞、非人力之所致、是實天也、丁此之時、近衛殿下種家使日野左大辨宰相界玉札及束帶御衣於貴久、所以領守護職之用變束也、傳稱、我之元祖 忠久主改惟宗氏、爲藤原氏者、調近衛内大臣基通從一位攝政普賢寺殿如斯、今也冥符相合者也、曾祖父相模守友久者、當家十代 太守陸奥守忠國之長子、而不續家統者依生他腹也、以故降而爲家臣、捨其權者已過三代、而今至貴久、始繼大統、實天運循環無往不復者也、州民之所仰戴、又是非天命焉能如此乎哉、

『瀬戸口伊豆入道覺書』

一天文十四年也、
同三月下旬之比、武藏守を始而大隅守其外曆々の人々終に留さいと成給ふ、其よりも忠親へおびの御番ニさ

しはまり、數年の粉骨となし給ふ、さて殿様へ如此爰より我等か有さまをはもしなから書はんへるや、さる程ニ豊州の御内ニ瀬戸口源兵衛・大中臣秀勝と云者あり、豊州の老中ニ日置周防介殿着子ニ美作守殿とてことに一人當千也、かの作州と同心してひはしらの合戦に一枕に打死ス、其年四十九歳也、さて又秀勝か先祖を委敷尋に、かミ大すミの住人に姫と申何かしなり、しくう神をつかさとり、國下を守るとかや、扱いにし村府中ヲコト〔國分ノ府中村ニ守君神社アリ、大隅州ノ宗社在古ヨリ建立此村府中ヲコトト申候、正字ハ國府ト書候由〕へより今迄もこくしかたけと申て、姫木の城のはつれにミへてたけの有けるへ、其時よりの事そかし、今瀬戸口と申者、忠國の御時瀬戸口名を給りて、其より申ならはしたり、扱其後ニ瀬戸口のおびへまいりし事共へ、豊州之御先祖に忠幸と申か、飢肥へ入部の御時御供申せし瀬戸口なり、さて又ゆらいは先おき、秀勝か子共ニ着子次男三男、以上三人有けるか、子細有て着子ハ親の跡をへつかざりけり、其おとゝ兄弟ハ鮫島ニ而ありけるか、三男の宗四郎十九歳の春の比、めいよの打死とげてあり、其をいかにと申に、梁瀬殿を始として、軍の望あるとていつれもはたちの内成か、三十人のれんはん衆一人みれん有ましと、かたく談合とけられけ

り、就中宗四郎一ふに我に打死と思定ける間、歌をよミ文を書、師將に念佛とこう母に芳恩を延、兄にいとまをこふ、ともたちに文書數々一とくるすに如此調て、一足はらすに打死す、時に天文廿年三月廿日也、

(本文ハ二五〇号記事ト同文ニツキ省略ス)

2495の1

(本文ハ二五〇号記事ト同文ニツキ省略ス)

2495の2

『本田氏藏書』

2496

大隅國之内牛祢三町、同城付邊田三町、二川三町、堺三町、合拾貳町之事、爲奉公賞所宛行也、早任此旨、可被安堵之狀如件、

天文拾四年卯月十八日 貴久(花押)

本田紀伊守殿

本田紀伊守殿 貴久

2497

『全』

大隅國東郷六町并日當山城用富名六町、以上十貳町之事、爲奉公賞所宛行也、早任此旨、可被安堵之狀如件、

天文十四年卯月十八日

貴久(花押)

本田紀伊守殿

〔上包〕
本田紀伊守殿

貴久

〔此三通、貴久公御譜中正文在本田作左衛門宣親トアリ〕

2498

〔貴久公御譜中〕

〔案文有之〕

就細子之儀、徳永次郎三郎指遣之候、如先例、可得叮嚀之事、可爲祝着候、仍太刀一腰進之候、聊表嘉例計候、

恐々謹言、

〔天文年間款〕

五月三日

貴久(花押)

種子嶋殿

2499

〔新納忠元譜〕

一天文十四年乙巳

大中公在伊集院時、入來院石見守重朝以其勇叛、恃勝

彌驕、將犯伊集院、八月七日、或作十日公遣兵、夜從

神殿襲郡山城、前此六年三月、大翁公所賜云、伊牟田左衛門等進入藏城、

城兵強拒我師却危、公乃遣忠元及南郷四郎忠□・市

來小四郎家□・春山越中守・川上十郎左衛門經久・野

2500

〔忠元弓箭覺書〕

間爲阿弥忠政・野村民部少輔是綱等急續攻之、忠元先登持槍格闘、與越中等入四郭、敵尚據城不能下之時、公親麾衆發箭如飛蝗、忠元・經久・忠政・是綱等奮進破之、忠元乃接山口某、刀戰斬首備之、公覽、八日、遂陷郡山城、此役忠元始從軍躬被槍創、時年十九矣、

一伯圍様伊集院へ被遊御座候時、郡山へ入來院殿格護ニ

而候處ニ、八月十七日之夜被召取候、其晚籠ニ而敵一

人打申候、内城の邊ニ而山口名字の者と渡合、刀ニ而

暫ク切合打取、其首、伯圍様懸御目ニ、其節鐘にて手

負申候、其時十九歳にて勿論初合戦也、

2501

〔忠元軍勢忠清申状云〕

一伯圍様伊集院に御座之時、郡山へ入來院殿格護之處、

年號ハ不相知候、八月七日之夜神殿より伊牟田左衛門

藏之城迄忍ひ入、敵つよきニより、其城一ヶ所にとり

籠居候を、伊集院衆二番衆ニ而被見積候、但南郷四郎

殿・市來小四郎殿、拙齋次郎四郎と申時闇之夜ニ走こ

み、くらの城戸之前のたれニ而少鐘候、鐘疵一ヶ所す

り手なるがゆへ、同心衆拙齋くらの城戸三重、本城戸四重取破、春山越中守殿被追付、同前ニ被仕候、内城さしこたへ候處ニ、伯圍様被成御出被遊上矢を御詰させ候後、川上十郎左衛門殿・前大爲阿弥・野村民部少輔殿・拙齋庭中ニ而、心々の合戦被仕、山口名字之者刀にて拙齋と暫切合候へとも、終ニかの山口拙齋討取、首を 伯圍様被懸御目候、

2502

「入來院石見守重朝譜」

一重朝近年伐取數多城邑、誇武、貴久公數戒教之、斯之時氏族東郷・那答院以下國人多叛逆者、重朝亦有同意之聲、於是數訴無叛心、不被免許、天文十三甲辰之夏、既被停止仕、加焉、翌年乙巳之八月八日、被攻取郡山城、此城去天文六丁酉三月十四日、勝久公所賜重朝也、

2503

「忠元勲功記」

一天文十四巳八月、大中様伊集院江被成御座時分、入來院石見守重朝叛逆ニ付、神殿村より御人數被繰出、郡山城被爲攻砌、味方及難儀、爲加勢先忠元等被差遣、

無程 御出馬ニ而 御直之御下知茂有之節、忠元先登ニ相進ミ、山口某与切合、其首打取奉備 御覽、其折郡山茂御領ニ罷成候、此時忠元拾九歳、初陣ニ而蒙鎗疵、右通功名爲仕由御座候、

2504

「殉國名載」

天文十四年乙巳

「季通按ルニ、忠元大永六年ノ生故、天文十四年ハ二十歳ニ當レリ、勲功記ハ父季安ノ編集ニ依リ誤ヲ記スナリ」

九月晦日、遠矢金兵衛良兼隅州岩銀城を攻らる時戦死、年三十七、以下同比志嶋河内守義弘・藤崎豊前守公範肥前公兼の子、義弘從卒とあり、家状に公範等十人許俱ニ戦死、此日の事とす、以、同し長山某・坂本某・中島某・坂口某・常波某・谷口某・山下某・竹之下某・横山某、十一月廿二日、遠矢對馬守重勝河邊に於て戦死とあり、加世田ニ於て此年、梶原備前守氏純加世田ニ於て戦死と有り、

2505

「正文在曾於郡花林寺」

〔上書〕「御曹子御モカサノ時御上ヨリ」

御立願文

伊勢太神宮

奉 御代參詣事

熊野山三社

奉御代參詣事

高野山

奉御代參詣事

新田宮

奉御代御神物可獻事

天満宮

奉御代御神物可調事

正八幡宮

奉御代御神物獻上事

右、爲疱災退治

御息災延壽、奉立願處若件、

〔此年爲中興太宰、御歳三十二歳也〕
藤原實久(花押)

天文拾二年十一月拾六日

〔貴久公御譜中ニ在リ〕

2506

〔豊州家忠親譜中〕

豊後守忠廣

忠親

尾張守 豊後守

忠廣依無世子爲猶子、實者北郷讚岐守忠相長子也、十有餘年務北郷氏家督之後、忠廣強請爲後嗣、故不得固

辭、而天文十四年乙巳十二月十八日、移于飢肥本城、

連續當家者也、

2507

〔北郷時久譜中〕

天文十四年十二月二十三日、豊州家臣羽島氏在飢肥郷之

原反心、翌十五年正月十九日、爲忠親之援、催莊内之兵、到郷之原討敵五十餘人、

2508

〔日向記〕

一嶋津忠廣方ヨリ出城トシテ、郷原ニ陣城ヲ取構、地頭職トシテ、羽島越後守・宇宿小次郎ヲ居ラク所ニ、如何シタリケン、越後守弟僧識ハ鶴戸山之別當ニテ有シヲ、郷原ニ呼由、伊東方ヘ屬センコトヲ内談ス、僧識宣フハ、代々島津ノ家臣トシテ逆意不可然ト達テ、義談有シカハ、越後守思フヤウ、ナマシイナルコト申出シ、吾身ノ大夏トヤ思ハレケン、即坐ニ別當ヲ刺殺シ畢、扱コソ天文十四年巳十二月廿三日ニ、羽嶋・宇宿兩人郷原ノ城ヲ捧テ水尾ニ被參云々、同廿八日ニ日高方モ目井ノ城ヲ捧參ル云々、羽島越後守方ヘハ餘田五町ヲ被下、宇宿・日高方ニモ御恩給アリ云々、

2509の1

〔日新公御譜中〕

日新嘗嗜敷島之道故、以伊呂波四十有七字、置之於句上、綴四十七首、當時天下之宗匠宗養法師之備一覽、以問歌之六義卑陋、則宗養見之誦焉、每首以佳言自書其傍、豈

非名譽之至乎、世人書寫之、以爲末世之戒、其歌共記左方矣、

日新

いにしへのみちを聞ても唱ても

我をこなひにせずはかひなし

古の道も我行にせずはかひなき由、首尾よく調り、

末代の守と成て候、

樓の上もはにふのこやもすむ人の

こゝろにこそへたかきいやしき

人無高下、心有高下、

はかなくも明日の命をたのむかな

けふもくゝとまなひをさせて

勿謂、今日不學而有來日、このこと葉に相叶候、

にたるこそともしよけれ交はらは

我にます人おとなしき人

無友不如己者、

ほとけ神他にまします人よりも

こゝろにはちよ天地よくしる

人心生一念、天地悉皆知、

へたそとて我とゆるすな稽古たに

つもりは塵もやまと言の葉

高き山も麓のちりひちよりと侍るに相あたり候、

とかありて人をきるとも軽くすな

いかすかたなもたゝとつなり

非殺之爲後輩、非誠之爲助兆庶也、

智惠能は身に付ぬれと荷にならず

人はをもんしはつるものなり

理も法もたゝぬ世そとて引安き

こゝろの馬のゆくにまかすな

二首の心詞銘肝入骨候、

ぬす人はよそより入とおもふかや

みゝ目の門に戸さしよくせよ

耳目のかとの戸さし耳目を慰め候、

るつふすと貴人や君か物かたり

はしめてきけるかほもちそよき

つかふる人の爲かくこそあらまほしく候、

小車の我あく業にひかれてや

つとむるみちをうしとみるらん

是をみてつとむる道に入侍らさらんや、

私をすてゝきみにしむかへねは

うらミもおこり述懐もあり

尤私を捨ん事毎々存合候、

學文ハあしたのしほのひるまにも

なみのよるこそ猶しつかなれ

學の道のいさめ目をよろこはしめ候、

よきあしき人の上にて身をミかけ

友はかゝみとなる物そかし

見賢思齋焉、見不賢而内自省也、

種となるこゝろの水にまかせすは

みちより外に名も流れまし

禮するは人にするかは人をまた

さくるは人をさくるものかは

兩首いつれと難申殊勝候、

そしるにもふたつあるへし大かたは

主人のためになる物としれ

衆惡之必察焉、衆好之必察焉、

つらしとて恨かへすな我人に

むくひくゝてはてしなき世そ

怨以報怨終不盡、草以火如消、恩以報怨終盡、水以

火如消、

願すはへたてもあらしいつハりの

世にまことある伊勢の神かき

まことをねかへとにや、

名をいまにのこし置ける人も人

こゝろもこゝろなにかおとらむ

いく度も吟返して此味を得度候、

樂も苦も時過ぬればあともなし

世にのこる名をたゝおもふへし

世に残る名をおほ方に心得けりと只今日を驚し候、

昔よりみちならすして嬌る身の

天のせめにしあハざるはなし

若人作不善得顯名者、人不害天必誅之、

うかりけるいまの身こそへ前の世と

おもへは今最後の世ならん

欲知過去因見其現在、欲知未來果見其現在因、

亥に臥て寅にはおくとゆふ露の

身をいたつらにあらせしかため

下旬感に堪かたく候、

のかるまし所をかねておもひきれ

時にいたりてすゝしかるへし

最後の大事をかねてならせとこそ、剛と云ける者も

教し由承置候、

おもほえすちかふものなり身の上の

よくをはなれて義を守れ人

おもほえすちかふへき事恥入候、

くるしくとすく道をゆけ九折の

すえはくらまのさかさまの世そ

始末の詞に見所おほく候、

やはらくといかるをいはゞ弓と筆

鳥にふたつの翼とをしれ

經文云、慈悲忿怒、譬如車輪、

万能も一しんとありつかふるに

身はしたのむな思案勘忍

下旬ありかたく候、

賢不肖もちひすつるといふ人も

かならずならは殊勝なるへし

普中行氏尊賢弗能用賤、不肖弗能去、

無勢とて敵をあなとることなけれ

多勢を見てもそるへからす

弓箭の道のいさめ無比類候、

心こそいくさする身の命なれ

そろゆれはいき揃ハねは死す

軍の端見るやうに候、

ゑかうには我と人とを隔つなよ

かんきんハよししてもせずとも

ゑかうの心を得て悦入候、

敵となる人こそハわか師匠とそ

おもひ返して身をもたしなめ

この師匠あたらしく驚愚眼候、

あきらけきめもくれ竹のこの世より

まよははいかに後のやミちは

りんゑの道あはれふかく候、

酒も水なかれも酒となるそかし

たゝなさけあれ君かことの葉

一簞醪不能味一河水といへり、ことに情ふかく興を

もよほし候、

きく事も又見ることも心から

みなまよひなりミなさとりなり

心からの迷さと眼目前候、

弓を得てうしなふことも大將の

こゝろひとつの手をははなれず

得弓与矢弓、豈離楚王乎、

めくりては我身にこそへつかへけれ

先祖のまつり忠孝のみち

忠孝の道我身のつかへと成由、又眼前候、

みちにたゝ身をは捨んとおもひとれ

かならずてんのたすけあるへし

道にすてん身ハ猶かろく成て候、

したゝにも齒のこはきをハしる物を

人はこゝろのなからまじやハ

舌能存齒、剛則折也、

酔るよをさましもやらて盃の

無明の酒をかさぬるはうし

句々のことハりに今四の誠まで思ひ出し候、

獨身をあはれとおもへ物ことに

民にはゆるすこゝろあるへし

もろくの國やところの政道は

人にまつよくをしへならハせ

ゆるす心も教ならハせも、とりくにあはれひふか

く候、

善にうつりあやまれるをは改よ

義不義はむまれつかぬもの也

過則勿憚改、

すこしきをたれりもしれみちぬれハ

月もほとなきいさよひのそら

經文云、少欲知足、

2509の3

右の歌は、嶋津相模入道日新此みちをもてあそふ心さし

の浅からざりしゆへに、ひろくまなひ、とをくもとめて

いひいたせることハの花、残れる木のもともなく、おも

ひの露もれたる草かくれもなし、わかき老たるをいハす、

心をとゝめ見侍らハ、この四十七首を出して、よきあ

しき天か下のことわさをしり侍らん、教誠のはしと成へ

き物にや、童蒙求我たくひならんかし、けにふかくねさ

せる心の心のたね、かくあらハれぬることの葉は、くれ

竹の世々にもまれなる事になん、是を見せ侍りし宗養法

師一筆しるし付侍れかすと、わりなけれハはかりの關

のはかりなから、いさゝかをろかなる心をのへ侍る事

2510

「正文有之」

准三宮在判

以前度々以書狀申候、定可相達候哉、返事不到來候、無心元候、抑此一卷遂一覽候、執々面白絶言語候、寄妙々、仍奥書乍斟酌書付候、外見其憚多事候、心事尚重而可申述候也、狀如件、

(天文十五年)

正月七日

(近衛權亮)

(花押)

嶋津相模入道殿

2511

「正文在島津安藝守久雄」

雖未能申馴儀候、(兵庫助久忠)春成下國之条、難過好便、令啓上候、

仍若輩御教訓御詠拜見仕候處、餘金言就難打置、(近衛)近衛

殿樣備上覽、御奥書申調候、則被成 御書候、委曲之趣

兵庫助可被申入候、何様不圖罷下、御礼可申述候、此等

之趣、可然之様御披露所希候、恐々謹言、

〔朱力字〕

〔天文十五年〕正月十六日

宗養(花押)

野村兵部少輔殿

2512の1

「日新公譜中」

(本文書ハ二五〇九の一号記事ト同文ニツキ省略ス)

(本文書ハ二五〇九の二号文書ト同文ニツキ省略ス)

(本文書ハ二五〇九の三号文書ト同文ニツキ省略ス)

(本文書ハ二五一〇号文書ト同文ニツキ省略ス)

(本文書ハ二五一一号文書ト同文ニツキ省略ス)

2515

「加世田春成氏由緒書」

一日新様伊呂波歌被遊御詠、花之本江點取ニ被召上候節、

春成兵庫助事、兼而歌學仕候ニ付、御使者被仰付、主

從十餘人ニ而上京仕、右之御歌花之本ニ持參申候ニ付、

宗養一首拜見被仕、殊之外被致褒美候而、則 近衛様江

被懸御目候處ニ、一首被遊御覽御意候者、遠國人之詠

半松齋

宗養

野村兵部少輔殿

歌左茂面白有之間敷と被思召候處ニ、致相違、一首を以始終被察候と、別而御賞美被成候、是ハ凡人之非詠歌迎、被改衣冠御覽爲被成之由候、其節兵庫事 近衛様江致御目見得候處ニ、定家卿之御筆拜領仕候事、但右御筆者、寛永十四年十二月二日之出火ニ焼失申候、

2516 「全」

一右御詠歌之首尾相濟、宗養法師ニ歌道之稽古共仕、無恙罷下、御詠歌 忠良公御覽被遊、別而御喜悅被遊候事、

2517 「全」

一京都より罷下候節、宗養法師も預書狀候、市正殿當所御地頭之節、右之狀被成御覽、其通ニ而召置候者、紛失可仕儀も可有之由候而、表具被仰付被下候而、于今所持申候事、

2518 「季安考」

一右之市正殿者、家久公御子忠廣御事ニ而、後者萬山

殿と申上候、寛文七未十二月御家老職、同九年三月も延寶八申十二月迄加世田地頭之由、其年間之事ニ可有御坐云々、右之通加世田春成刑部左衛門元祿五年坎、十一月由緒書出ニ有之、尤右御詠歌之奥ニ、植家公爲被遊御跋ニ茂、是をミせ侍し宗養法師一筆しるし付侍れかしと、わりなければと被爲書置、且御書茂被相添候間、右之申狀も無故事ニハ有御坐間敷候云々、

2519 「年代記」

丙午 天文十五年

此年 貴久麿島ニテ越年、如前々ノ伊地知・本田出頭、忠久下向自建久七年丙辰至乙巳、凡三百五十年坎、

2520 天文十五年丙午

二月十八日、入水紀伊介篤高日州鉄肥にて戦死、四月廿三日、或作村田式部少輔經家鉄肥にて戦死、木丹後・長友兵庫以上二人鉄肥戦死とあり、年月不詳、此ニ置埃考、

2521 「日新公御譜中在リ」

去年差下左大辨宰相候處、懇意由申候、祝着此事候、國(日野町資將)

中無事之段、於家門本望候、將亦造作之事、既貴久令領
狀上者、急度調候様、芳言肝要候、猶期後便候也、穴賢

〔天文十五年〕
二月廿九日
〔近衛權亮〕
〔花押〕

嶋津相模入道殿

2522 〔正文在本田作左衛門宣親〕

去年爲使、左大辨宰相差下候處、別馳走之段祝着此事候、

抑對貴久忠功無比類之由、於家門本望候、併國中安寧基

候、弥無油断義肝要候也、穴賢

〔十五年カ〕
二月廿九日
〔種家〕
〔花押〕

〔重親〕
本田紀伊守とのへ

〔上包〕
本田紀伊守とのへ
御判

2523

去年爲使、左大辨宰相差下候折節、條々取成候由申候、祝

着候、殊對貴久忠功無比類之様聞及候、尤可然候、弥馳

走候者、於家門可爲本望候也、穴賢

〔日野町實録〕
〔天文十五年〕
二月廿九日
〔種家〕
〔花押〕
嶋津上野守殿

2524

〔貴久公御譜中〕
〔正文在坊津一乘院〕

去年者与風御下向之處、色々御懇志之段御祝着不過之候、

仍内之御約束候一乘院被補 勅願所候、玆重候、則 繪

旨被下進候、其後何事共候哉、御床敷由候、壽藏主急便

候間、一筆令申候、必從是可被申候、恐々謹言、

〔朱力キ〕
〔天文十五年〕二月廿九日
將久〔花押〕

〔龜山重國〕
橘隠軒
御坊

〔上包〕
橘隠軒

御坊

〔右上包裏有之〕
本庄新次郎

2525

〔貴久公御譜中〕
〔正文在坊津一乘院〕

去年者始參會、誠以難忘存候、殊更條々御懇切共不知所

謝候、抑當寺被補 勅願所之由、則 繪旨召下候、併國

之面目不可過之候、猶期後便候也、恐々謹言、

〔朱力キ〕
〔天文十五年〕二月廿九日
〔日野町實録〕
資將〔正文ニ無判形〕

一乘院

〔上包〕
一乘院

資將

〔左兵衛尉尚久譜中〕

去年爲使左大辨守相差下候条、馳走祝着候、對貴久忠功之由聞及候、於家門悅入候、弥入魂肝要候也、穴賢く、

〔朱カキ〕
〔天文十五〕二月廿九日

嶋津又五郎殿

〔重親〕
〔花押〕

去年懇々音信尤以本望候、抑殿祈事内々申候處、嶋津三郎左衛門尉領狀候、祝着此事候、雖然連々無心元候、急度京着候様馳走偏頼入候、猶日野中納言可申候也、かし

二月廿八日

本田紀伊守とのへ

〔重親〕
〔重家〕
〔花押〕

〔上包〕

本田紀伊守とのへ (花押)

〔貴久公御譜中ニ天文十六年ト朱カキアリ〕
〔正文在本田作左衛門宣親トアリ〕

去年下國候處、條々御入魂、殊懇意至共祝着無極候、抑爲家門被成下直書候、尤御眉目之至候、將亦御殿新造之事無相違申御沙汰候様、各馳走肝要候、尚差下使者可申候條、不能詳候也、謹言、

二月廿九日

本田紀伊守殿

〔日野町實將〕
〔花押〕

幸便之条令啓候、去年者懇札殊種々重寶令祝着候、公私御報申候、相届候哉、抑嶋津御請被申候御殿料之事、于今御無音、於私令迷惑候、先不寄大少京進候様、別而御馳走頼入候、委曲宗覺可申候也、謹言、

三月二日

本田紀伊守殿

〔日野町實將〕
〔花押〕

〔貴久公御譜中〕

〔正文在坊津一乘院〕

當院事、爲勅願之淨場、宜奉祈 皇家之再興由、天氣所候也、仍執達如件、

天文十五年三月四日

左中辨(花押)

一乘院法印御房

〔上包〕
一乘院法印御房

左中辨國光

依無指題目、不能書信候、背本意候、抑就家門由緒之儀、雖其憚多候、助成之事連々申候、此節以馳走相調候様頼

入計、猶不断光院可有演說候也、かしこ、

三月五日 (植家)
(花押)

河上上野守とのへ

2532 「正文在文庫 福昌寺文書」

當寺爲 勅願之淨場、宜奉祈皇家再興之由、天氣所候也、

仍執達如件、

天文十五年三月八日

權大辨(花押)

福昌寺住持和尚

2533 「貴久公御譜中」

「正文」

珎翰本望候、其後曾以無音信候條無心元候折節、且令滿

足候、抑先年約束之儀、無相違之由候、祝着此事候、尚

々嚴重急度被申付、於京着者、併家門再興之儀者勿論、

弥被相叶、祖神之冥慮可爲武運長久之基候、別而馳走偏

頼入候、將又段子貳端、如芳札到來、喜悅之至候、仍短

尺寸枚乍憚染筆候也、狀如件、

〔朱カキ〕
〔天文十五年秋〕四月六日 (植家)
(花押)

嶋津三郎左衛門尉殿

2534 其後遙久閣筆候、疎遠之至候、仍一冊 近代秀歌、雖其憚多候、

染筆進之候、心底申含宗覺候、馳走頼入候也、かしこ、

〔天文十五年比之〕
壬五月十四日 〔植家公〕永祿九年七月十日義、懸雲院
(花押)

肝付河内入道殿

2535 嶋津家御重物

御旗二流左ノ如シ

一時雨御旗 天文十五年丙五月吉日
藤原朝臣貴久

一白御旗 全断

〔外ニ文覺上人染筆ノ御旗、頼朝公御讓八幡大菩薩トアリ〕

2536 「貴久公御譜中」

〔案文在本田作左衛門宣親〕

御書謹奉拜戴、過當此事候、抑嶋津就 御門家之累葉、

去年御上使御下着、面目之至被奉存候、盡未來弥可奉仰

之段、以此旨、具可預御披露候、誠惶誠恐謹言、
(本田)

〔天文十五年〕
六月五日 前紀伊守董親

〔近衛殿御請文〕

進上 〔日野殿御事也〕
左大辨宰相殿

〔世戸口美作守伊勢・高野へ參候時御傳達候〕

「日新公御譜中」

兼又當年中、御新詠共承度計候、後音被成下候者、

可爲本望候、

春成^(久正)兵庫助下國之時節、乍聊爾捧愚札候之處、則貴報拜

見、寔數年遂大望、快然此一事候、抑彼御新作之御詠、

於爰元各寫留、老后教訓無他事候、^(種老)御家門様にも常々

被仰出所候、就御奥書之儀、爲御礼沈香三斤御進上、尤

御祝着之由候、將亦拙者ニ一斤拜受、過分之至候、心事

春兵、^(朱力)さて令申候条、不能詳候、恐々謹言、

「天文十五年」八月廿九日

宗養(花押)

阿多但馬守殿

「上包」
半松齋

阿多但馬守殿

宗養

身 見聞こと人の上とてそしるなよ

の ちはわか身にむくひ社すれ

の のかれぬぬいのちを惜む人へた々

誠の道をしらぬ故なり

ほ ほしとて無理をいひ取人の身へ

た々霜かれの草のことくに

と 友たちと思ひなからも敵とみよ

親にならてハ心ゆるすな

お おこたらず我道くを^レする人は

なに^レつけても頼母敷かな

し 知ぬこと物云たてをする人は

後はわか身のあたと社なれ

れ 連々に主人親子のあひたには

た々忠孝の道を案せよ